出雲市白枝北土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

壱丁田遺跡第３次発掘調査報告書

２００６年３月

出雲市教育委員会

出雲市白枝北土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

壱丁田遺跡第３次発掘調査報告書

２００６年３月

出雲市教育委員会

序

出雲市文化財課では、出雲市白枝北土地区画整理組合(理事長　松原和夫)からの依頼を受け、出雲市白枝北土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりましたが、今年度の調査報告書の刊行をもって終了する運びとなりました。本書は、平成16、17年度に発掘調査を実施した壱丁田遺跡第３次発掘調査の成果をまとめたものです。

本書に掲載した壱丁田遺跡からは、中世から近世初期にかけての土壙墓や昆虫遺体を含む井戸などが確認されています。こうした調査成果は出雲地域の歴史を解明していく上でも貴重な資料になるものと思われます。本書が地域の埋蔵文化財に対する理解や歴史解明の一助になれば幸いに存じます。

この遺跡の発掘調査中、出雲市・平田市・大社町・湖陵町・多伎町・佐田町の２市４町による市町村合併が実施され、出雲市の文化財行政も広域に及ぶこととなりました。今後も貴重な成果が得られ、郷土の歴史が解明されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり御協力いただきました地元の皆様をはじめ、関係の方々に対して心から御礼申し上げます。

平成18年３月31日

出雲市教育委員会
教育長　黒目　俊策

例　　言

1．本書は、出雲市白枝北土地区画整理組合（理事長　松原和夫）の依頼を受け、市文化財課が平成16、17年度に実施した壱丁田遺跡第３次発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、下記の期間において実施した。

平成17年１月24日～６月17日

3．発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

出雲市白枝町６６７番地ほか

4．調査は次の組織で行った。

平成16年度（現地調査）

平成17年１月24日～３月21日

［事　務　局］板倉　優（出雲市芸術文化振興課長）、川上　稔（出雲市文化財室長）

［調　査　員］遠藤正樹（出雲市文化財室　副主任主事）

高橋亜紀（同　臨時職員）

平成17年３月22日～31日

［事　務　局］神門　勉（出雲市文化財課長）、川上　稔（出雲市文化財課主査）

［調　査　員］遠藤正樹（出雲市文化財課　主任）

高橋亜紀（同　臨時職員）

平成17年度（現地調査、報告書作成）

［事　務　局］神門　勉（出雲市文化財課長）、川上　稔（出雲市文化財課主査）

［調　査　員］遠藤正樹（出雲市文化財課　主任）

高橋亜紀（同　臨時職員）

5．本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

ＳＤ－溝状遺構、ＳＫ－土壙、ＳＸ－土壙墓、ＳＥ－井戸、Ｐ－ピット状遺構

6．本書で示した方位は真北を示す。

7．本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

8．本書掲載遺物の実測については、遠藤のほか、高橋亜紀が行った。また、写真撮影については、遠藤が行った。

9．本書の執筆、編集は遠藤が行った。

10．鳥取大学医学部教授　井上貴央氏及び同助手　川久保善智氏、島根県立三瓶自然館サヒメル指導員　皆木宏明氏からは玉稿を賜った。

11．発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々に御指導、御協力を賜った。

井上貴央（鳥取大学医学部教授）、川久保善智（同助手）、中村唯史、皆木宏明（以上島根県立三瓶自然館サヒメル指導員）、西尾克己（島根県教育庁文化財課副主査）、石飛謙治（出雲土建株式会社）

12．遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事していただいた。

鵜口令子、岩崎晶美、遠藤恭子、深津光子

目　　次

序　　文
例　　言
目　　次

本　文　目　次

第１章　位置と環境 ……（遠藤）……1
第２章　調査に至る経緯 ……（遠藤）……4
第３章　調査の概要 ……（遠藤）……5
　１．遺構と遺物 ……（遠藤）……5
　　ａ）溝状遺構
　　ｂ）土　壙
　　ｃ）土壙墓
　　ｄ）井　戸
　　ｅ）ピット
　２．包含層出土遺物 ……（遠藤）……44
　３．その他の出土遺物 ……（遠藤）……50
　４．まとめ ……（遠藤）……52
第４章　自然科学分析 ……（遠藤）……53
　１．壱丁田遺跡から出土した人骨について ……（井上貴央）……53
　２．壱丁田遺跡第３次発掘調査出土の昆虫遺体について ……（皆木宏明）……55

出土遺物観察表
写真図版
抄　　録

第１章　位置と環境

南北を山地に挟まれた出雲平野は、南側の中国山地から北流してきた斐伊川と神戸川の沖積作用によって形成された平野である。現在の斐伊川は出雲平野で東流し宍道湖に注ぎ、神戸川は西流して日本海に注いでいる。出雲平野がこのような景観となったのは、江戸時代の松江藩の水利政策に依るところが大きいが、奈良時代に勘造された『出雲国風土記』によると、出雲平野西部には、周囲約18kmに及ぶ「神門水海」という潟湖が存在していたことが記載されており、広範囲を汽水域が占めていた。この時代の斐伊川・神戸川はともに西流し「神門水海」に注いでいたようである。壱丁田遺跡(1)はその汀線付近の平野中央やや北寄りの微高地上に立地している。

縄文時代

出雲平野の遺跡の初源は縄文時代早期末で、平野北西端の菱根遺跡(51)と平野西部の砂丘下にある上長浜貝塚(48)が知られている。その後も前期末から中期にかけて上ヶ谷遺跡(59)(斐川町)が知られるが、平野南部ではやや遅れ、中期の土器が出土している三田谷Ⅲ遺跡(26)が初源である。後・晩期になると平野縁辺部を中心に遺跡も増え、平野南西部に御領田遺跡(47)、三部竹崎遺跡(46)、南部に三田谷Ⅰ遺跡(26)、築山遺跡(21)、南東部に後谷遺跡(58)(斐川町)、北西部に原山遺跡(50)・出雲大社境内遺跡(53)が出現するほか、平野中央部においても矢野遺跡(3)、善行寺遺跡(11)などの遺跡から、後・晩期の遺物が出土している。

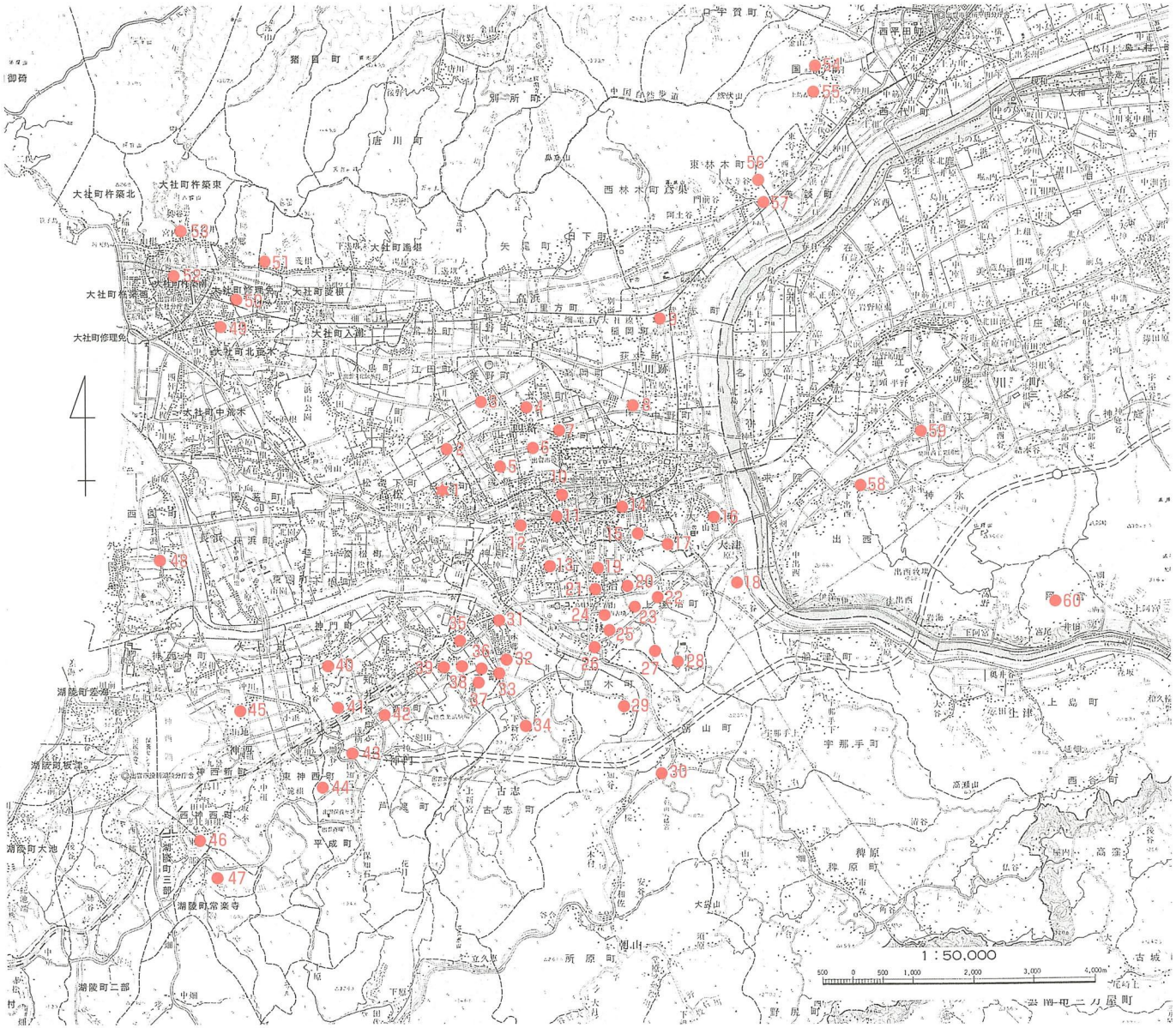
弥生時代

弥生時代前期に縄文後・晩期から継続する浅柄遺跡(42)、三田谷Ⅰ遺跡、矢野遺跡が引き続き展開する。中期になると、斐伊川・神戸川の氾濫による流路の変化や沖積作用によって形成された微高地上に、広範囲にまとまった大規模集落が営まれるようになる。その中でも天神遺跡(12)、古志本郷遺跡(31)、下古志遺跡(35)は、環濠の存在が明らかになっており、環濠集落としての大きな居住地が形成されていたと考えられている。その他では矢野遺跡、田畑遺跡(38)、白枝荒神遺跡(2)、知井宮多聞院遺跡(40)、海上遺跡(10)などが知られる。一方、北山山麓の扇状地に立地する青木遺跡(57)からは、初源期の四隅突出型墳丘墓が検出され注目を集めている。後期になると、平野内一円に遺跡が広がり、小山遺跡(4)、中野美保遺跡(8)、姫原西遺跡(7)など、沖積地上にも集落が営まれる。墳墓では青木遺跡で四隅突出型墳丘墓が引き続き造墓されたほか、中野美保遺跡でも造墓された。一方、平野南側の丘陵上には西谷墳墓群(16)が出現し、丘陵上でも四隅突出型墳丘墓が築造される。西谷３号墓ではその出土土器より吉備や北陸との交流があったことが指摘されている。三田谷Ⅰ遺跡から出雲地方では珍しい方形周溝墓も検出されている。

古墳時代

古墳時代に入ると多くの集落遺跡は衰退するが、井原遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、浅柄遺跡、山持遺跡などで集落跡が見つかっている。しかしこの時代の集落の様相は不明な点も多い。

一方、古墳の様相については比較的明確である。古墳時代前期には平野の周辺に、筒形銅器や鏡を持つ山地古墳(45)や県内最古の前方後円墳である大寺１号墳(56)、割竹型木棺を安置した古墳の粘土槨か



1．壱丁田遺跡
2．白枝荒神遺跡
3．矢野遺跡
4．小山遺跡
5．渡橋沖遺跡
6．蔵小路西遺跡
7．姫原西遺跡
8．中野美保遺跡
9．荻杼古墓
10．海上遺跡
11．善行寺遺跡
12．天神遺跡
13．神門寺境内廃寺
14．今市大念寺古墳
15．向山城跡
16．西谷墳墓群
17．菅沢古墓
18．瀧谷山城跡
19．上塩冶築山古墳
20．上塩冶横穴墓群
21．築山遺跡
22．狐廻谷古墳
23．大井谷城跡
24．上塩冶地蔵山古墳
25．半分城跡
26．三田谷遺跡
27．光明寺3号墓
28．大井谷Ⅱ遺跡
29．小坂古墳
30．朝山古墓
31．古志本郷遺跡
32．古志遺跡
33．放レ山古墳
34．栗栖山城跡
35．下古志遺跡
36．浄土寺山城跡
37．妙蓮寺山古墳
38．田畑遺跡
39．宝塚古墳
40．知井宮多聞院遺跡
41．神門横穴墓群
42．浅柄遺跡
43．浅柄Ⅱ遺跡
44．北光寺古墳
45．山地古墳
46．三部竹崎遺跡
47．御領田遺跡
48．上長浜貝塚
49．南原遺跡
50．原山遺跡
51．菱根遺跡
52．鹿蔵山遺跡
53．出雲大社境内遺跡
54．中村１号墳
55．上島古墳
56．大寺古墳
57．青木遺跡
58．後谷遺跡
59．上ヶ谷遺跡
60．天寺平廃寺

第１図　壱丁田遺跡周辺の遺跡

ら、布が付着した鉄剣が出土した浅柄Ⅱ遺跡(43)、西谷墳墓群の一角にある西谷７号墓が築造される。中期に入っても北光寺古墳(44)、西谷15号墳、16号墳などが築造されるものの、古墳の数はあまり増加しない。後期に入ると多くの古墳が築造されるようになり、神戸川東岸に今市大念寺古墳(14)、上塩冶築山古墳(19)、上塩冶地蔵山古墳(24)といった首長墓が連続して築造され、西岸では、放レ山古墳(33)、妙蓮寺山古墳(37)、宝塚古墳(39)などが築造される。終末期になると徐々に古墳の数は減り、横穴墓の築造が主流となる。特に古墳時代後期より造られ始めた神戸川西岸の神門横穴墓群(41)(約100穴)と東岸の上塩冶横穴墓群(20)(約180穴)は全国最大規模の横穴墓群で、終末期における２大墓域としての性格を持つと考えられる。上塩冶横穴墓群の中には、金糸や装飾大刀を副葬する横穴墓も確認されている。しかし周辺では、三田谷２号墳・３号墳、光明寺４号墳、大井谷古墳、狐廻谷古墳(22)といった後期から終末期にかけての古墳も確認されており、全ての古墳が横穴墓に取って替わられたわけではないようである。

古代

古代には出雲平野には神門郡と出雲郡の２つの行政区画が定められた。この「郡」を統括していた官庁が「郡家」である。発掘調査の成果により、神門郡家は古志本郷遺跡、出雲郡家は後谷遺跡周辺に比定されている。古志本郷遺跡では大規模な掘立柱建物跡が検出されており、神門郡家の郡庁と考えられているほか、郡家の神戸川を挟んだ対岸にあたる三田谷Ⅰ遺跡から、墨書土器のほか「高岸神門」などの木簡、緑釉陶器などが出土し、神門郡の出先機関とみられている。一方、出雲郡の出先機関とみられる青木遺跡からは600点にも及ぶ多量の墨書土器のほか、国内最古の神像、絵馬、売田券木簡、墨書土器などが発見されている。また平野北西部の鹿蔵山遺跡(52)からは、奈良三彩、緑釉陶器、腰帯金具、墨書土器などが出土しており、官衙施設を含めた性格が考えられている。古代寺院では、733年勘造の『出雲国風土記』に記載される神門郡朝山郷新造院と出雲郡河内郷新造院が、それぞれ神門寺境内廃寺(13)と天寺平廃寺(60)(斐川町)に推定されている。平野南側の丘陵谷奥に所在する大井谷Ⅱ遺跡(28)では、遺跡を南北に横切る大溝から仏教関連遺物が出土しており、遺跡北側に所在する般若寺周辺に古代寺院の存在が考えられている。また、塩冶地区及び朝山地区では、石製骨蔵器を持つ古墓で、墳丘がある特異な構造の光明寺３号墓(27)が、古墳時代から奈良時代への火葬墓の過渡期の様相を示している。この地域では、県内で確認された石製骨蔵器５例のうち、菅沢古墓(17)、朝山古墓(30)、小坂古墳(29)を含めた４例が確認されている。

中世

中世には、出雲守護職の佐々木氏が塩冶郷に守護所を置き、塩冶地域が出雲国の中心地となる。蔵小路西遺跡(6)からは、朝山家惣領家の可能性が指摘されている館跡が検出されているほか、渡橋沖遺跡(5)、矢野遺跡からも館跡が確認されている。これらはそれぞれ12世紀後半～15世紀前半頃、13～14世紀頃、14～15世紀頃と考えられている。古墓としては龍泉窯系青磁の優品が出土している荻杼古墓(9)が著名であるほか、姫原西遺跡からは木棺墓が検出されている。さらに社寺関連遺跡としては、出雲大社境内遺跡から巨大本殿遺構が確認されているほか、大井谷Ⅱ遺跡からは寺院跡が検出されており、全国的にも珍しい瀬戸の灰釉燭台が出土している。山城は市内の各所に点在しているが、向山城(15)、大井谷城(23)、半分城(25)、瀧谷山城(18)などがあり、なかでも向山城は、鎌倉時代の悲運の武将、塩

冶判官高貞の居城と推定されている。

近世・近代

近世に入ると、松江藩の土地政策により斐伊川の河川改修が実施された。網状河川であった斐伊川は、この改修により一本の大河川に統合され、出雲平野の新田開発が進むことになる。斐伊川西岸には来原岩樋、間府岩樋が開削され、物資輸送や農業用水の確保に利用された。このような松江藩の水利政策は、出雲平野を有数の穀倉地帯にした。平野中央部の小山遺跡(第２地点)では、近世の豪農成相家の館跡が調査されている。農業の発展とともに産業の発展も顕著であった。奥田儀の宮本の地では、田儀櫻井家が数百人の従事者を抱えて製鉄業を経営し、出雲西部地域の一大産業となった。その繁栄期には、製鉄の神を祀る金屋子神社や櫻井家の菩提寺である智光院も建立されている。

幕末には欧米諸国のアジア進出に伴い、日本近海に外国船が出現するようになる。出雲西部地域でも松江藩が幕府の命を受け、海防のための台場を設置した。十六島湾でも河下台場、網屋浜台場などが構築されており、当時の松江藩の海防状況を知る上で貴重な資料となっている。

第２章　調査に至る経緯

出雲市白枝北土地区画整理組合設立準備委員会(委員長　松原和夫)が計画する、出雲市白枝北土地区画整理事業予定地内の遺跡の有無について、照会を受けた出雲市文化財室は、平成14年に試掘調査を実施した。当地は周知の遺跡の範囲には含まれていなかったが、試掘調査の結果、遺構・遺物を確認し、遺跡の分布状況から、土地区画整理道路予定地の一部分について、発掘調査が必要であることを回答した。これに対し準備委員会は事業地内道路予定地部分について、市文化財室に本調査の依頼をされたが、その後事業の進捗とともに線形が一部変更され、追加の試掘調査が必要となった。追加調査の結果、本調査予定面積は約1,100㎡に微増することとなった。市文化財室は組合設立後に法人格を有する組合と受託契約を締結した上で発掘調査を実施する予定でいたが、組合の設立認可が大幅に遅れ、発掘調査の開始も大幅に遅れた。

発掘調査は出雲市白枝北土地区画整理組合(理事長　松原和夫)が設立認可を受けた後、平成17年１月14日に受託契約を締結し、同月24日から全調査区の西側部分である１区の調査を実施した。なお早期に用水路を開通する必要性から３月31日に１区のみの概要報告及び意見書を提出している。

この間、１区調査実施中の３月22日に、出雲市・平田市・大社町・湖陵町・多伎町・佐田町の２市４町による市町村合併が行われ、出雲市文化財室は出雲市文化財課となった。

翌平成17年度は１区東側に隣接する２区の調査を開始し、６月17日をもって現地調査を完了した。概要報告及び意見書は６月20日付で提出している。

第３章 調査の概要

調査は平成17年１月24日から本格的に作業員を導入して発掘調査を実施し、同年６月17日をもって現地調査を終了した。

調査区は東西路線予定地約200㎡及び南北路線予定地約250㎡の約450㎡（１区）と、現行の排水路西側の路線予定地約400㎡及び排水路東側の路線予定地約210㎡の約610㎡（２区）である。調査は表土を約20㎝重機掘削した後（重機の入らない場所については手掘りで行った）、堆積土を手掘りにより徐々に下げ実施した。付近で実施された工事ボーリングの結果から、古地形は１区南北路線予定地付近が最も標高が高く東西に下がる。また古地形は北側よりも南側が高くなっており、試掘調査で確認した遺跡の広がりとも対応している。全調査区の基本的な層序は、第①層　耕作土、第②層　青灰色粘砂、第③層　褐灰色粘砂、第④層　灰黄褐色粘土、第⑤層　暗褐色粘土、第⑥層　暗褐色粘砂、第⑦層　褐灰色砂質土で、２区では第③-Ｚ層　暗褐灰色土、第④-あ層　暗灰黄色粘性シルト、第④-い層　灰オリーブ粘性シルト、第④-う層　灰褐色シルト（酸化鉄多量に混入）、第④-え層　暗灰褐色粘性シルト、第④-お層　褐灰色粘土が入る。第①～②層が耕作の影響を受けている層、第③層が土地改良時の層で、第④層上面から及び第⑤層上面から遺構を確認している。遺跡からは溝状遺構、土壙、土壙墓、井戸などが確認されており、その多くは第④層上面からのものであるが、標高の高い区域は土地改良で遺構面が大きく削平されており、遺構の下部のみが検出されている。第⑤層上面は遺構の大半が第④層が削平された標高の高い区域での検出で、出土遺物から本来第④層上面の遺構であったと考えられる遺構も含まれる。遺跡の広がりは第④層上面より狭いものと推定される。なお、第④層からは少量の遺物が出土し、第⑤層は無遺物層となっている。

１．遺構と遺物

ａ）溝状遺構

ＳＤ０６（第９・15図）

縦長12.00ｍ以上、横幅1.15ｍ、深さ0.37ｍを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～70°～Ｅを測る。

ＳＤ０５（第９・15・16図）

縦長12.70ｍ以上、横幅1.24ｍ、深さ0.37ｍを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～70°～Ｅを測る。

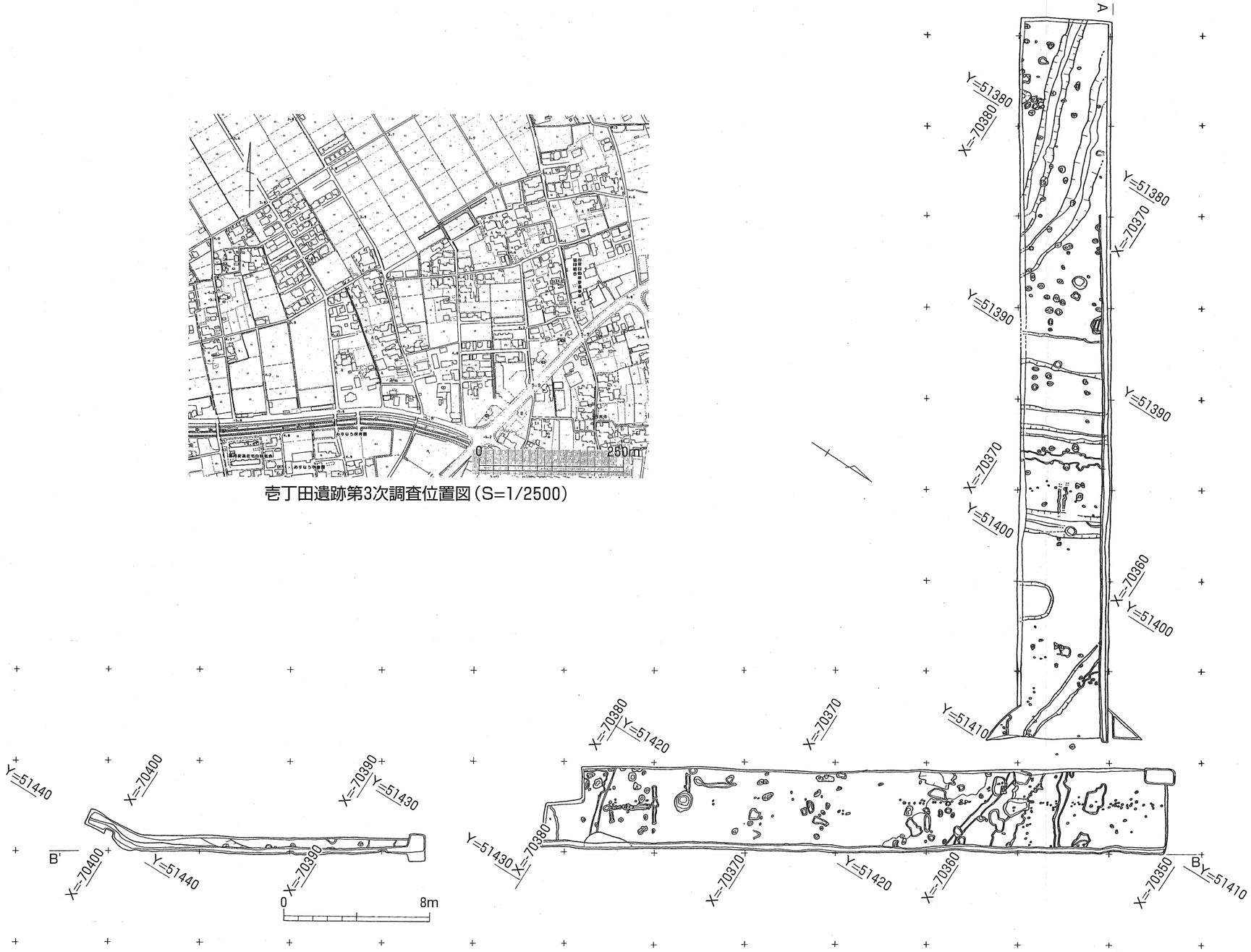
第16図１は弥生土器で、内面は風化のため調整不明であるが、外面に凹線及び刺突文が残る。２は赤瑪瑙の原石である。

ＳＤ０７（第９・15・17図）

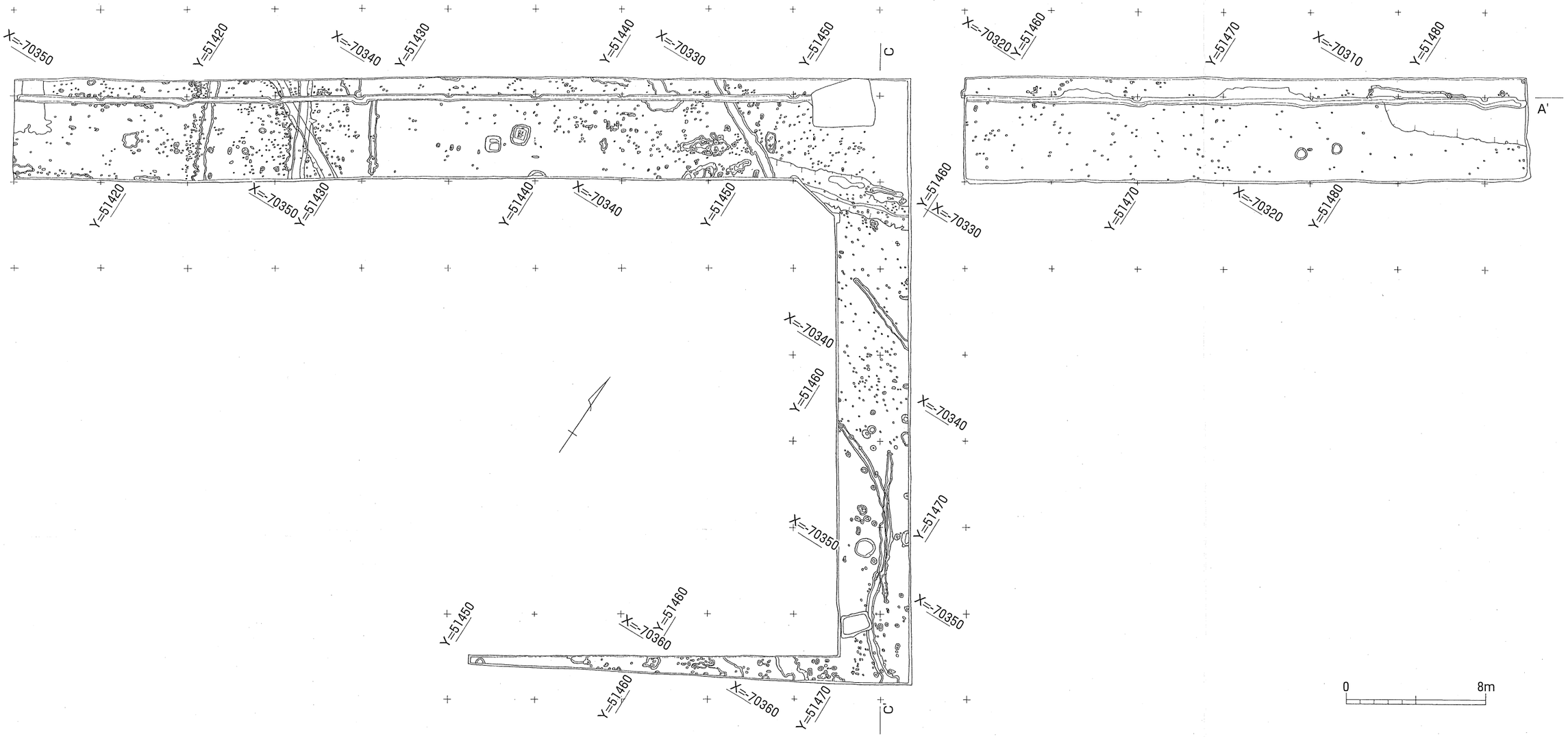
縦長4.22ｍ以上、横幅1.70ｍ、深さ0.36ｍを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～26°～Ｗを測る。

第17図１～４は土師質土器である。１は小皿で、内外面ともに回転ナデ調整を施すが、底部は風化が著しく調整不明である。器壁は内湾気味に立ち上がる。２～４は坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。２は底部は風化のため調整不明である。口縁部は外反気味に立ち上がる。３，４は底部に回

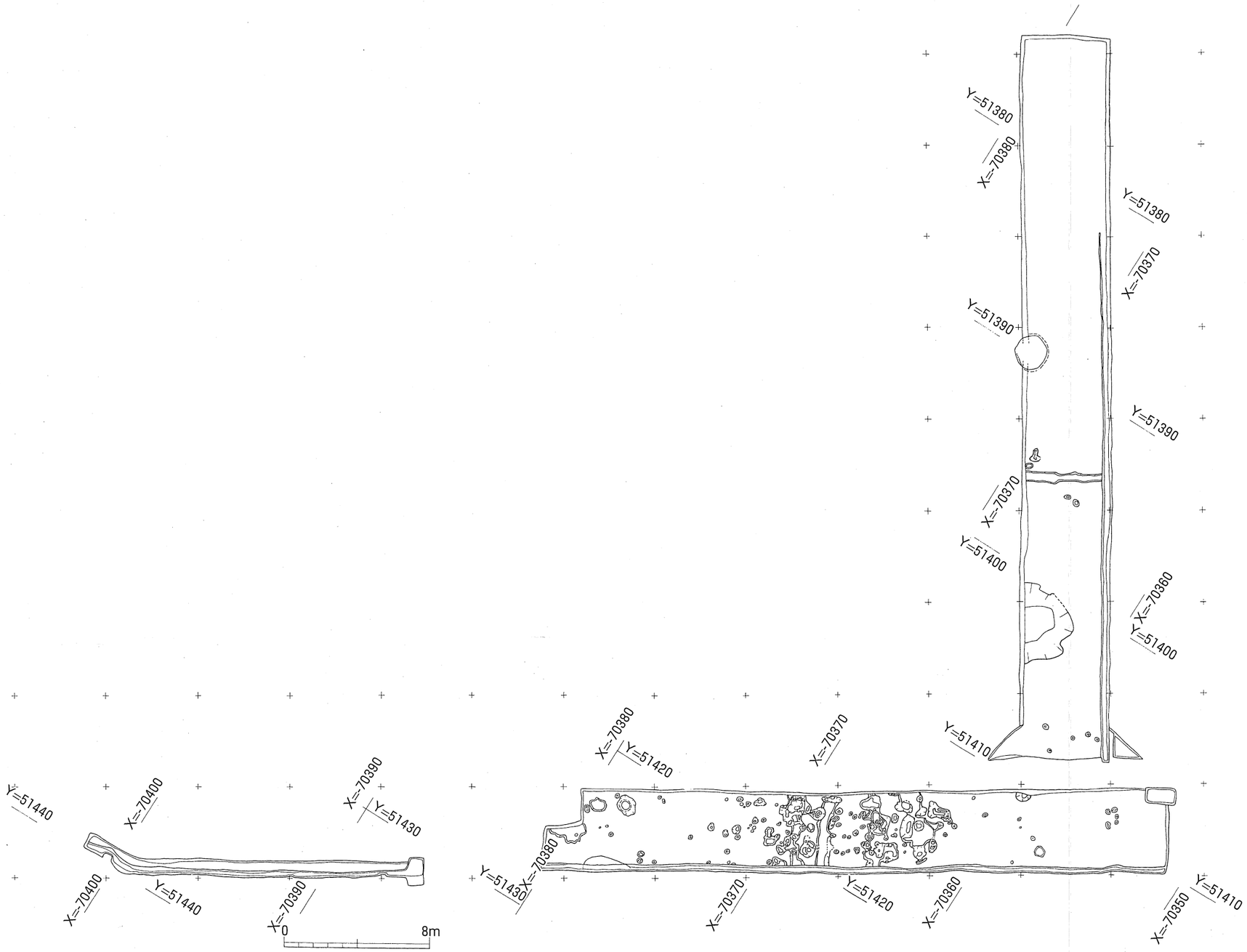
壱丁田遺跡第3次調査位置図（S=1/2500）



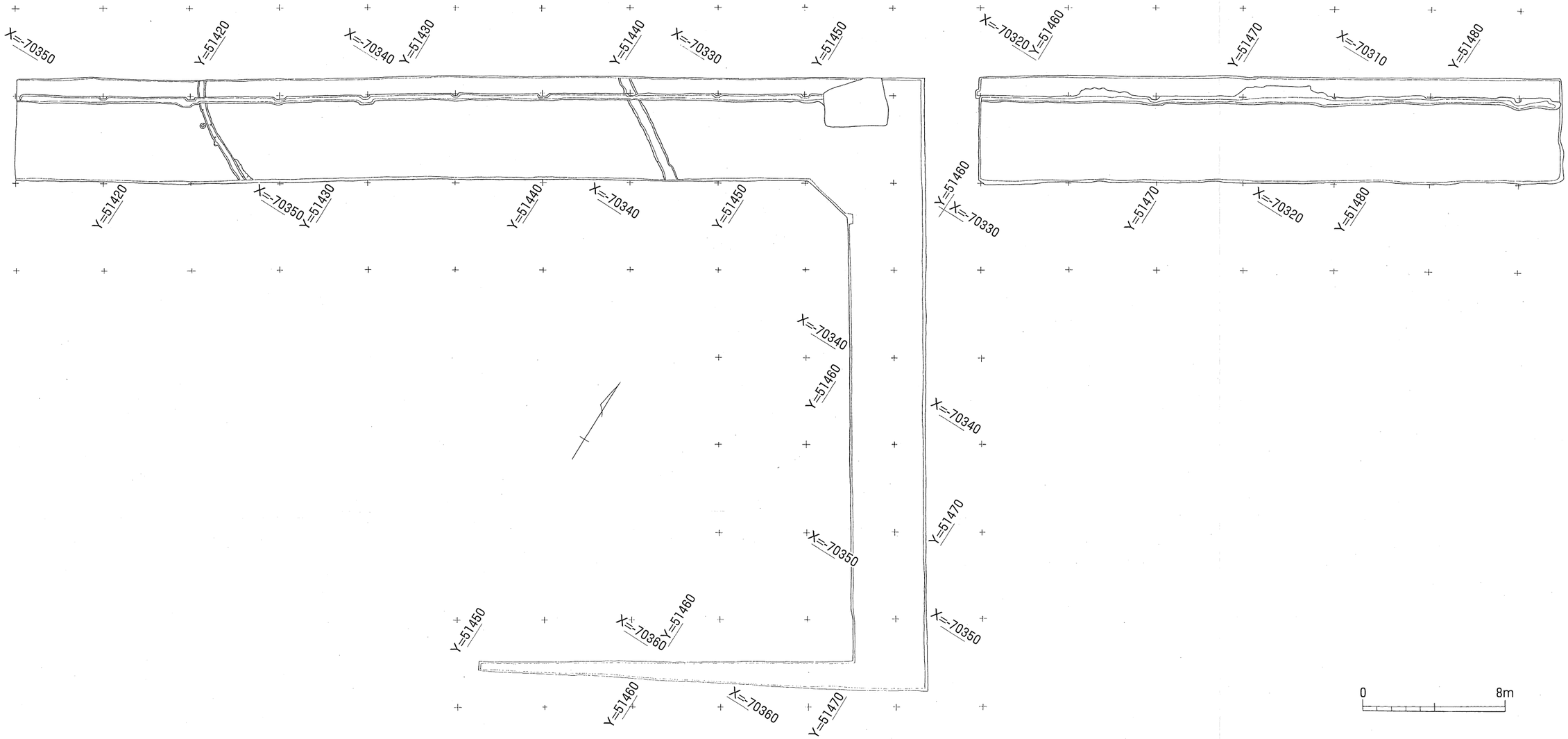
第２図　壱丁田遺跡第3次調査位置図（S=1/2500）・調査区西側全体図（第④層上面）（S=1/240）



第３図　調査区東側全体図（第④層上面）（S=1/240）



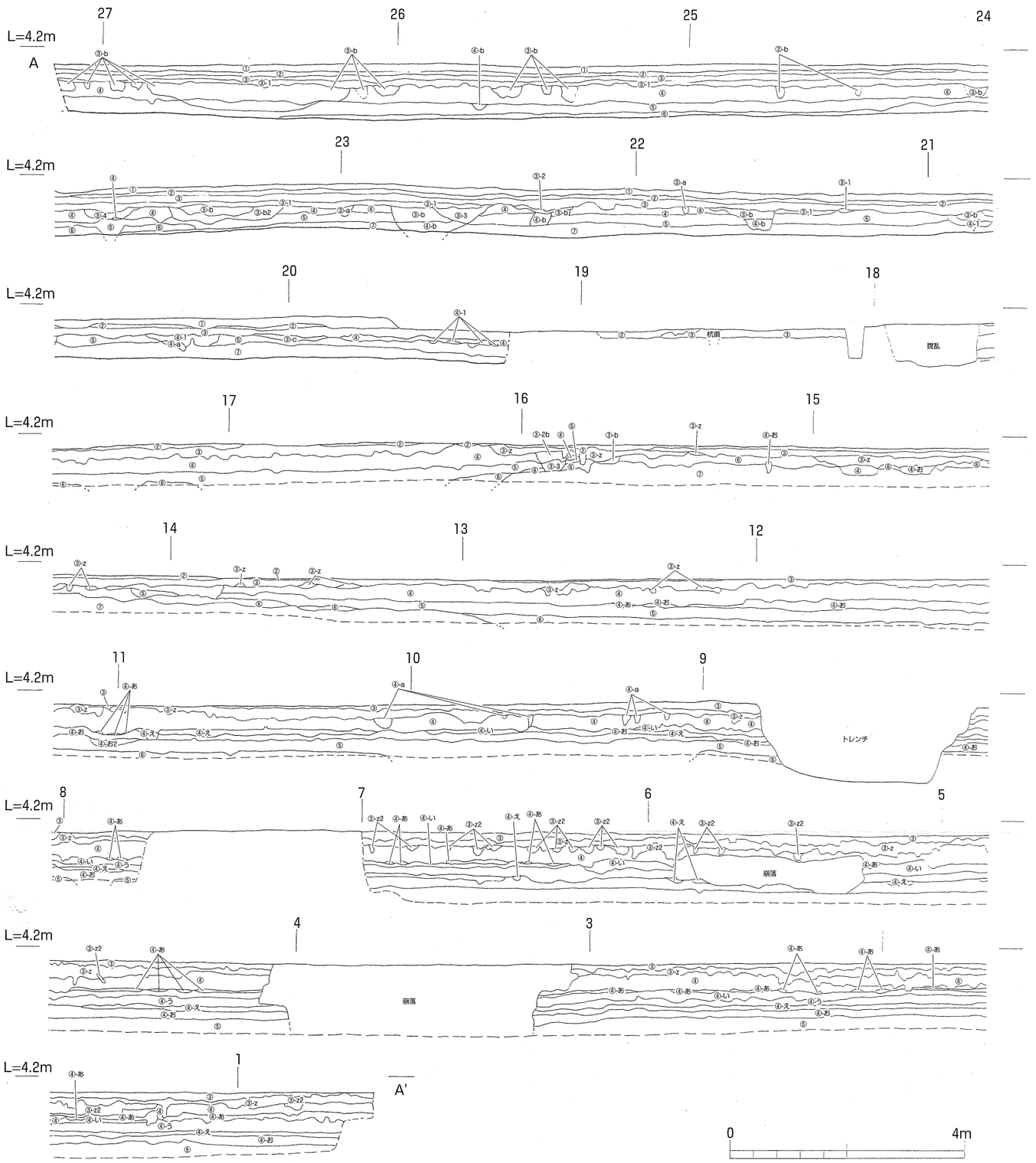
第4図　調査区西側全体図（第⑤層上面）（S=1/240）



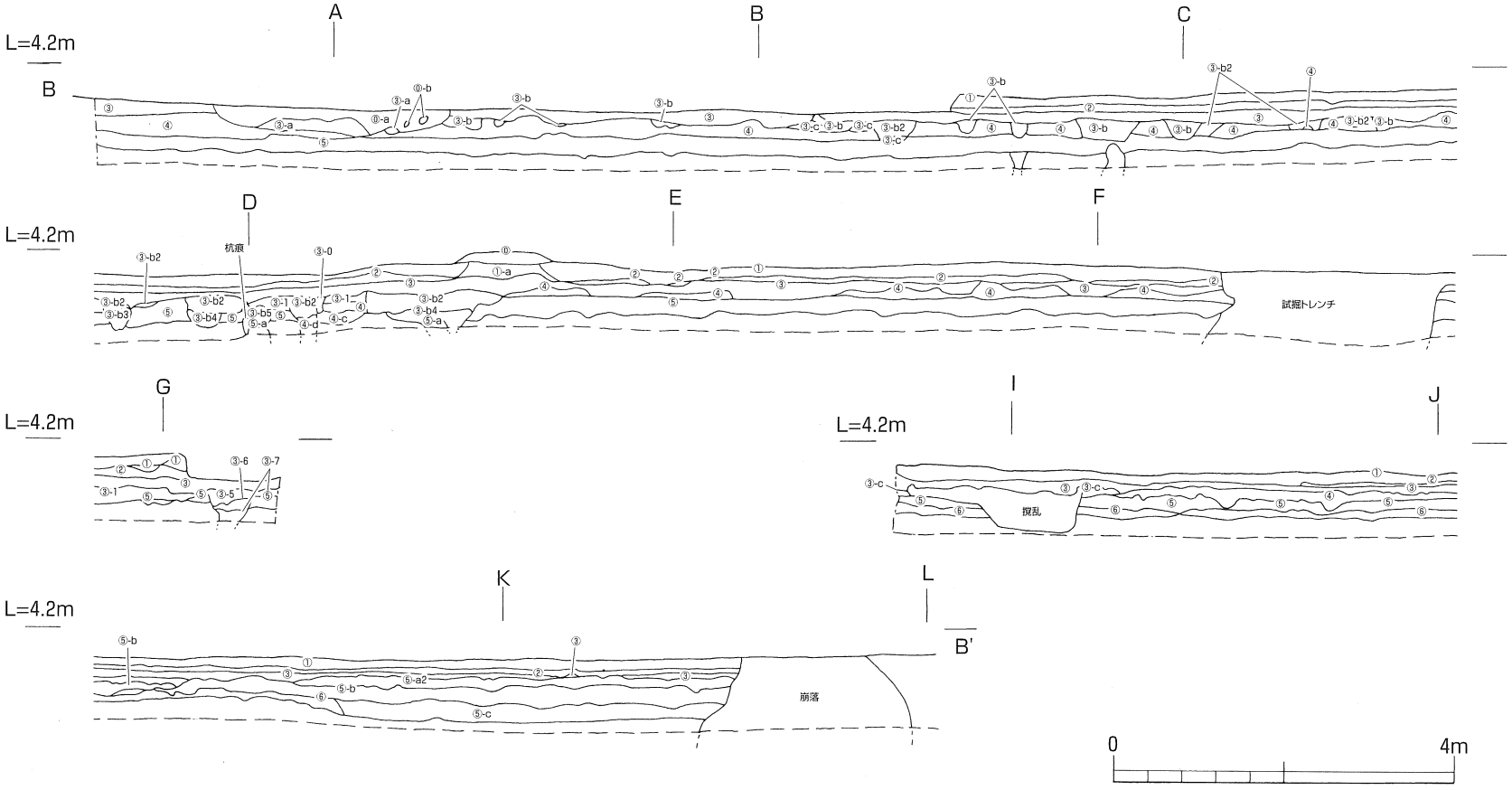
第５図　調査区東側全体図（第⑤層上面）（S=1/240）

0.盛土
　0-a　暗オリーブ灰色粘土
　0-b　暗褐色粘土（ブロック状に混入）

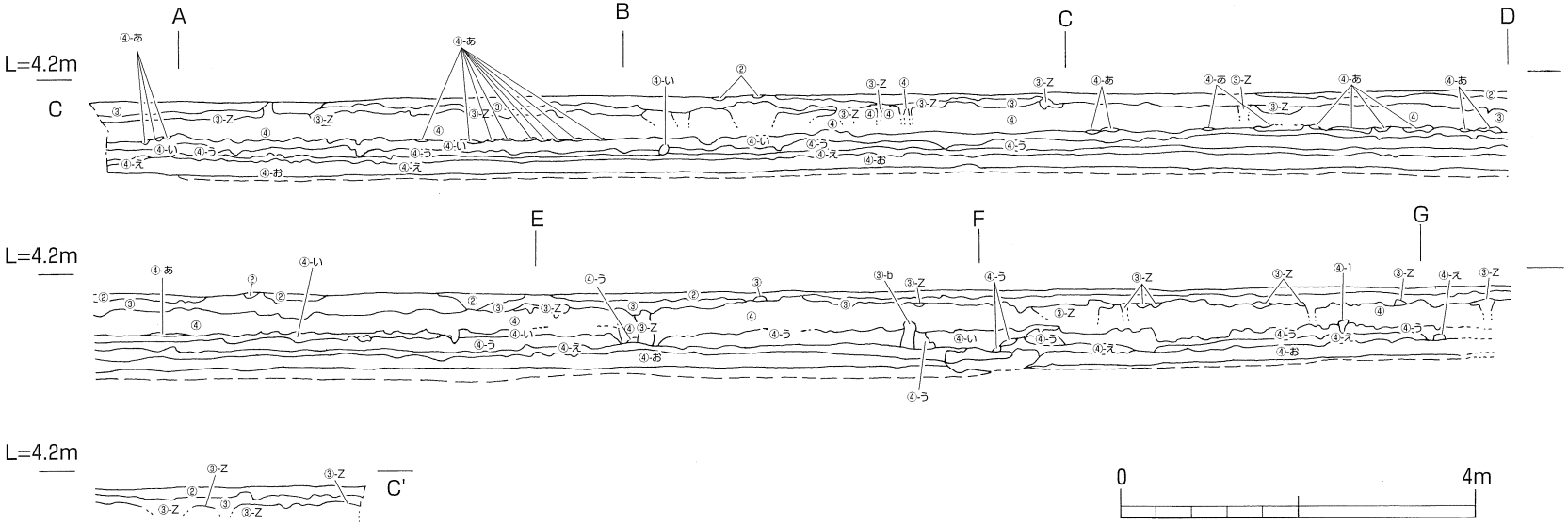
1.耕作土
　1-a　褐灰色粘質土（砂粒混入）
2.青灰色粘砂
3.褐灰色粘砂
　3-0　暗青灰色粘土（酸化鉄、炭混入）
　3-1　灰褐色粘質土
　3-2　褐灰色細砂
　3-2b 暗黄褐色荒砂
　3-3　暗青灰色粘土
　3-4　暗青灰色粘土（褐灰色粘土・酸化鉄混入）
　3-5　褐灰色粘土（砂粒混入）
　3-6　褐灰色粘土
　3-a　暗褐色粘土（酸化鉄混入）
　3-b　褐灰色粘土（酸化鉄混入）
　3-b2 褐灰色粘土（炭・酸化鉄混入）
　3-b3 灰黄褐色シルト
　3-b4 暗褐色粘土（褐灰色粘土・炭混入）
　3-b5 黄褐色砂質土
　3-c　灰黄褐色砂質土（荒砂混入）
　3-Z　暗褐灰色土
　3-Z2 褐色粘土
4.灰黄褐色粘土
　4-1　褐灰色粘土
　4-a　灰褐色粘土
　4-b　青灰色粘土
　4-c　黄灰色シルト
　4-d　褐色粘砂（炭混入）
　4-あ　暗灰黄色粘性シルト
　4-い　灰オリーブ粘性シルト
　4-う　灰褐色シルト（酸化鉄多量に混入）
　4-え　暗灰褐色粘性シルト
　4-お　褐灰色粘土
　4-お2 暗青灰色粘土（青灰色粘土・酸化鉄混入）
5.暗褐色粘土
　5-a　暗青灰色粘砂
　5-a2 暗褐灰色粘質土
　5-b　褐灰色粘土
　5-c　オリーブ黒色粘土
6.暗褐色粘砂



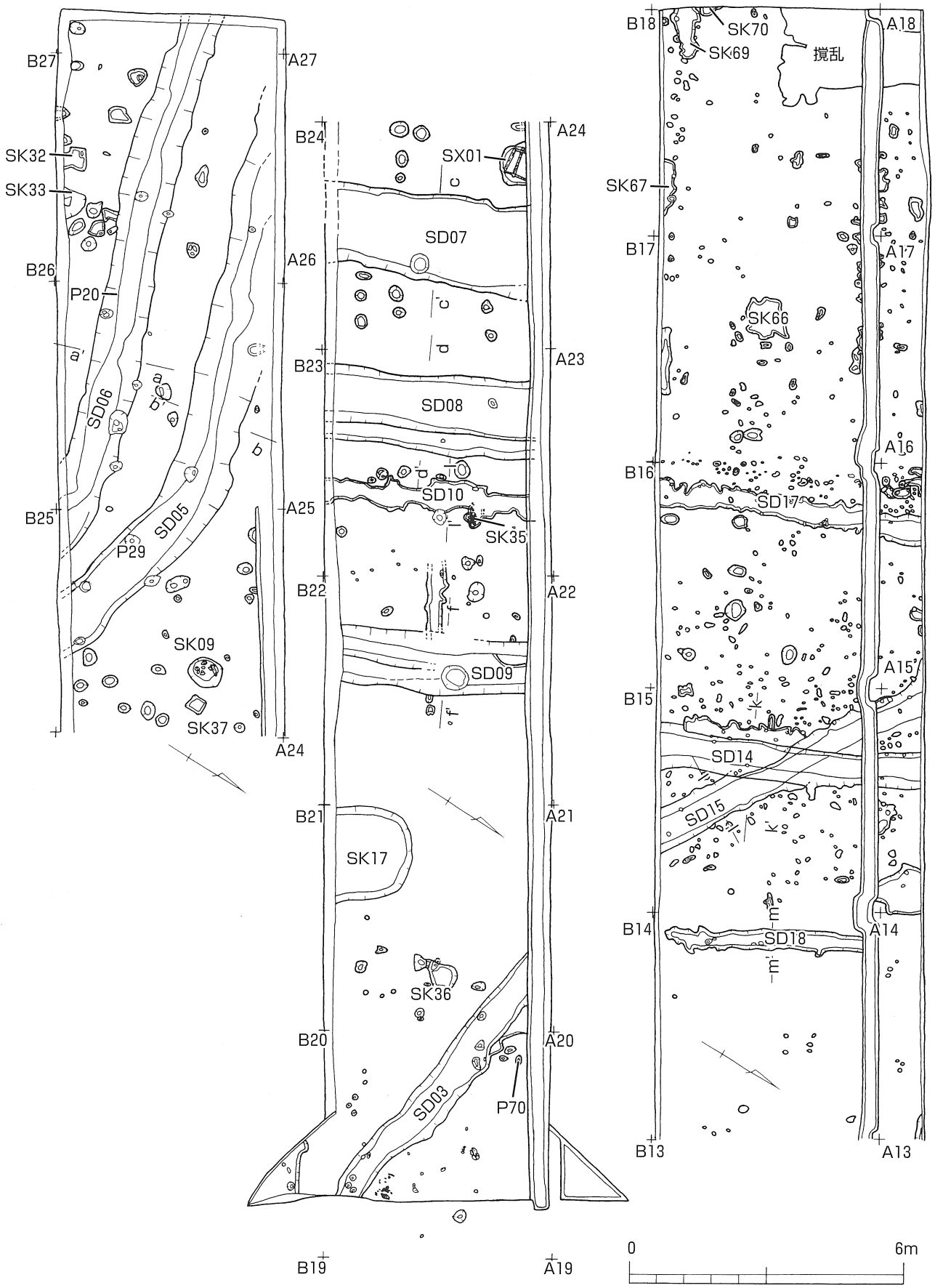
第6図　調査区北壁土層堆積状況（S=1/80）



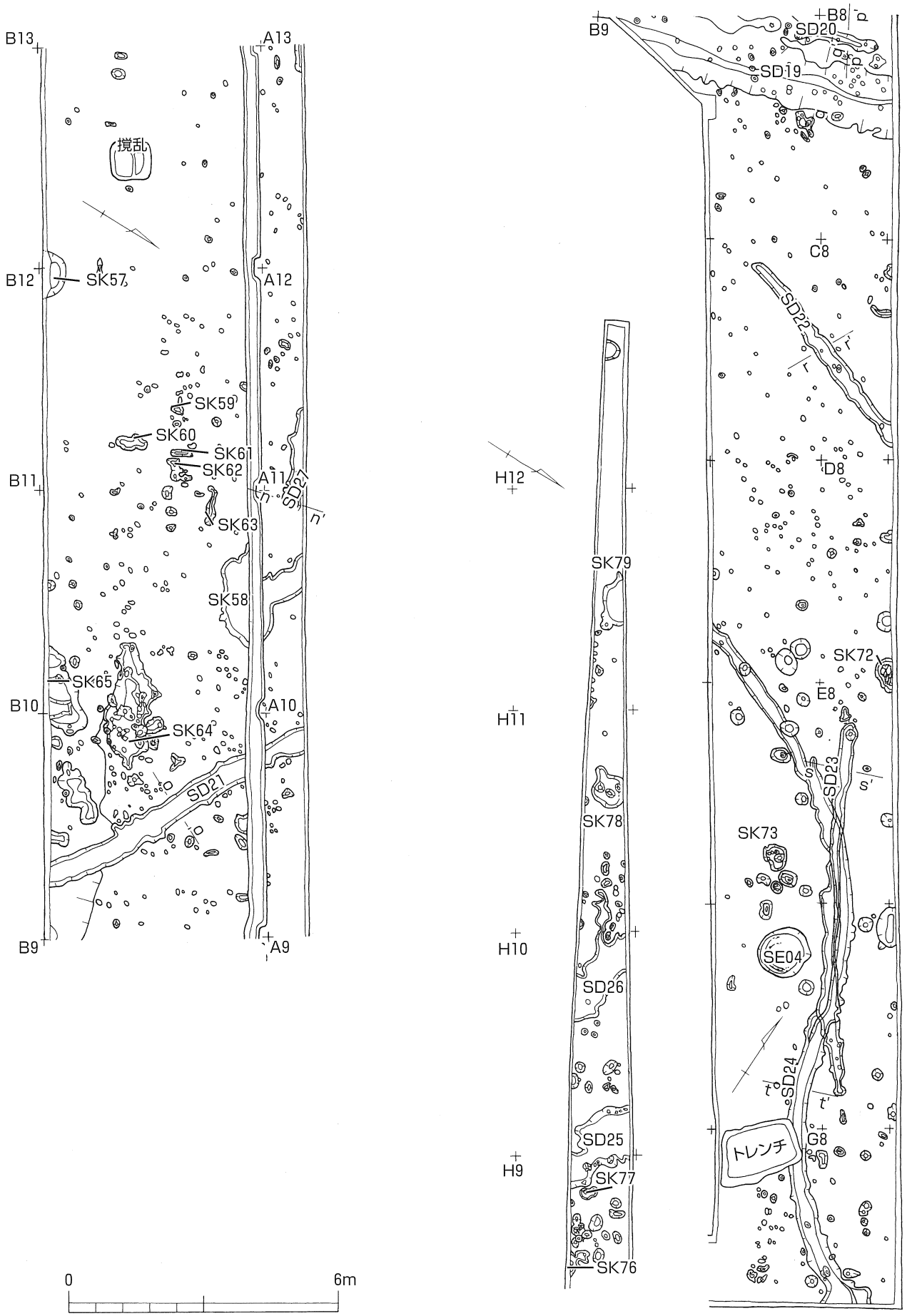
第7図　18ライン土層堆積状況（S=1/80）



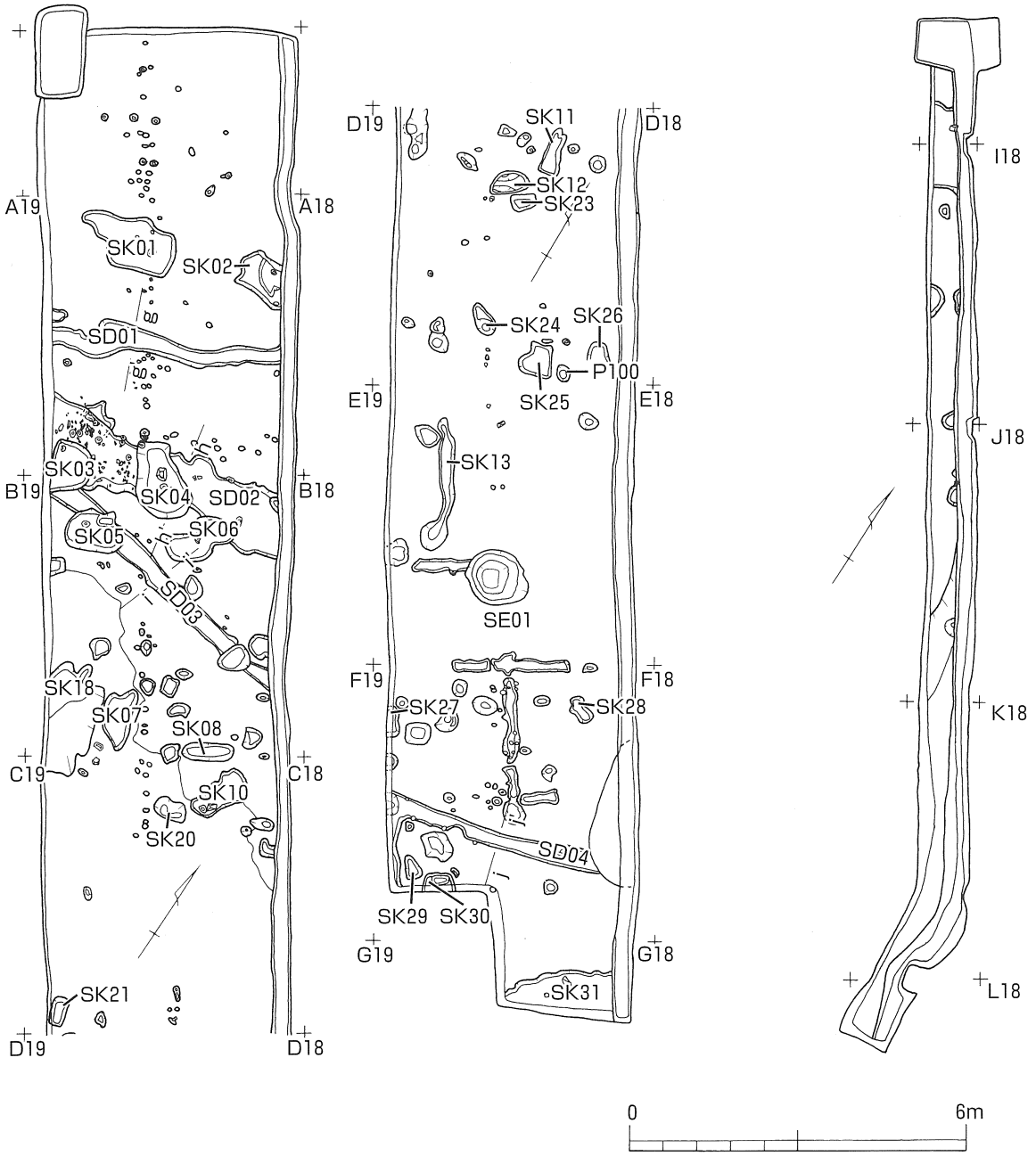
第8図　8ライン土層堆積状況（S=1/80）



第9図　遺構平面図　1（第④層上面）（S=1/120）



第10図　遺構平面図　2（第④層上面）（S=1/120）

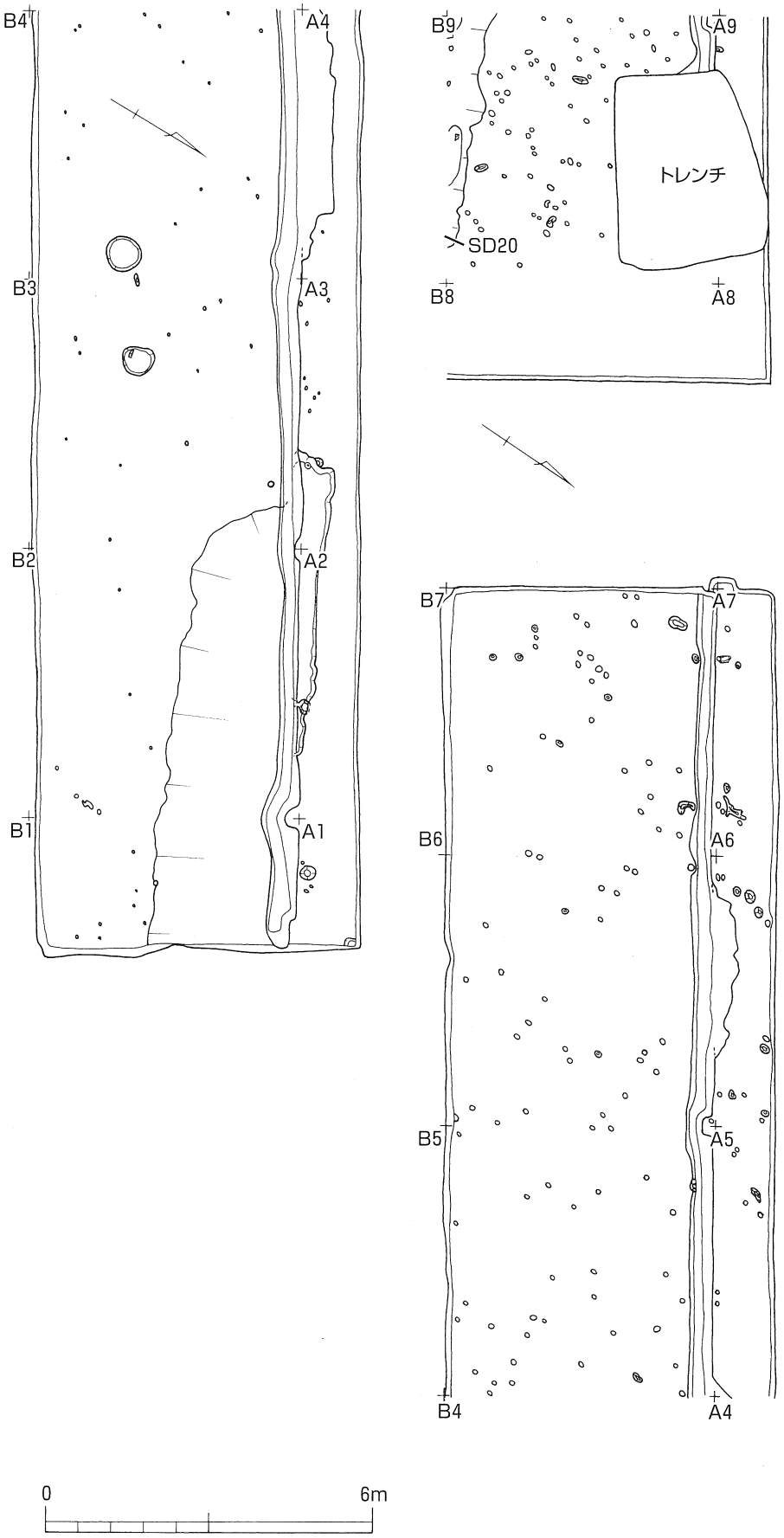


第11図　遺構平面図　3（第④層上面）（S=1/120）

転糸切痕が残る。器壁は３は外方に直線的に、４は内湾気味に立ち上がる。５は青磁碗口縁部で、内外面ともに施釉する。口縁部は内湾気味に立ち上がった後外傾する。端部は丸く仕上げている。６は備前焼壷または甕で、内外面ともにナデ調整を施す。外面には粘土紐貼付による把手が施される。外面には多量の灰が付着している。７は茶臼である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部では水平な平坦面を作っている。底部には煤が付着している。

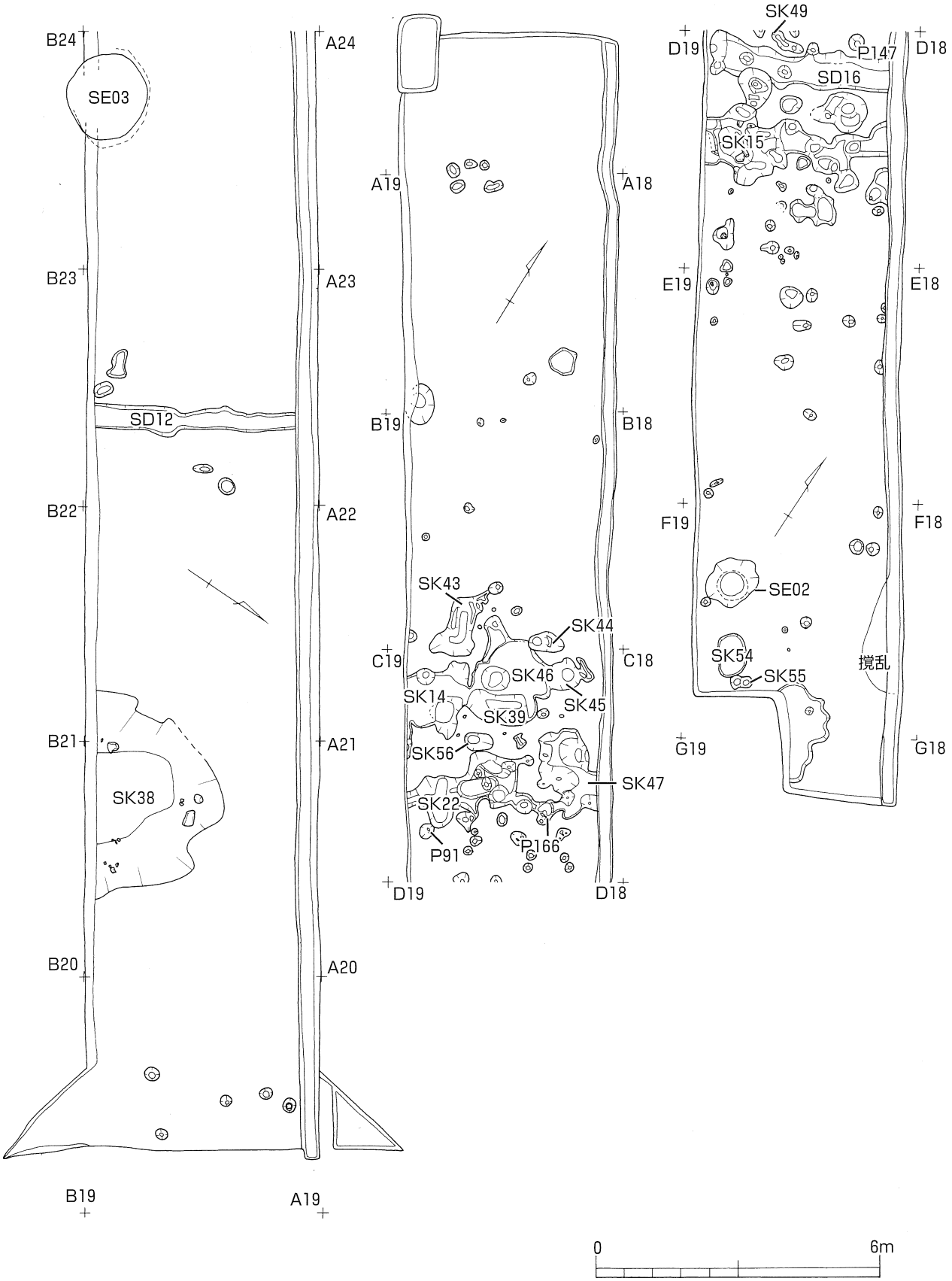
ＳＤ０８（第９・15・18図）

縦長4.40ｍ以上、横幅1.60ｍ、深さ0.35ｍを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～26°～Ｗを測る。

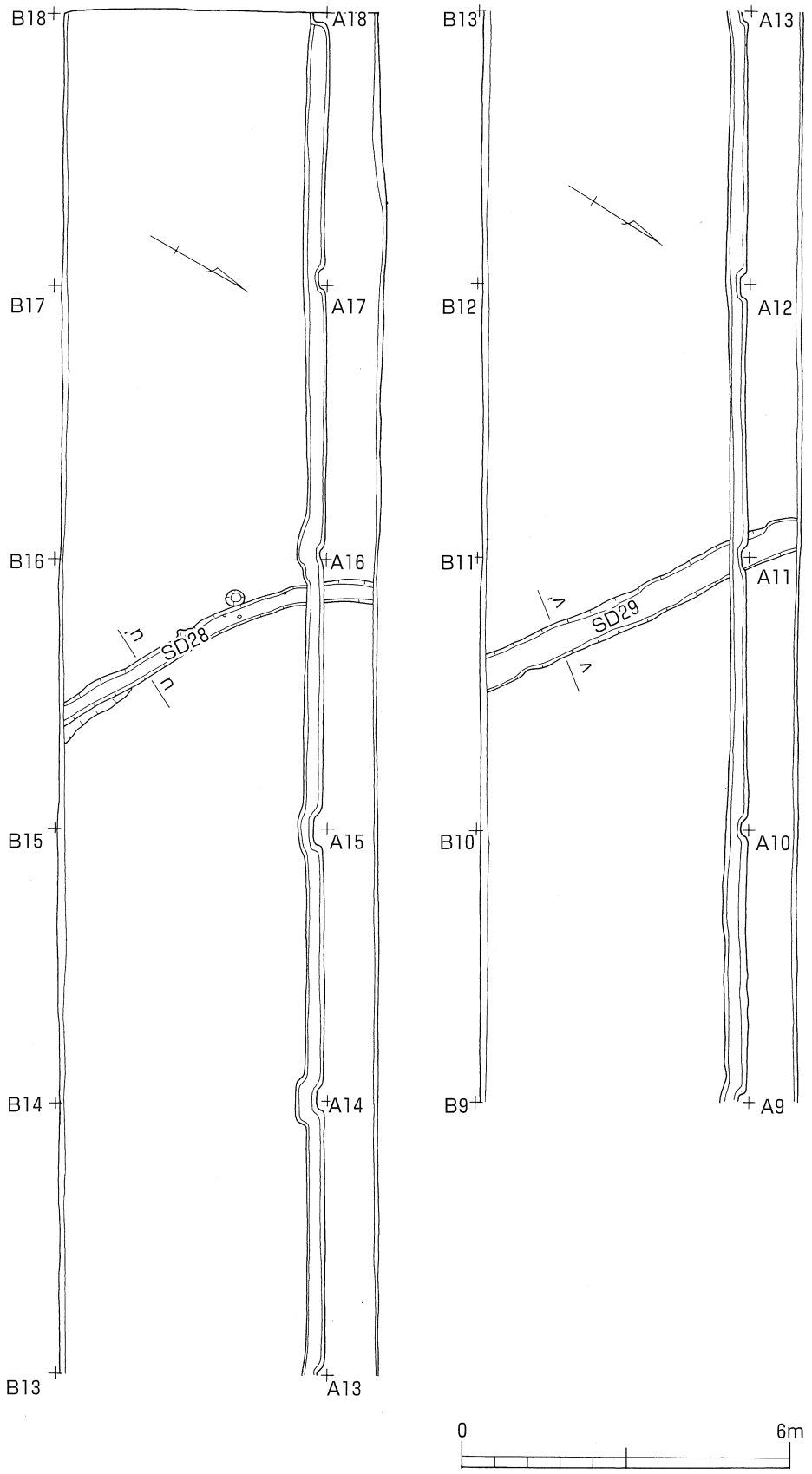


第12図　遺構平面図　4（第④層上面）（S=1/120）

第18図１は土師質土器小皿または坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切を残す。２は備前焼擂鉢で、内外面ともにナデ調整を施し、内面には擂目を施す。また口縁部内面には灰が付着する。口縁部は内湾気味に立ち上がり、両端部を拡張させて、端部内側を上方に突出させている。先端部は丸く仕上げている。３は在地土器で、土師質のものである。内外面ともにナデ調整を施し、底部、内面見込及び器壁外面に植物依存体の痕跡、器壁外面に指頭圧痕が残る。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部に平坦面を作っている。４は素焼の近世陶器壷で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、高台畳付に回転ヘラケズリ調整を施す。器壁は外方に直線的に立ち上がる。



第13図　遺構平面図　5（第⑤層上面）（S=1/120）



第14図　遺構平面図　6（第⑤層上面）（S=1/120）

ＳＤ１０

（第９・15図）

縦長4.30m以上、横幅1.23m、深さ0.37mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はN～28°～Wを測る。

ＳＤ０９

（第９・15図）

縦長4.20m以上、横幅1.38m、深さ0.33mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はN～27°～Wを測る。遺物の小片が少量出土している。

ＳＤ０３

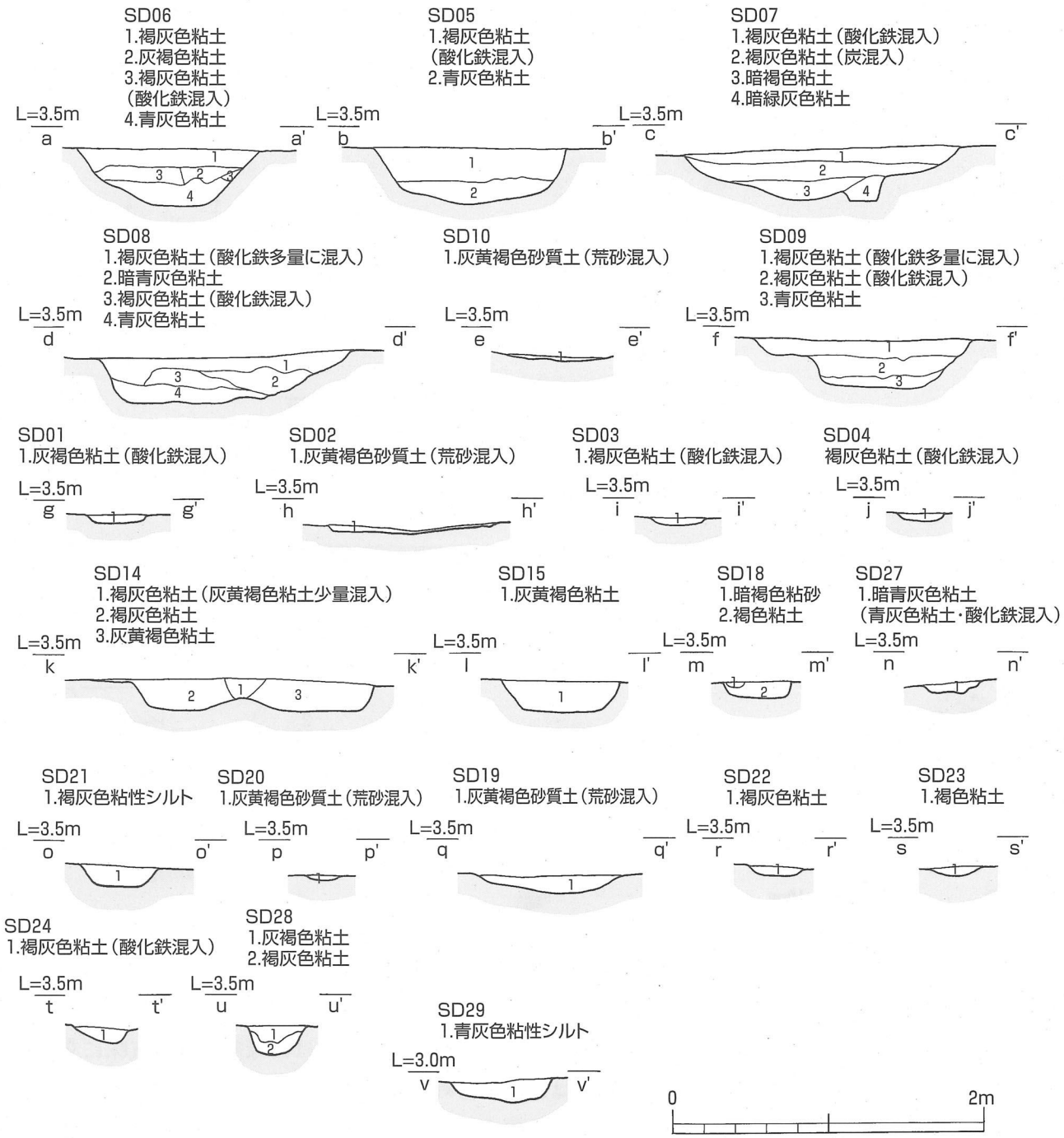
（第９・11・15図）

縦長14.10m以上、横幅0.35m、深さ0.05mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はN～82°～Wを測る。

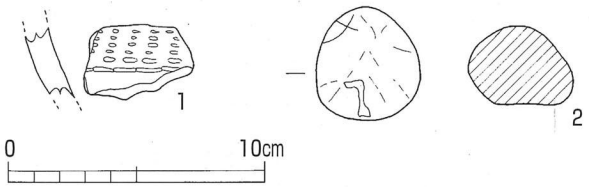
ＳＤ０１

（第11・15図）

縦長4.08m以上、横幅0.37m、深さ0.05mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はN～63°～Eを測る。



第15図　溝状遺構土層堆積状況(S=1/40)

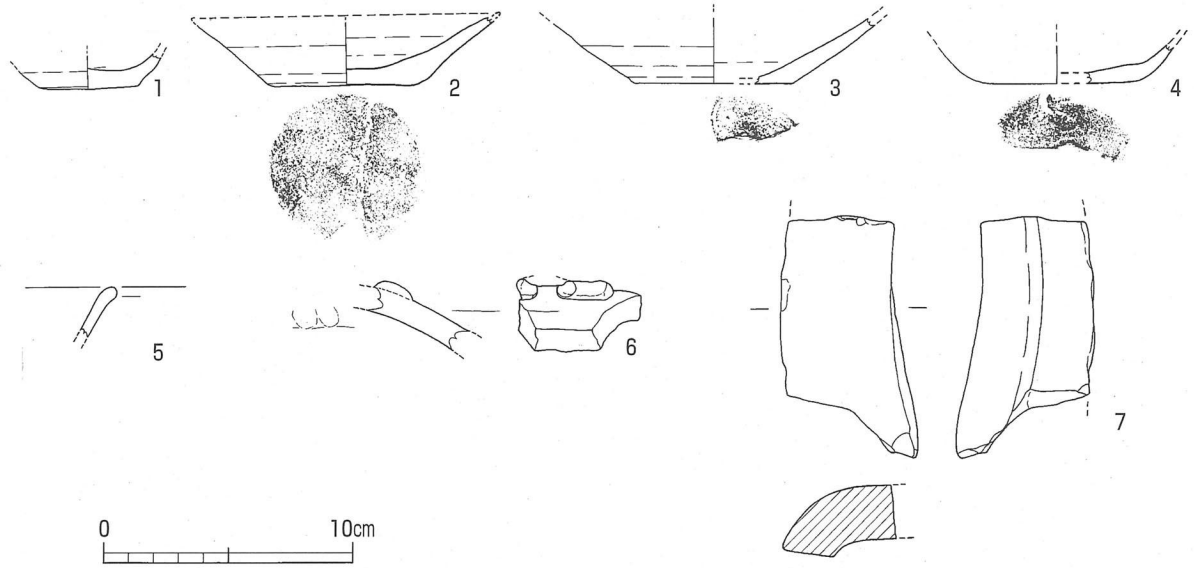


第16図　SD05　出土遺物

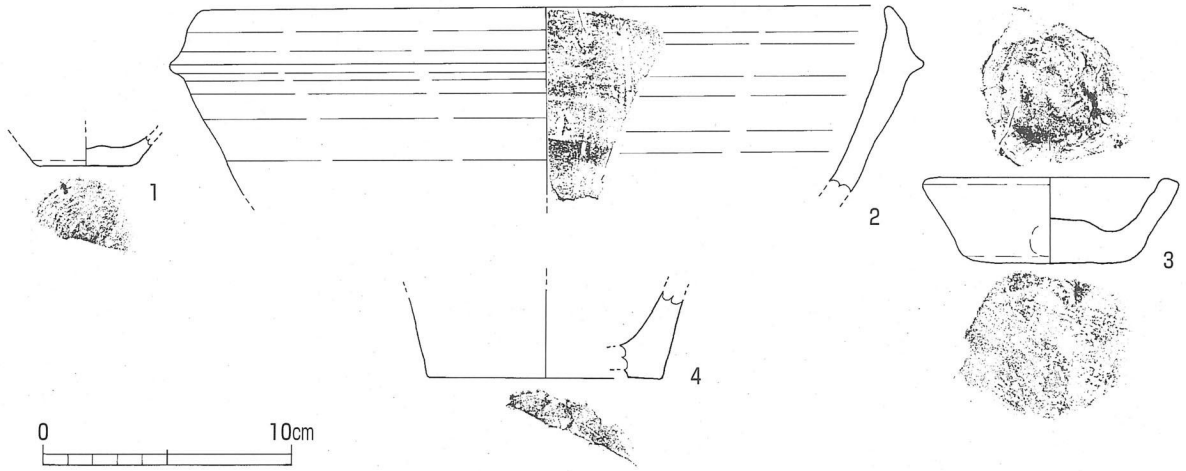
ＳＤ０２(第11・15・19図)

縦長4.40m以上、横幅1.06m、深さ0.08mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～81°～Ｅを測る。

第19図１は弥生土器甕で、口縁部内外面ともにナデ調整を施し、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がった後、複合口縁を施す可能性がある。２～８は土師器である。２～７は甕で、体部内面にヘラケズリ調整を施す。このうち２，４，５，７は口縁部内外面にナデ調整を施す。２は体部外面にハケ目調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上が



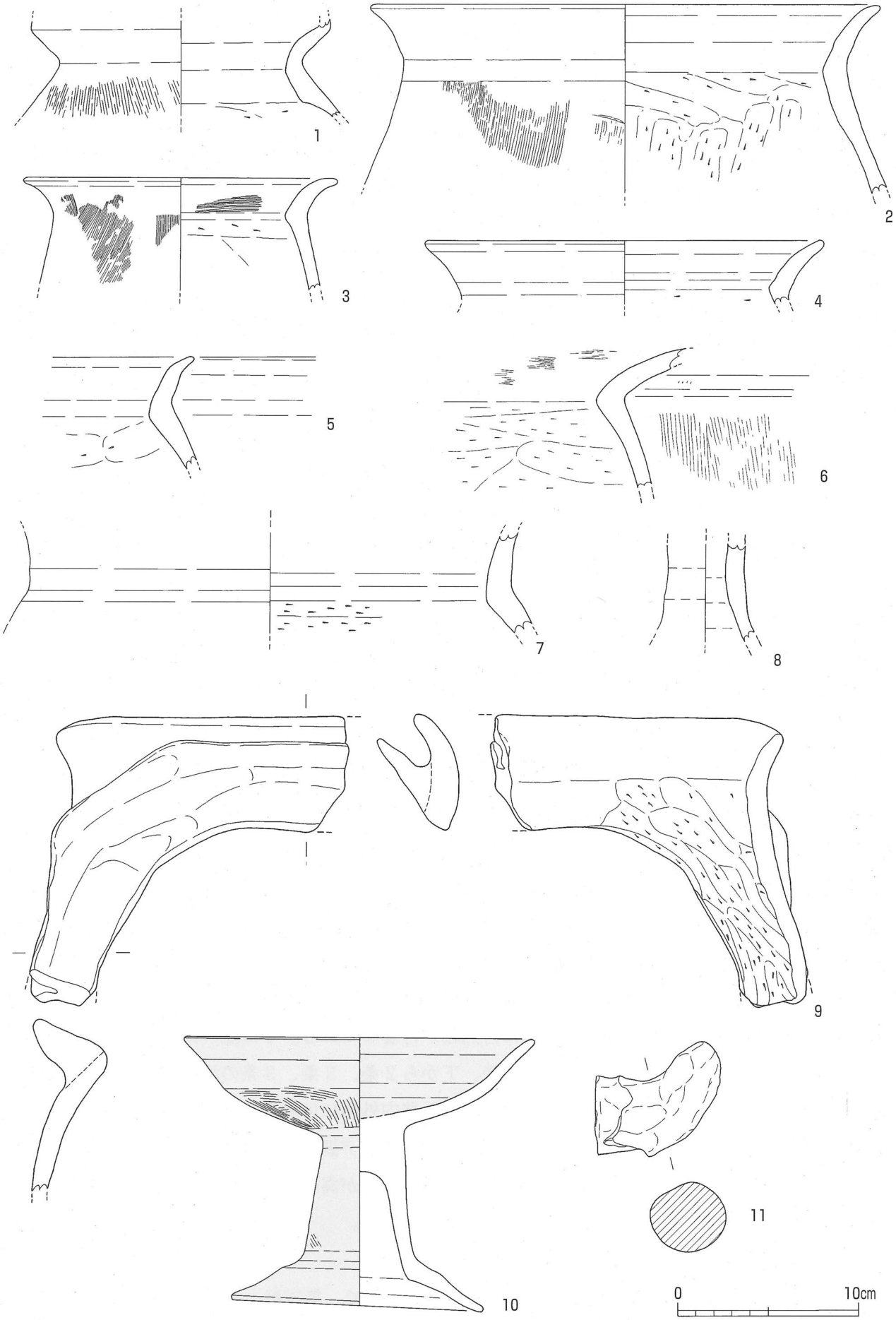
第17図　SD07　出土遺物



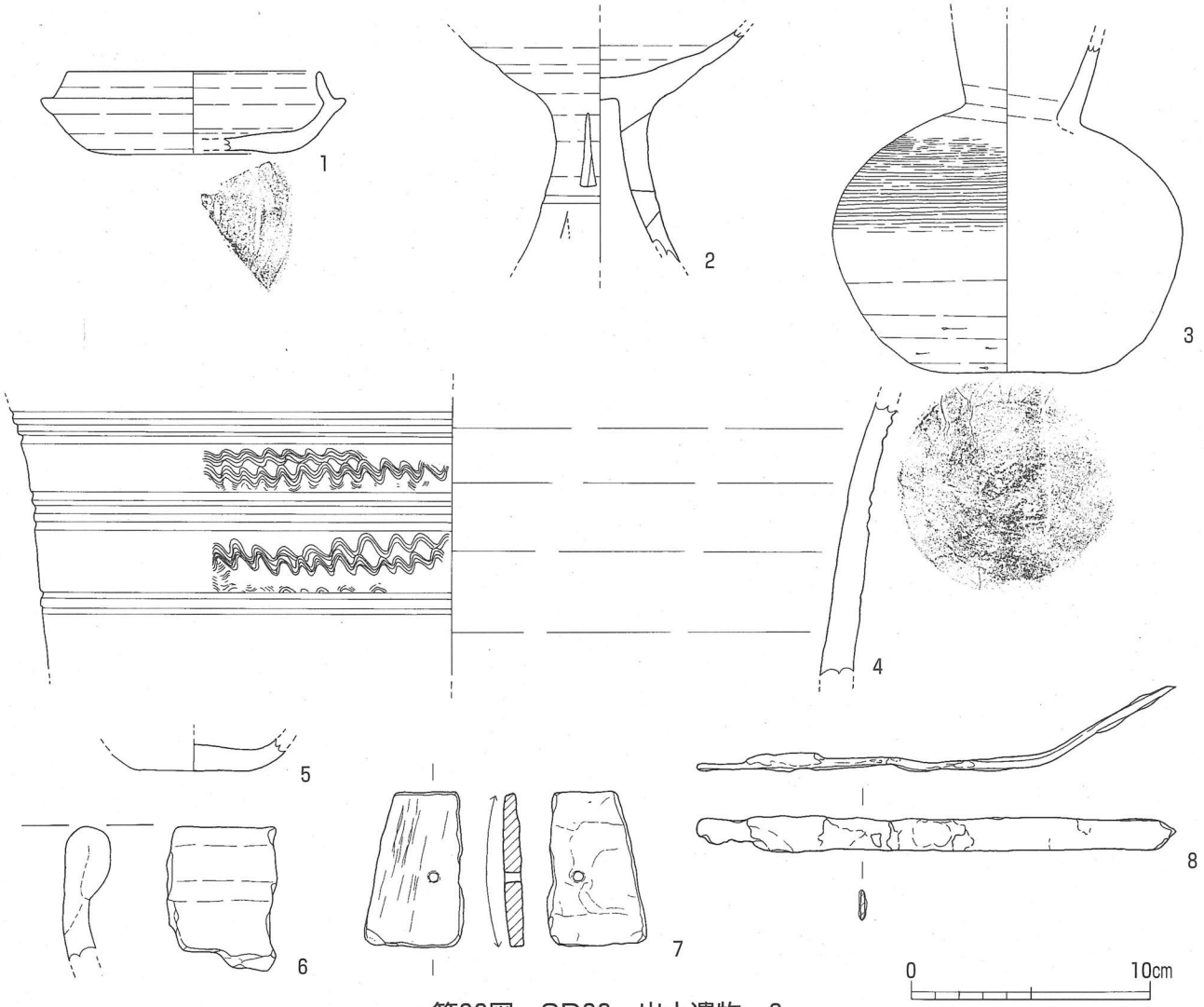
第18図　SD08　出土遺物

り、端部を尖り気味に仕上げている。3は口縁端部から口唇部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、口縁部下内面及び頸部から体部外面にハケ目調整を施す。4は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。5は体部外面は風化のため調整不明である。口縁部は口唇部で外傾し、端部を丸く仕上げている。口縁部外面に煤が付着する。6は口縁部は内面にハケ目調整を施し、外面にナデ調整を施す。体部外面にはハケ目調整が施されている。器壁は外反気味に立ち上がる。7は肩部外面にナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がる。8は高坏の脚部で、内面に粗いナデ調整、外面にナデ調整を施す。裾部は外反しながら広がる。9は竈で、口縁部内外面及び体部外面にナデ調整を施し、体部内面にはヘラケズリ調整を施す。庇内面は風化しているが、ヘラミガキ調整を施している可能性がある。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げている。10は赤彩土器高坏で、器部は口縁部内外面及び内面見込にナデ調整、外面下方にハケ目調整を施し、脚部は柱部内面で風化が著しいが、外面にはヘラミガキ調整を施した後、若干のハケ目調整が施されている。裾部は内外面にナデ調整を施している。口縁部は器部中程から外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味にしている。脚部は裾部で外方に広がった後やや屈曲し、外反気味に伸びる。端部は尖り気味にしている。脚部内面以外に赤彩を施す。11は土師器甑の把手で、外面にヘラミガキ調整を施す。

第20図1～4は須恵器である。1は坏身で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転ヘラ切



第19図　SD02　出土遺物　1



第20図　SD02　出土遺物　2

り調整が施されている。口縁部は外方に直線的に立ち上がった後外傾し、端部を尖らせている。一方、内側にはかえりが施される。かえりは上方に外反気味に立ち上がり、尖り気味にしている。２は高坏で、器部は内外面ともに回転ナデ調整を施し、内面見込にナデ調整を施す。脚部は内面にナデ調整、外面に回転ナデ調整を施し、１条の沈線を界線として２段３方に三角透かしを残す。器壁は内湾気味に立ち上がり、脚部は外反気味に広がる。３は瓶で、口縁部内外面及び頸部外面に回転ナデ調整を施し、体部外面には回転ナデ調整後、肩部外面にカキ目調整を施し、底部に回転ヘラ切り調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がる。肩部に自然釉が付着している。４は甕の口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。外面には波状文を施した後、下から２条、３条、３条の沈線を施す。５は土師質土器坏で、底部は風化が著しく調整不明であるが、器壁内外面には回転ナデ調整を施している。器壁は内湾気味に立ち上がる。６は備前焼甕で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外側に折り曲げ玉縁状にしている。５，６は他からの混入遺物である可能性が高い。７は砥石と考えられるが、１か所に穿孔が残る。１面を砥面としている。８は鉄製品である。

ＳＤ０４（第11・15図）

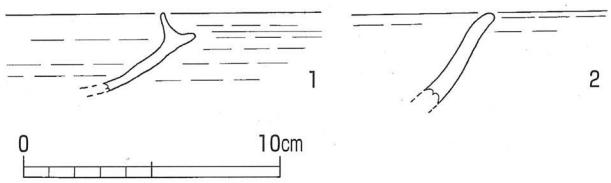
縦長3.90m以上、横幅0.30m、深さ0.05mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～73°～Ｅを測る。

ＳＤ１７（第９図）

縦長5.80m以上、横幅0.50m、深さ0.22mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～24°～Ｗを測る。

ＳＤ１４（第９・15・21図）

縦長5.70m以上、横幅0.85m、深さ0.21mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～26°～Ｗを測る。



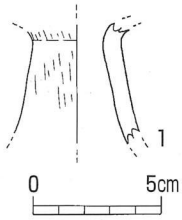
第21図　SD14　出土遺物

第21図１は須恵器坏身で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾気味に立ち上がった後、口唇部で外傾し、端部は丸く仕上げている。一方、口唇部内面にはかえりが施され、上方にやや反り上がる。端部は尖らせている。２は青磁碗で、内外面ともに施釉する。口縁部は内湾しながら立ち上がった後外反する。端部は丸く仕上げている。

ＳＤ１５（第９・15・22図）

縦長6.72m以上、横幅0.76m、深さ0.20mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～60°～Ｗを測る。

第22図１は土師器高坏脚部で、内面にヘラケズリ調整を施している可能性がある。外面にはハケ目調整が残る。脚部は外方に直線的に広がった後外反気味となる。

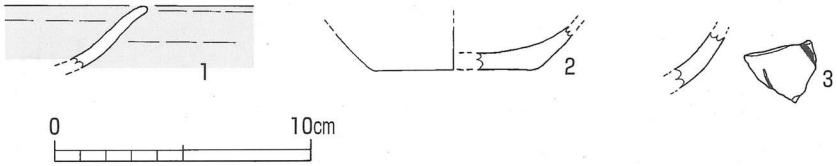


第22図　SD15　出土遺物

ＳＤ１８（第９・15・23図）

縦長4.38m以上、横幅0.43m、深さ0.11mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～31°～Ｗを測る。

第23図１は赤彩土器高坏口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がった後外反気味となる。端部は丸く仕上げている。２は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部は風化が著しく調整不明である。器壁は内湾気味に立ち上がる。３は肥前系の染付で、内外面ともに施釉する。外面には染付を施す。器壁は内湾している。



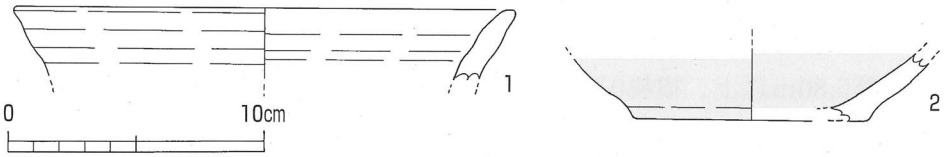
第23図　SD18　出土遺物

ＳＤ２１（第10・15・24図）

縦長6.48m以上、横幅0.50m、深さ0.15mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～61°～Ｗを測る。

第24図１は土師器甕口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部はやや括れを持つが外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。外面に煤が付着する。２は赤彩土器で、内面にハケ

目調整、外面にナデ調整を施す。器壁は内湾気味に立ち上がる。内外面ともに赤彩が残る。

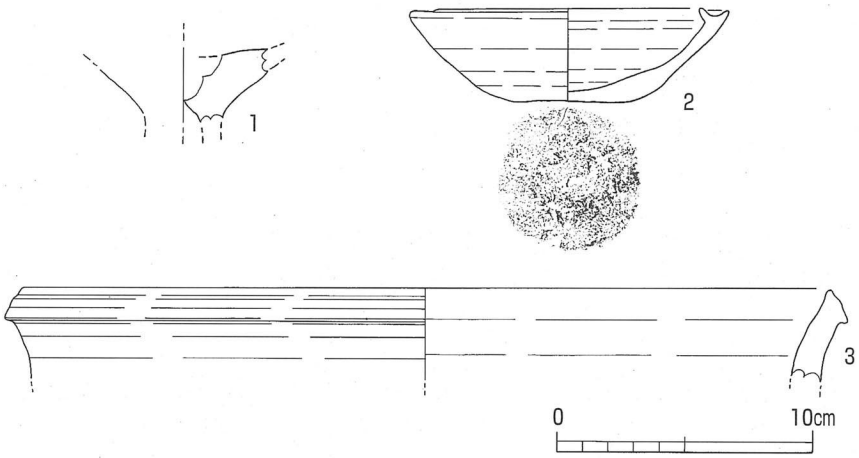


第24図　SD21　出土遺物

ＳＤ１９（第10・15・25図）

縦長9.12m以上、横幅0.96m、深さ0.10mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～73°～Ｅを測る。

第25図１は土師器高坏脚部で、内面は風化のため調整不明であるが、外面はヘラミガキ調整またはナデ調整を施している。２，３は須恵器である。２は坏身で、口縁部内外面に回転ナデ調整、内面見込にナデ調整、底部外面に回転ヘラ切り調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は尖らせている。また内面にはかえりが施され、上方にやや反り上がる。端部は尖らせている。３は甕の口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部に平坦気味の面を作る。両端部はやや突出させている。

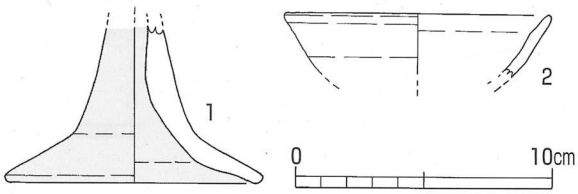


第25図　SD19　出土遺物

ＳＤ２０（第10・15・26図）

縦長5.04m以上、横幅0.22m、深さ0.02mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～73°～Ｅを測る。

第26図１は赤彩土器高坏脚部で、裾部内外面にナデ調整、脚柱部内面にヘラケズリ調整、脚柱部外面にヘラミガキ調整を施し、内外面ともに赤彩が残る。脚部は外反気味に伸びた後外反し、外方に直線的に伸びる。端部は平坦気味に仕上げている。２は土師質土器坏で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は口唇部で外傾気味となり、端部は尖り気味に仕上げている。



第26図　SD20　出土遺物

ＳＤ２２（第10・15図）

縦長5.16m以上、横幅0.34m、深さ0.06mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～71°～Ｗを測る。

ＳＤ２３（第10・15図）

縦長8.40m以上、横幅0.34m、深さ0.06mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。主軸の方向はＮ～28°～Ｗを測る。

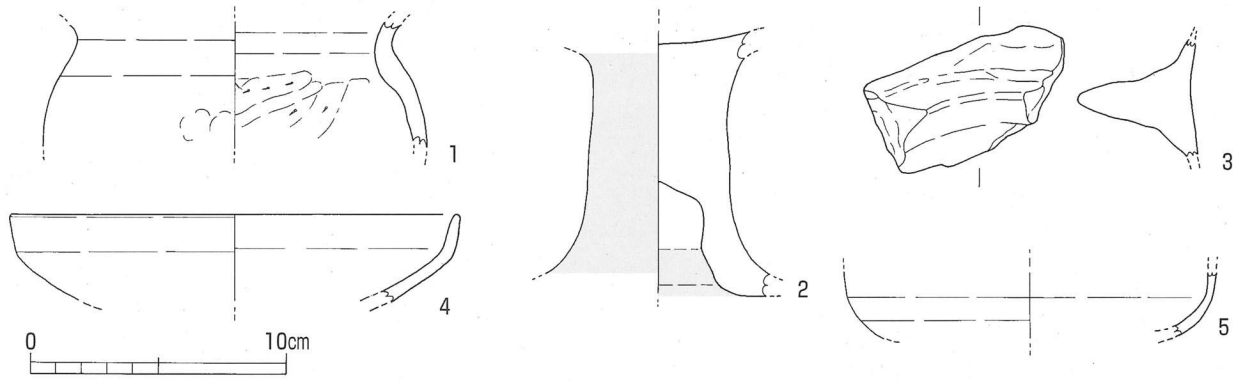
ＳＤ２４（第10・15図）

縦長15.84m以上、横幅0.32m、深さ0.12mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。

ＳＤ２５（第10・27図）

縦長1.68m以上、横幅1.26mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。

第27図１は土師器甕で、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整が施される。体部外面は風化が著しく調整不明である。口縁部は外反気味に立ち上がる。２は赤彩土器高坏脚部で、器部内面及び脚部内面を始めとして風化が著しいが、柱部外面にヘラミガキ調整、裾部内外面にナデ調整



第27図　SD25　出土遺物

を施している。柱部外面及び裾部内外面には赤彩が残る。３は竈の庇で、風化が著しいが器部内面にヘラケズリ調整、庇と器部の接合部にナデ調整が施されている。庇端部は丸く仕上げている。４，５は須恵器である。４は高坏器部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は口唇部で屈曲した後外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。口縁部外面に灰が付着する。５は坏または高坏の器部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。器壁は内湾しながら立ち上がる。

ＳＤ２６（第10図）

縦長1.56m以上、横幅1.02mを測る溝状遺構で、第④層上面で検出している。

ＳＤ１２（第13図）

縦長4.32m以上、横幅0.66mを測る溝状遺構で、第⑤層上面で検出している。主軸の方向はＮ～30°～Ｗを測る。

ＳＤ１６（第13図）

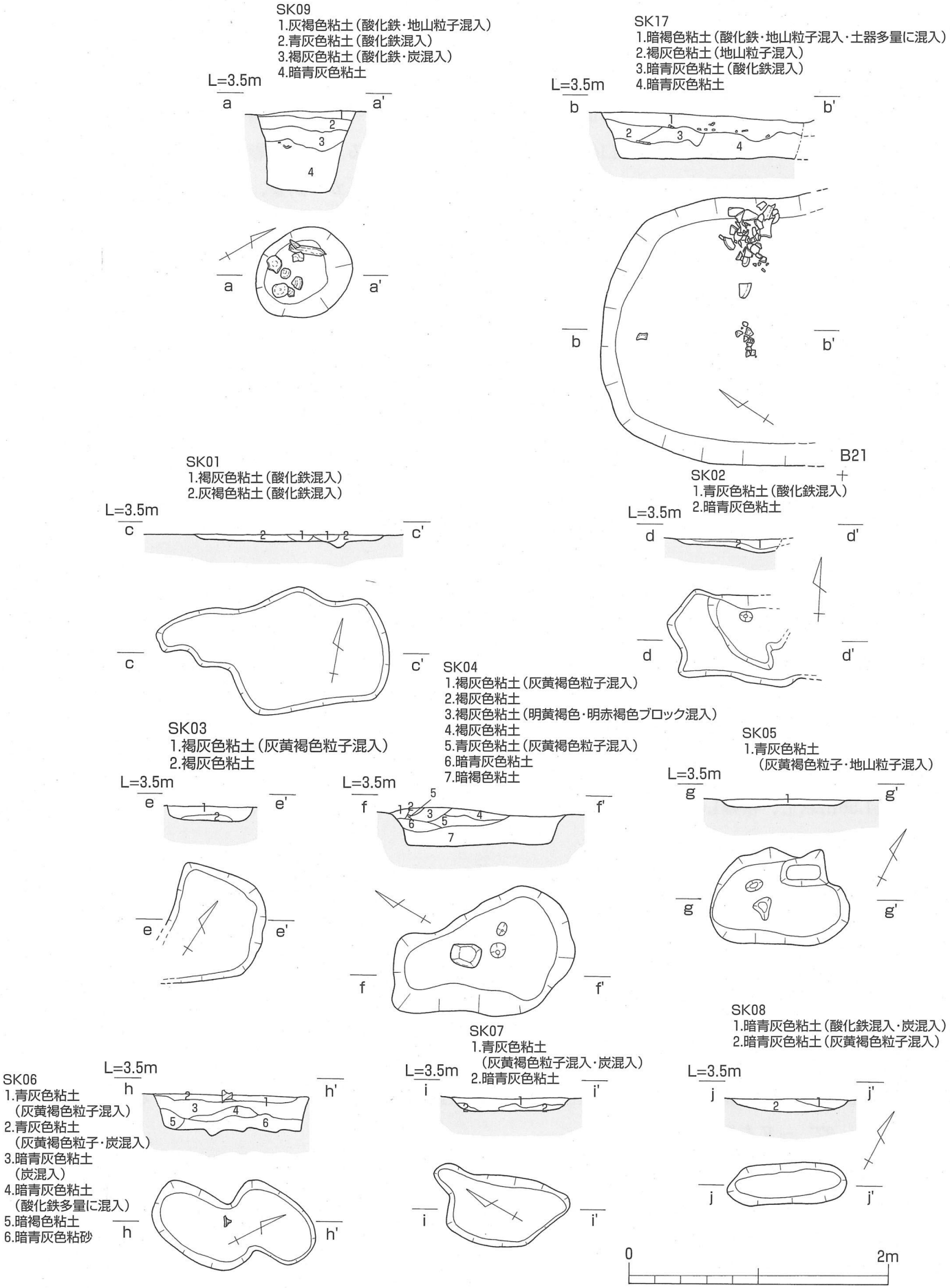
縦長3.48m以上、横幅0.90mを測る溝状遺構で、第⑤層上面で検出している。主軸の方向はＮ～66°～Ｅを測る。

ＳＤ２８（第14・15図）

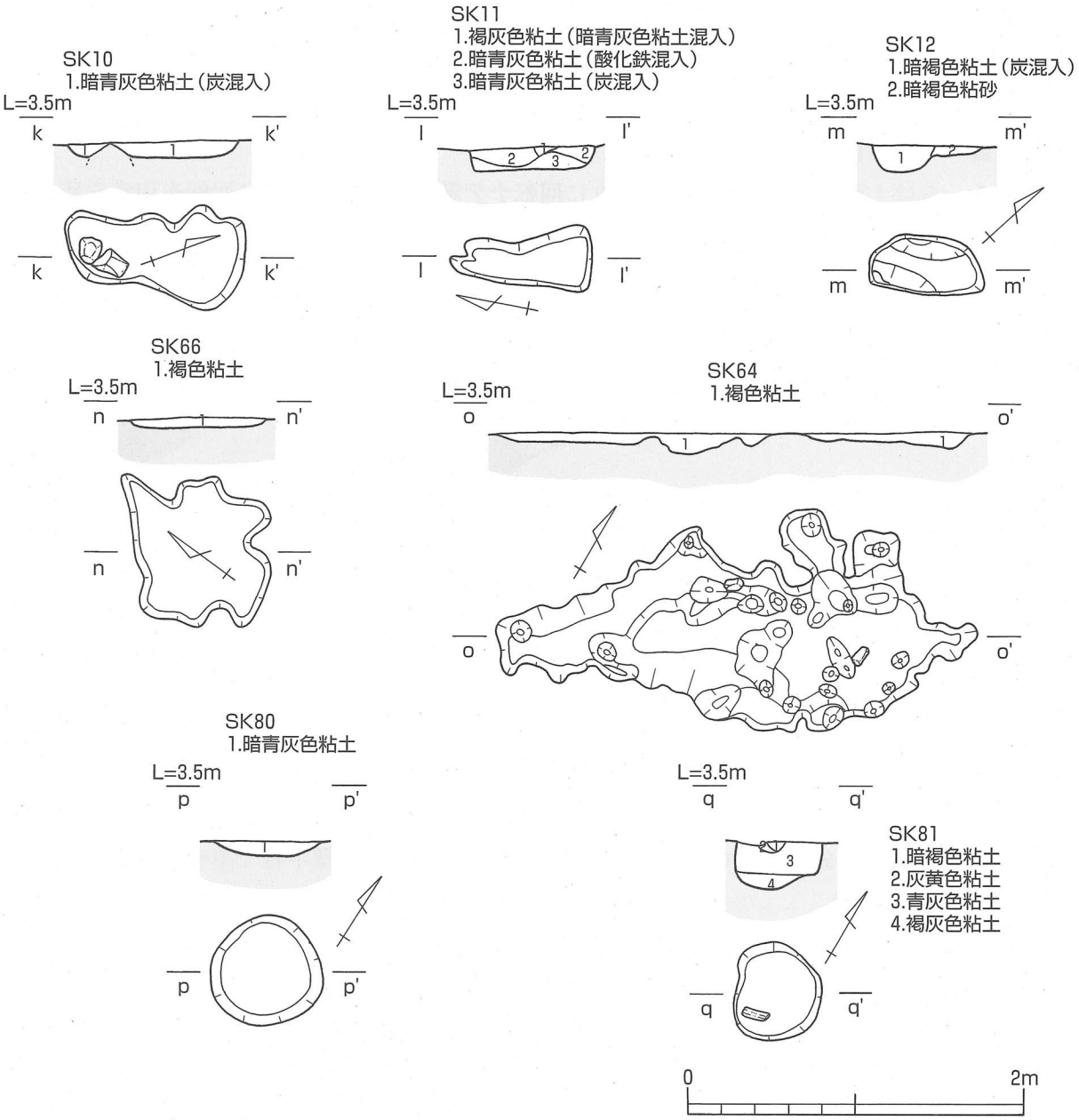
縦長6.24m以上、横幅0.38m、深さ0.19mを測る溝状遺構で、第⑤層上面で検出している。主軸の方向はＮ～37°～Ｅを測る。

ＳＤ２９（第14・15図）

縦長6.24m以上、横幅0.64m、深さ0.15mを測る溝状遺構で、第⑤層上面で検出している。主軸の方向はＮ～59°～Ｅを測る。



第28図　土壙遺構図　1（S=1/40）



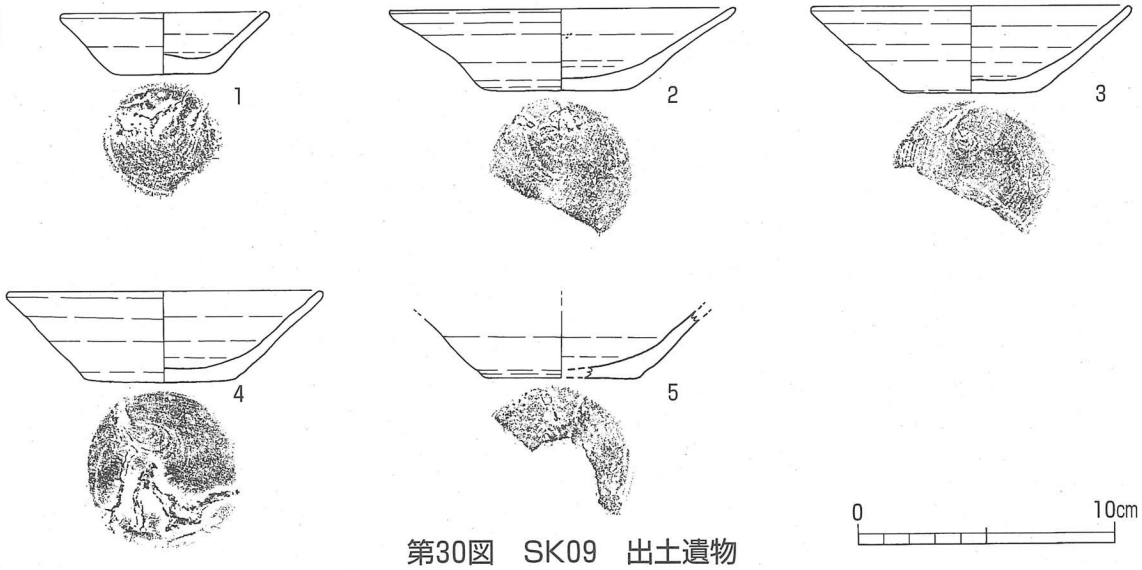
第29図　土壙遺構図　2（S=1/40）

b）土壙

ＳＫ０９（第９・28・30図）

縦長0.76m、横幅0.07m、深さ0.62mを測る土壙で、第④層上面から検出している。出土遺物では土師質土器の一括資料が出土している。

第30図１～５は土師質土器で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕を残す。１は小皿で、口縁部は外反気味に立ち上がる。端部は尖り気味にしている。２～５は坏である。２は外反



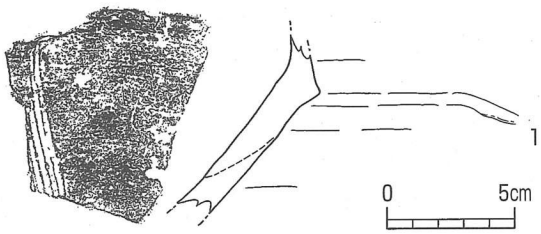
第30図　SK09　出土遺物

気味に立ち上がり、端部を尖らせている。３，４は口縁部は外方に直線的に立ち上がり、３は端部を尖り気味に、４は端部を尖らせている。５は器壁の立ち上がりが器壁中程でやや外傾する。

ＳＫ３５（第９・31図）

SD10内に掘り込まれた土壙で、縦長0.48m、横幅0.36mを測る。

第31図１は備前焼擂鉢で、注口の一部も残る。内外面ともにナデ調整を施した後、内面に擂目を施す。口縁部は内湾気味に立ち上がった後、端部に平坦面を作り、両端部を拡張させている。内側端部は上方に突出している。断面に粘土の接合痕が残る。

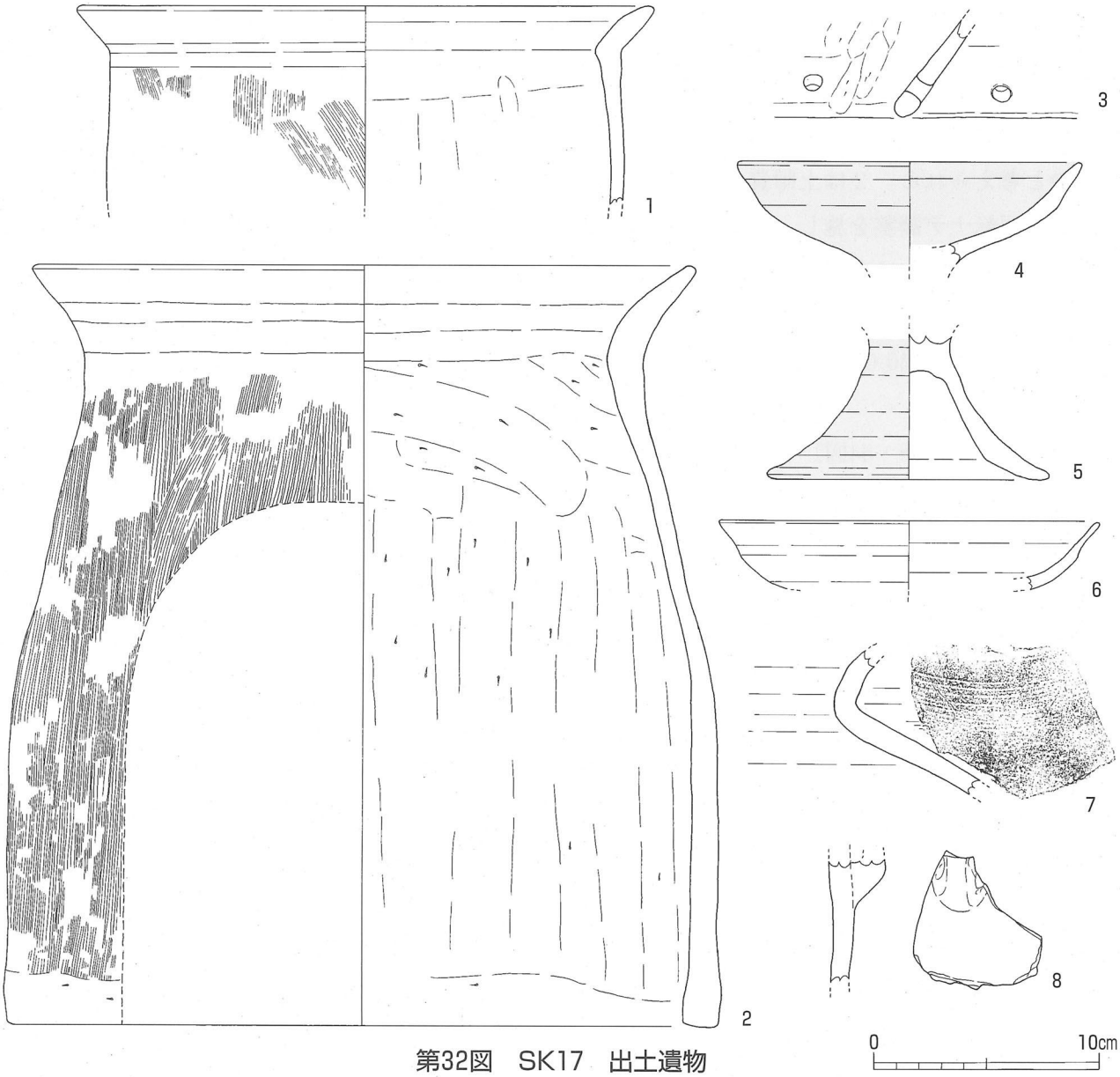


第31図　SK35　出土遺物

ＳＫ１７（第９・28・32図）

縦長2.14m以上、横幅1.64m、深さ0.35mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第32図１～３は土師器である。１は甕で、口縁部内外面ともにナデ調整を施し、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がる。２は竈である。口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を突り気味に仕上げている。３は甑で、内面にヘラケズリ調整を施す。外面は風化が著しく調整不明である。裾部は内側に直線的に伸び、端部を丸く仕上げている。裾部に穿孔が施されている。４，５は赤彩土器高坏である。４は内外面ともにナデ調整を施し、赤彩を施す。口縁部は口唇部で屈曲し、外反気味に立ち上がる。端部は尖りぎみにしている。５は脚部で内外面ともにナデ調整を施す。脚部は外反気味に広がった後外側に屈曲し、外反気味に伸びる。端部は尖り気味に仕上げ



第32図　SK17　出土遺物

ている。外面に赤彩が残る。６～８は須恵器である。６は須恵器高坏の器部で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、口唇部で稜を作って器壁を薄くする。端部は尖り気味に仕上げている。７は甕で、内外面ともにナデ調整を施し、肩部外面にカキ目調整を施す。器壁は外反しながら立ち上がる。肩部外面に自然釉が付着する。８は提瓶の把手で、内外面ともにナデ調整を施す。外面には灰が付着する。

ＳＫ０１（第11・28図）

縦長1.64m、横幅1.18m、深さ0.10mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

ＳＫ０２（第11・28図）

縦長1.02m、横幅0.84m、深さ0.11mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

ＳＫ０３（第11・28図）

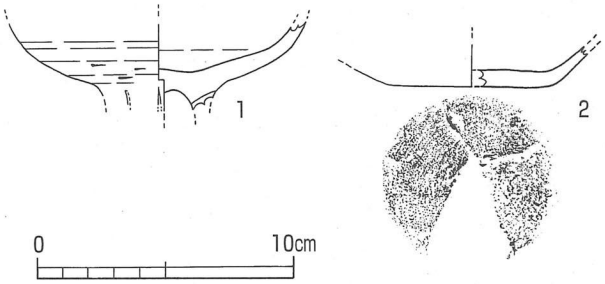
縦長0.94m、横幅0.76m、深さ0.11mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

ＳＫ０４（第11・28・33図）

縦長1.42m、横幅1.00m、深さ0.28mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第33図１は須恵器高坏の器部から脚部で、器部及び脚部内外面に回転ナデ調整を施し、器部底部に

回転ヘラケズリ調整が残る。器壁は内湾しながら立ち上がる。脚部には線状の切込が３条残るが、位置関係から２～３方向に台形透かしを施していたものと考えられる。２は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕が残る。器壁は外方に直線的に立ち上がる。



第33図　SK04　出土遺物

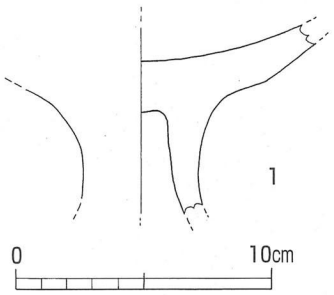
ＳＫ０５（第11・28図）

縦長1.06m、横幅0.08m、深さ0.06mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

ＳＫ０６（第11・28・34図）

縦長1.24m、横幅0.80m、深さ0.32mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第34図１は土師器高坏の器部から脚部で、風化が著しく大部分が調整不明であるが、脚柱部内面はナデ調整を施しているものと考えられる。器壁の立ち上がりは内湾気味で、裾部の広がりは外反する。

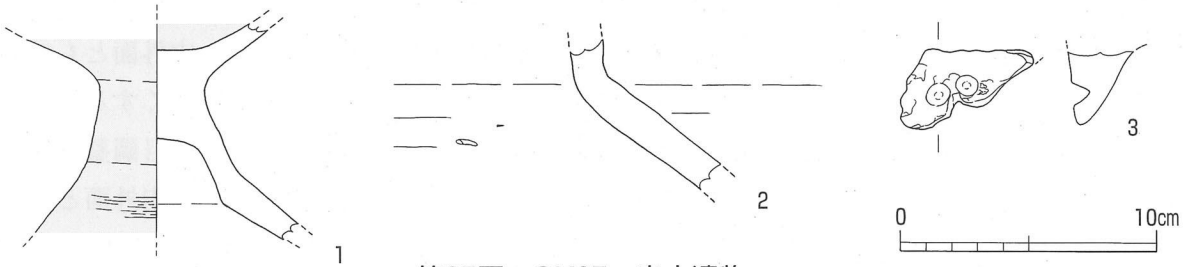


第34図　SK06　出土遺物

ＳＫ０７（第11・28・35図）

縦長1.04m、横幅0.68m、深さ0.10mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第35図１は赤彩土器高坏である。器部は内面は風化が著しく調整不明であるが、外面にはナデ調整を施す。一方、脚部では柱部で外面にヘラミガキ調整またはナデ調整を施し、内面にヘラケズリ調整を施す。また裾部では内外面にナデ調整を施している。器部は外方に直線的に立ち上がり、脚部の広がりは裾部で外方に屈曲した後、直線的に伸びる。器部内外面、脚柱部外面、裾部外面に赤彩が残る。２は瓷器系陶器甕で、内外面ともにナデ調整を施す。肩部外面に灰が被っている。３は瓦質土器奈良火鉢の脚部で、器部から剥離している。



第35図　SK07　出土遺物

ＳＫ０８（第11・28図）

縦長0.92m、横幅0.34m、深さ0.10mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

ＳＫ１０（第11・29図）

縦長1.02m、横幅0.88m、深さ0.10mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

ＳＫ２０（第11・36図）

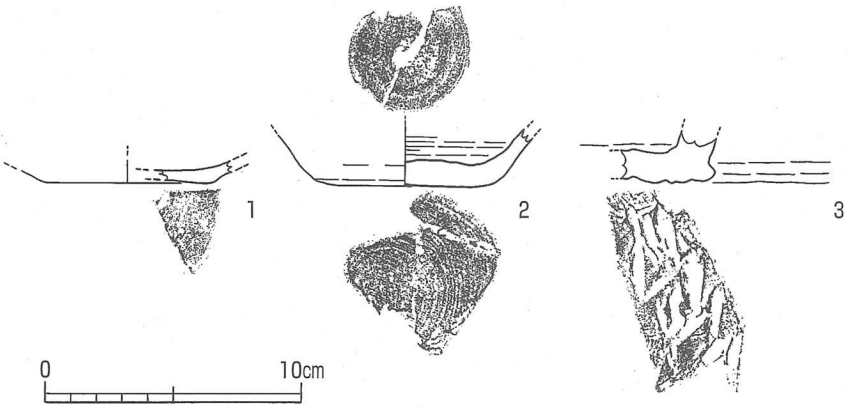
縦長0.05m、横幅0.46mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第36図１は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部には回転糸切痕を残す。内面にタールが付着しており、灯明具と考えられる。

ＳＫ２１（第11・37図）

縦長0.50m、横幅0.34mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第37図１は土師質土器坏または皿で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部には回転糸切痕を残す。内面見込にタールが付着しており、灯明具と考えられる。２は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部には回転糸切痕を残す。口縁部は外反気味に立ち上がる。３は瓦質土器の底部で、内外面にナデ調整を施し、底部に多量の工具痕を残す。器壁の立ち上がりは外方に直線的である。

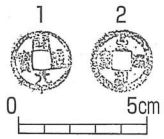


第37図　SK21　出土遺物

ＳＫ１１（第11・29・38図）

縦長0.84m、横幅0.52m、深さ0.13mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第38図１，２は古銭で、１は開元通寶（初鋳：唐621）、２は至和通寶（初鋳：北宋1054・篆書）である。



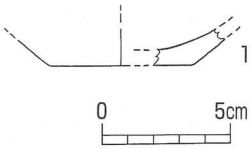
第38図　SK11　出土遺物

ＳＫ１２（第11・29図）

縦長0.70m、横幅0.38m、深さ0.16mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

ＳＫ２５（第11・39図）

縦長0.60m、横幅0.58mを測る土壙で、第④層上面から検出している。



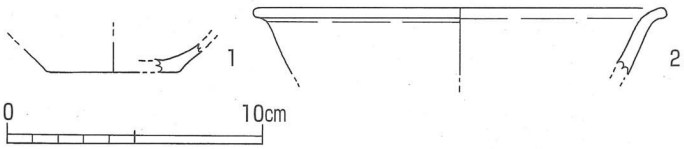
第39図　SK25　出土遺物

第39図１は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部は風化が著しく調整不明である。器壁は外方に直線的に立ち上がる。

ＳＫ２６（第11・40図）

縦長0.40m以上、横幅0.32m以上を測る土壙で、第④層上面から検出している。

第40図１は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部は風化が著しく調整不明である。器壁は外反気味に立ち上がる。２は青磁碗で、内外面ともに施釉し、貫入が入る。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部で外反する。端部は丸く仕上げている。

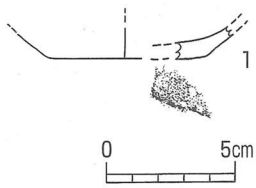


第40図　SK26　出土遺物

ＳＫ３０（第11・41図）

縦長0.60m、横幅0.40m以上を測る土壙で、第④層上面から検出している。

第41図１は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部には回転糸切痕を残す。口縁部は外方に直線的に立ち上がる。

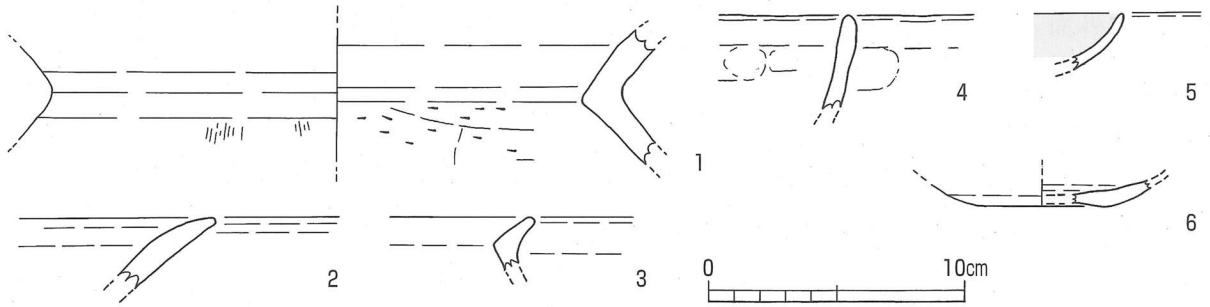


第41図　SK30　出土遺物

ＳＫ６９（第９・42図）

縦長1.26m以上、横幅0.66mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第42図１～３は土師器である。１は甕で、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がる。２は器種不明の口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味にしている。３は壷または甕



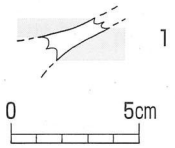
第42図　SK69　出土遺物

の口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。４は製塩土器で、内外面ともにナデ調整を施す。内面には指頭圧痕が残る。口縁部は丸く仕上げている。５は赤彩土器で、内外面ともにナデ調整後、内面に赤彩を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がる。端部は尖り気味に仕上げている。６は須恵器で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部にはナデ調整を施す。内面は赤焼けしている。

ＳＫ６７（第９・43図）

縦長1.46m、横幅0.22mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第43図１は赤彩土器で、内外面ともに風化が著しく調整は不明である。内外面に赤彩が残る。器壁は外方に直線的に立ち上がる。



第43図　SK67　出土遺物

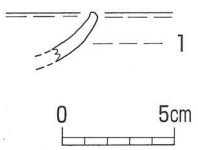
ＳＫ６６（第９・29図）

縦長0.92m、横幅0.90m、深さ0.06mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

ＳＫ５７（第10・44図）

縦長1.00m、横幅0.40mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第44図１は器種不明の口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部でやや内側に巻き込む。

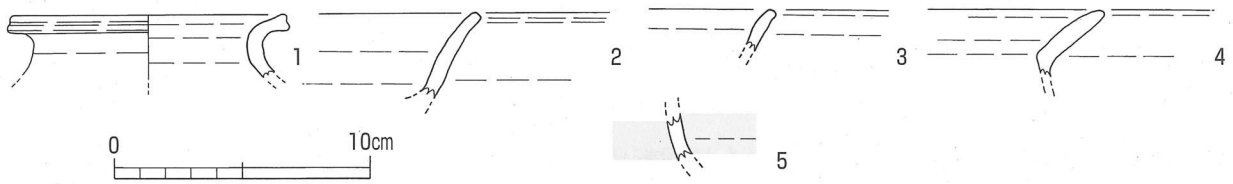


第44図　SK57　出土遺物

ＳＫ６４（第10・29・45図）

縦長2.88m、横幅1.34m、深さ0.23mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第45図１は弥生土器壷で、口縁部内外面にナデ調整を施す。口縁部は外反しながら立ち上がり、端



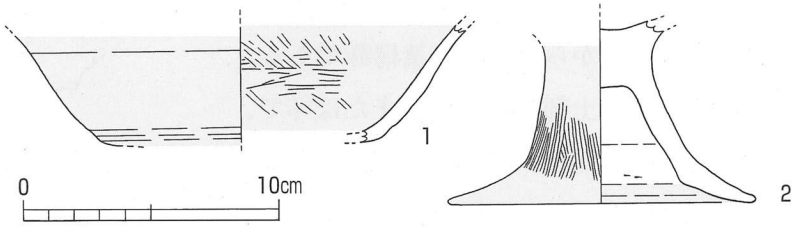
第45図　SK64　出土遺物

部両端を拡張させ平坦面を作る。平坦面には１条の凹線が施される。２は弥生土器または土師器の口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部に平坦面を作る。外面に煤が付着する。３，４は土師器口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部の立ち上がりは、３は外反気味に立ち上がり、端部に平坦面を作る。４は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。４には体部が一部残存しており、内面にヘラケズリ調整を施している。５は赤彩土器で、内面は風化が著しいが、外面はナデ調整を施す。内外面に赤彩が残る。

ＳＫ６５（第10・46図）

縦長1.94m、横幅0.82m以上を測る土壙で、第④層上面から検出している。

第46図１，２は赤彩土器高坏である。１は器部で、内面にハケ目調整を施し、外面にナデ調整を施す。器壁は口唇部で外反気味となる。器部下方に１条の稜が施されている。内外面ともに赤彩が残る。２は脚部で、柱部は内面にヘラケズリ調整、外面にハケ目調整を施し、裾部内外面にナデ調整を施す。器部内面は風化が著しく調整不明である。脚部は外反気味に広がった後、外側に屈曲し外反気味に伸びる。端部は尖り気味に仕上げている。外面及び裾部内面に赤彩が残る。

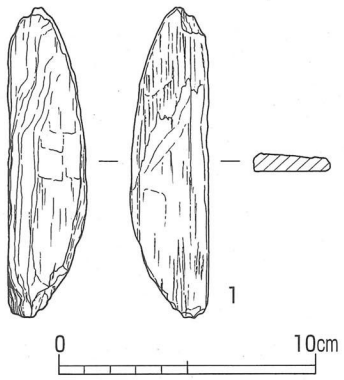


第46図　SK65　出土遺物

ＳＫ７２（第10・47図）

縦長0.74m、横幅0.30m以上を測る土壙で、第④層上面から検出している。

第47図１は木製品で、曲物の底板である。風化が著しいが表面に加工痕が残る。

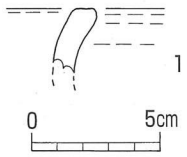


第47図　SK72　出土遺物

ＳＫ７３（第10・48図）

縦長0.56m、横幅0.52mを測る土壙で、第④層上面から検出している。

第48図１は瓷器系陶器壷または甕の口縁部である。内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部で水平な平坦面を作る。平坦面はやや凹んでいる。

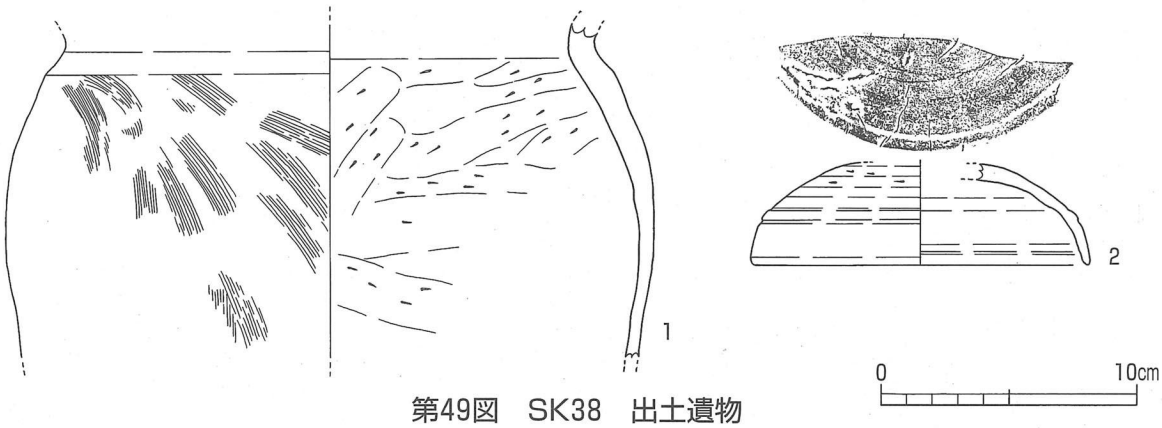


第48図　SK73　出土遺物

ＳＫ３８（第９・49図）

縦長4.46m、横幅2.72mを測る土壙で、第⑤層上面から検出している。

第49図１は土師器甕で、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整、体部外面にハケ目調整を施す。２は須恵器坏蓋で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、天井部外面には回転ヘラケズリ調整、天井部内面にはナデ調整を施す。口縁部は肩部に１条の稜を施した後、内湾気味に伸びる。端部は平坦気味にしており、口唇部内側に１条の沈線が施されている。

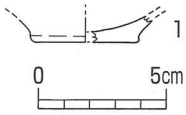


第49図　SK38　出土遺物

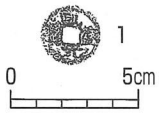
ＳＫ１４・ＳＫ３９・ＳＫ４６（第13・50・51図）

第⑤層上面から検出した遺構群である。

第50図１は土師質土器小皿または坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部は風化が著しく調整不明である。



第50図　SK39 出土遺物



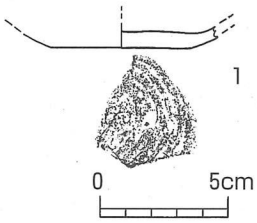
第51図　SK46 出土遺物

第51図１は古銭であるが、風化が激しく詳細は不明である。

ＳＫ５６（第13・52図）

縦長0.60m、横幅0.36mを測る土壙で、第⑤層上面から検出している。

第52図１は土師質土器坏または皿で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部には回転糸切痕を残す。

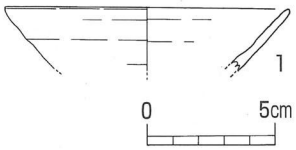


第52図　SK56 出土遺物

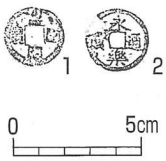
ＳＫ２２・ＳＫ４７（第13・53・54図）

第⑤層上面から検出した遺構群である。

第53図１は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。



第53図　SK22 出土遺物



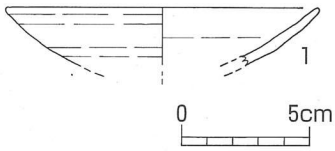
第54図　SK47 出土遺物

第54図１，２は古銭で、１は嘉祐通寶（初鋳：北宋1056・篆書）、２は永楽通寶（初鋳：明1403）である。

ＳＫ４９（第13・55図）

縦長0.72m、横幅0.44mを測る土壙で、第⑤層上面から検出している。

第55図１は土師質土器皿で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。

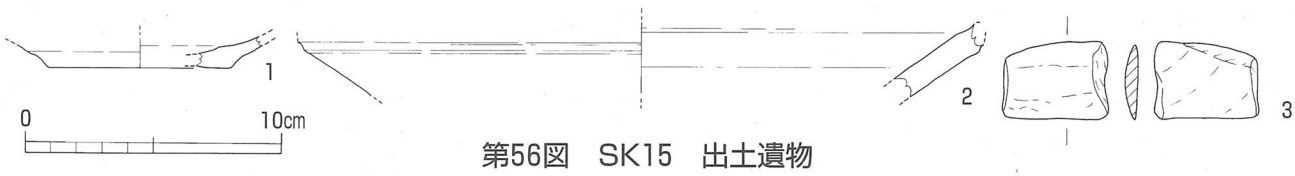


第55図　SK49 出土遺物

ＳＫ１５（第13・56図）

深さ0.49mを測る土壙で、第⑤層上面から検出している。

第56図１は土師質土器坏または皿で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部は風化が著しく調整



第56図　SK15　出土遺物

不明である。２は在地土器鉢で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部に１条の凹線が残るが、先端部は欠損しており、詳細は不明である。３は磨製石器の破片と考えられる。流れ込みの遺物であろう。

ｃ）土壙墓

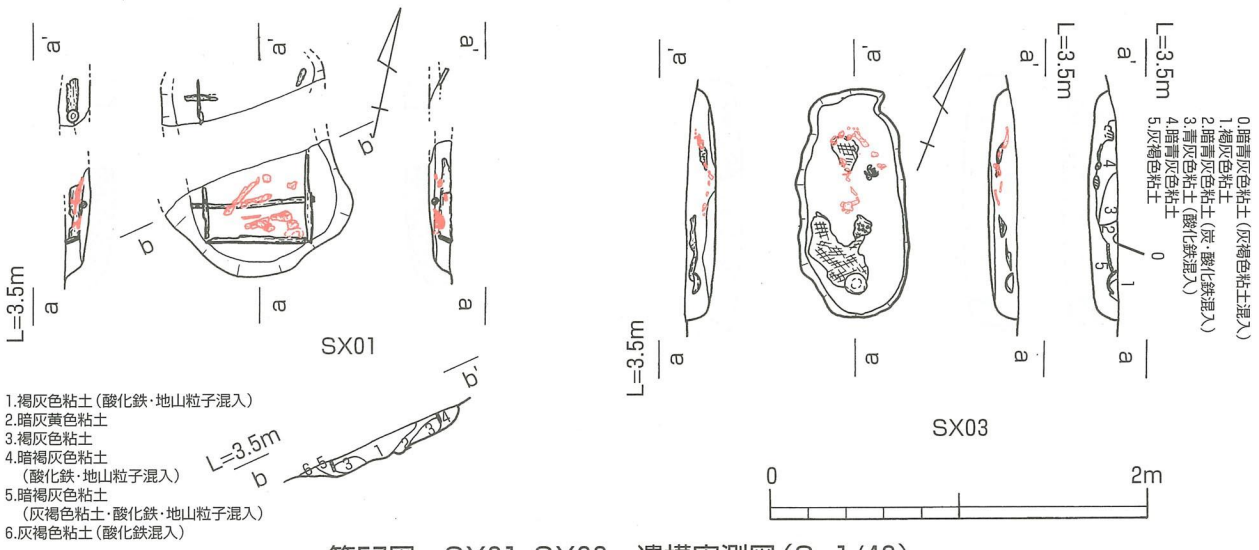
ＳＸ０１（第９・57・60図）

第57図は縦長0.99ｍ以上、横幅0.72ｍ以上、深さ0.11ｍを測る土壙墓で、第④層上面から検出している。土壙内には平面長方形を呈す棺があり、木枠の下部約５㎝が残存するが、上面は土地改良により削平されている。また棺内には人骨が収められているが、残存状況は極めて悪い。人骨は鳥取大学医学部　井上貴央氏により、成人の左右の下肢骨と鑑定された。そのほか土師質土器小皿が出土しており、遺構の時期は１次調査検出墓より古くなるものと考えられる。

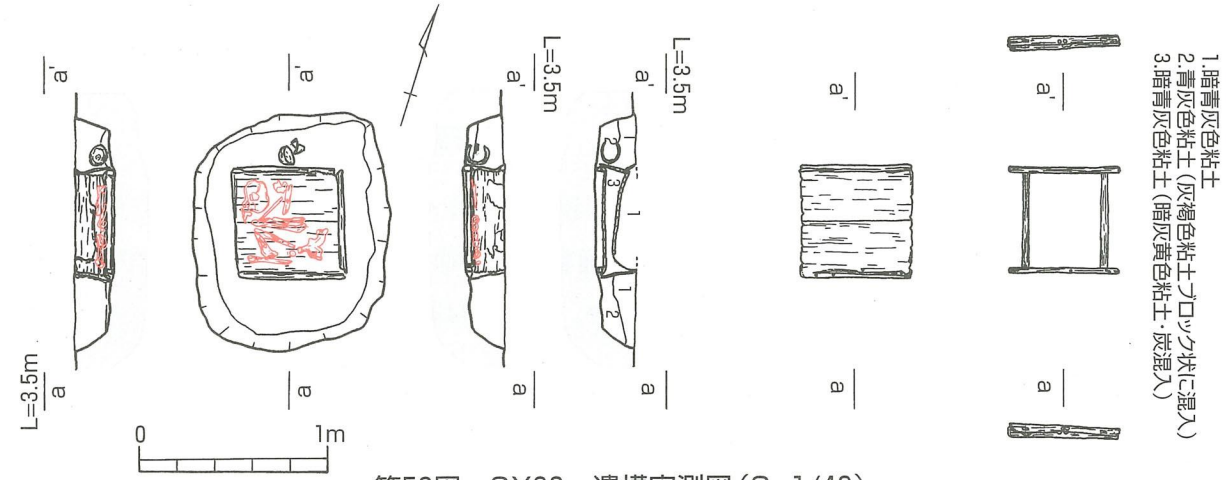
第60図１は土師質土器小皿で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕を残す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。強いナデ調整により器壁内面下方に稜線が残る。

ＳＸ０２（第９・58・59・61図）

縦長1.25ｍ、横幅1.04ｍ、深さ0.20ｍを測る土壙墓で、第④層上面から検出している。平面隅丸方



第57図　SX01・SX03　遺構実測図（S=1/40）



第58図　SX02　遺構実測図（S=1/40）

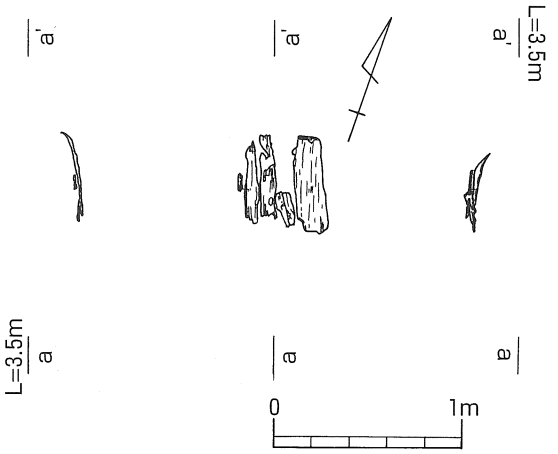
形状の土壙に南北59㎝、東西60㎝を測る平面正方形の棺を納めている。蓋は土圧でやや下がっていたが、土地改良で上面が削平されている遺構が多い中、この遺構はかなり原型に近いものと考えられる。棺内には人骨が収められ、当遺跡で検出された人骨の中では最も残存状況が良好であった。なお、井上貴央氏の鑑定の結果、人骨は成年～壮年前半の骨格であることが推定された。棺の外側から16世紀頃の土師質土器が出土している。

第61図１は土師質土器で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕を残す。口縁部は外反しながら伸び、端部を尖らせている。

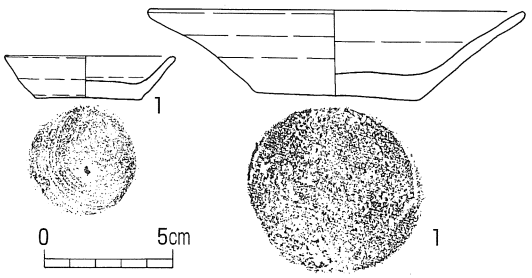
ＳＸ０３（第10・57・62図）

第57図は縦長1.22ｍ、横幅0.58ｍ、深さ0.15ｍを測る土壙墓で、第④層上面から検出している。

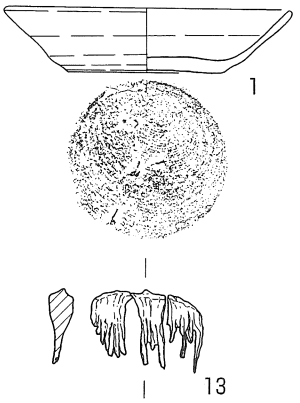
平面楕円状の土壙に筵状の植物遺存体が残る。上面が削平されているが、人骨及び副葬品の直下から検出されていることから、これらは遺体の下に敷いていたか、または遺体を包んでいたものと推察される。人骨は残存状況が極めて悪く、大腿骨、骨盤、肩甲骨などが散乱している。井上貴央氏の鑑定の結果、人骨は12歳～壮年前半の骨格であると推定された。なお出土遺物には古銭11枚、数珠１群、木櫛１個、土師質土器１個がある。古銭は洪武通寶（初鋳1368年，明銭）が含まれるが、土師質土器の時期から遺構の時期は16世紀末から17世紀初頃と考えられる。



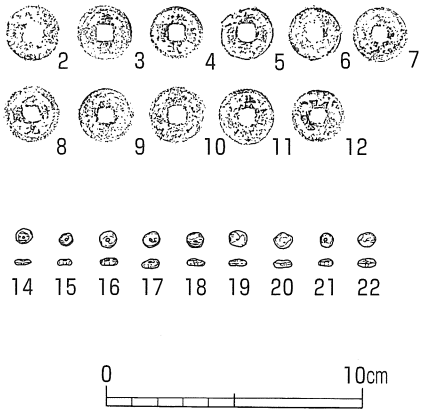
第59図　SX02　木棺蓋板実測図（S=1/40）



第60図　SX01 出土遺物



第61図　SX02　出土遺物



第62図　SX03　出土遺物

第62図１は土師質土器で、内湾気味に伸びた後、器壁中程でやや外形する。端部は尖り気味にしている。２～12は古銭である。２～７，９，11は洪武通寶、８は祥符元寶、10は□寧元□で、12は風化のため詳細は不明である。13は木櫛で、風化が著しい。14～22は数珠である。

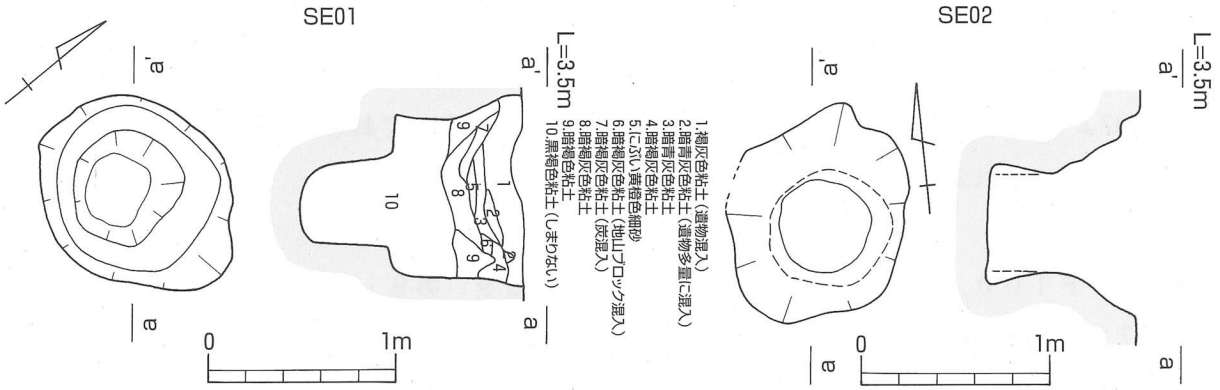
ｄ）井戸

ＳＥ０１（第11・63・65図）

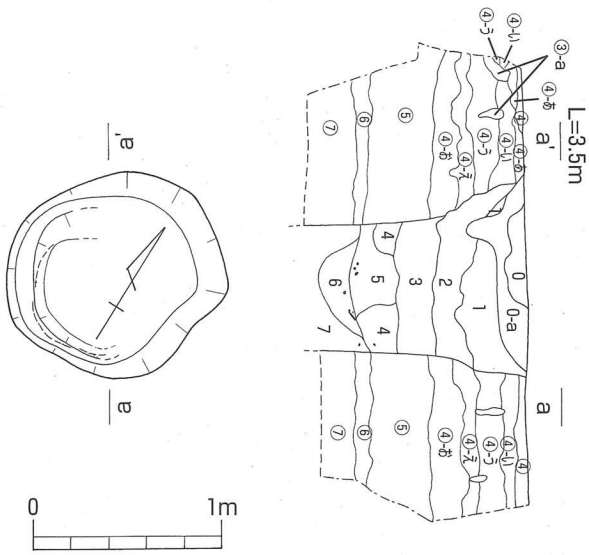
縦長1.16ｍ、横幅0.96ｍ、深さ1.17ｍを測る素掘の井戸で、第④層上面から検出している。

ＳＥ０４（第10・64・67図）

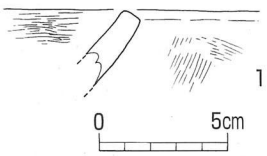
縦長1.16m、横幅1.08m、深さ1.18m以上を測る素掘の井戸で、第④層上面から検出している。少量の遺物とともに骨片、昆虫遺体(外骨格)、木片、オナモミ、種子などが出土している。



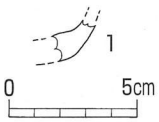
第63図　SE01・SE02　遺構実測図（S=1/40）



第64図　SE04　遺構実測図（1/40）

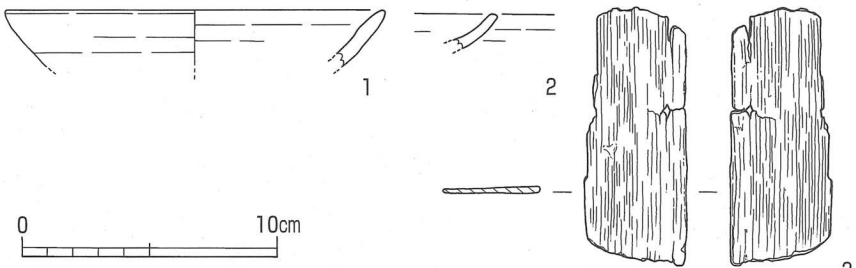


第65図　SE01　出土遺物

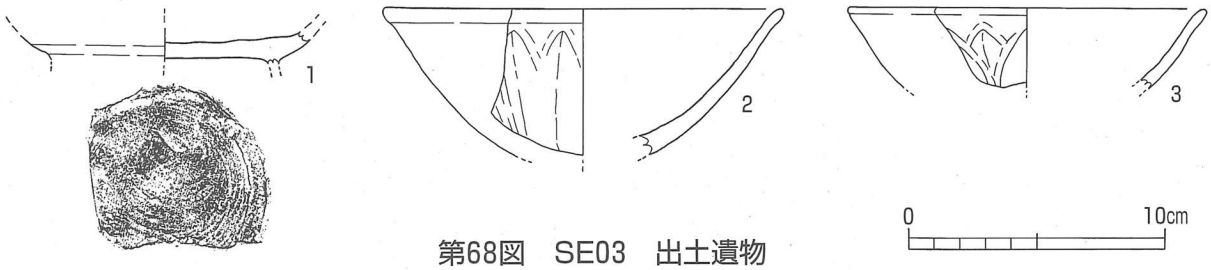


第66図　SE02　出土遺物

第67図１、２は土師質土器で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。１は口唇部でやや外傾し、端部を尖り気味に仕上げ、２は内湾しながら立ち上がり、端部を平坦に仕上げている。３は曲物の枠の一部で、一方の端に穿孔が残る。



第67図　SE04　出土遺物



第68図　SE03　出土遺物

ＳＥ０２（第13・63・66図）

縦長1.12m、横幅1.04m、深さ0.81mを測る素掘の井戸で、第⑤層上面から検出している。

第66図１は土師質土器の小片で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。

ＳＥ０３（第13・68図）

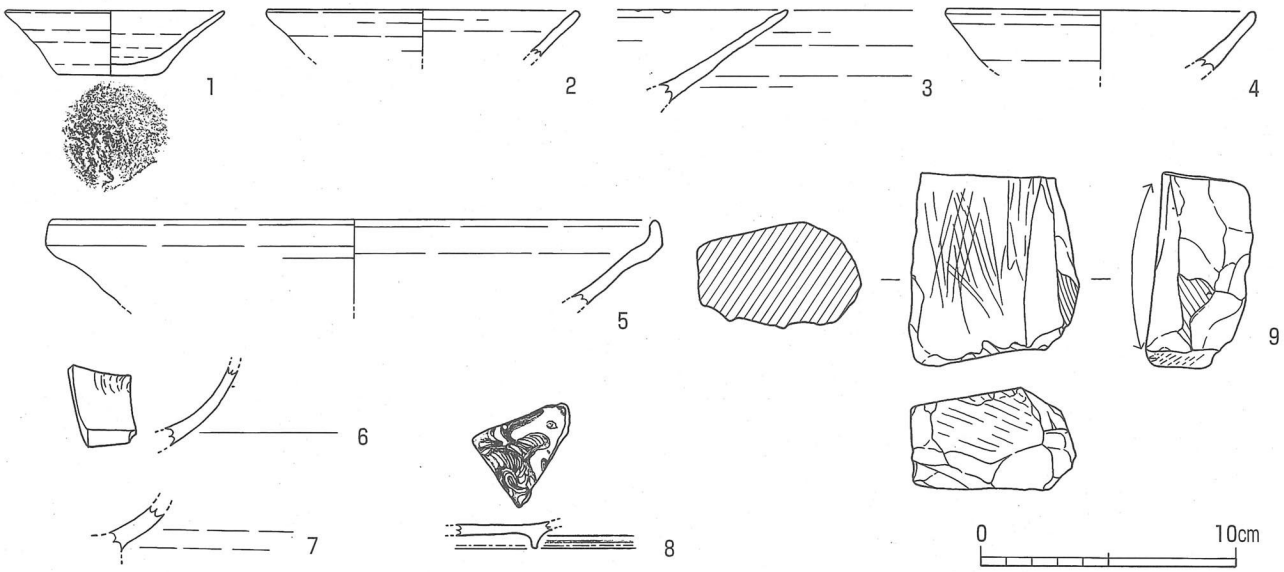
縦長1.82m、横幅1.74m、深さ1.04mを測る素掘の井戸で、第⑤層上面から検出している。切り合い関係からSD07より古い遺構と考えられる。青磁鎬蓮弁文碗が出土しており、遺物の時期から13世紀末以降の遺構と考えられる。

ｅ）ピット

Ｐ２０，Ｐ７０，Ｐ１００，Ｐ９１，Ｐ１６６，Ｐ１４７，Ｐ２９（第９・11・13・69図）

Ｐ２０，Ｐ７０，Ｐ１００，Ｐ２９が第④層上面検出遺構、Ｐ９１，Ｐ１６６，Ｐ１４７が第⑤層上面検出遺構である。

第69図１～４は土師質土器である。１は小皿で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕を残す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている（Ｐ２０）。２～４は坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。２は外方に直線的に伸びるが、口唇部でやや外傾する。端部は平坦気味にしている（Ｐ７０）。３は外方に直線的に立ち上がり、端部は尖らせている。口縁部内面にタールが付着しており、灯明具と考えられる（Ｐ１００）。４は内湾気味に立ち上がり、端部はやや尖らせている（Ｐ９１）。５～７は青磁である。５は内外面ともに施釉し貫入が入る。口縁部は口唇部で外傾した後、上方やや内傾気味に屈曲する。端部は丸く仕上げている（Ｐ１６６）。６は近世磁器である可能性もある。内外面ともに施釉し、内面に陰刻または陽刻、外面に印刻の文様が施されている可能性がある。器壁は内湾しながら立ち上がる（Ｐ１００）。７は碗で、内外面ともに施釉し貫入が入る。器壁は内湾気味に立ち上がる（Ｐ１４７）。８は青花で、内外面ともに施釉し、高台畳付は釉ハギしている。内面見込及び高台外面には染付が施される（Ｐ１６６）。９は砥石で、１面を砥面として利用している（Ｐ２９）。

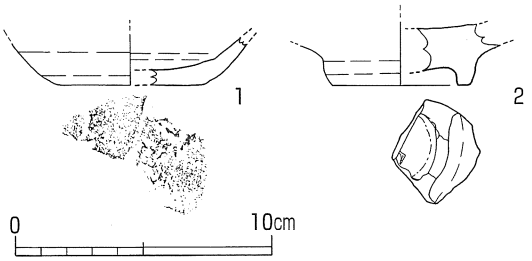


第69図　ピット出土遺物

2．包含層出土遺物

〈第①層〉（第70図）

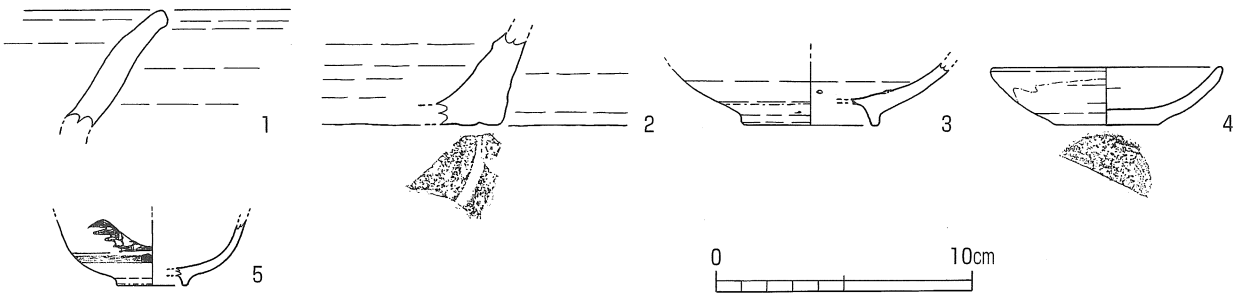
第70図１は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕を残す。器壁は内湾気味に立ち上がる。２は青磁碗で、内外面ともに施釉した後、高台見込を釉ハギしている。



第70図　第①層出土遺物

〈第②層〉（第71図）

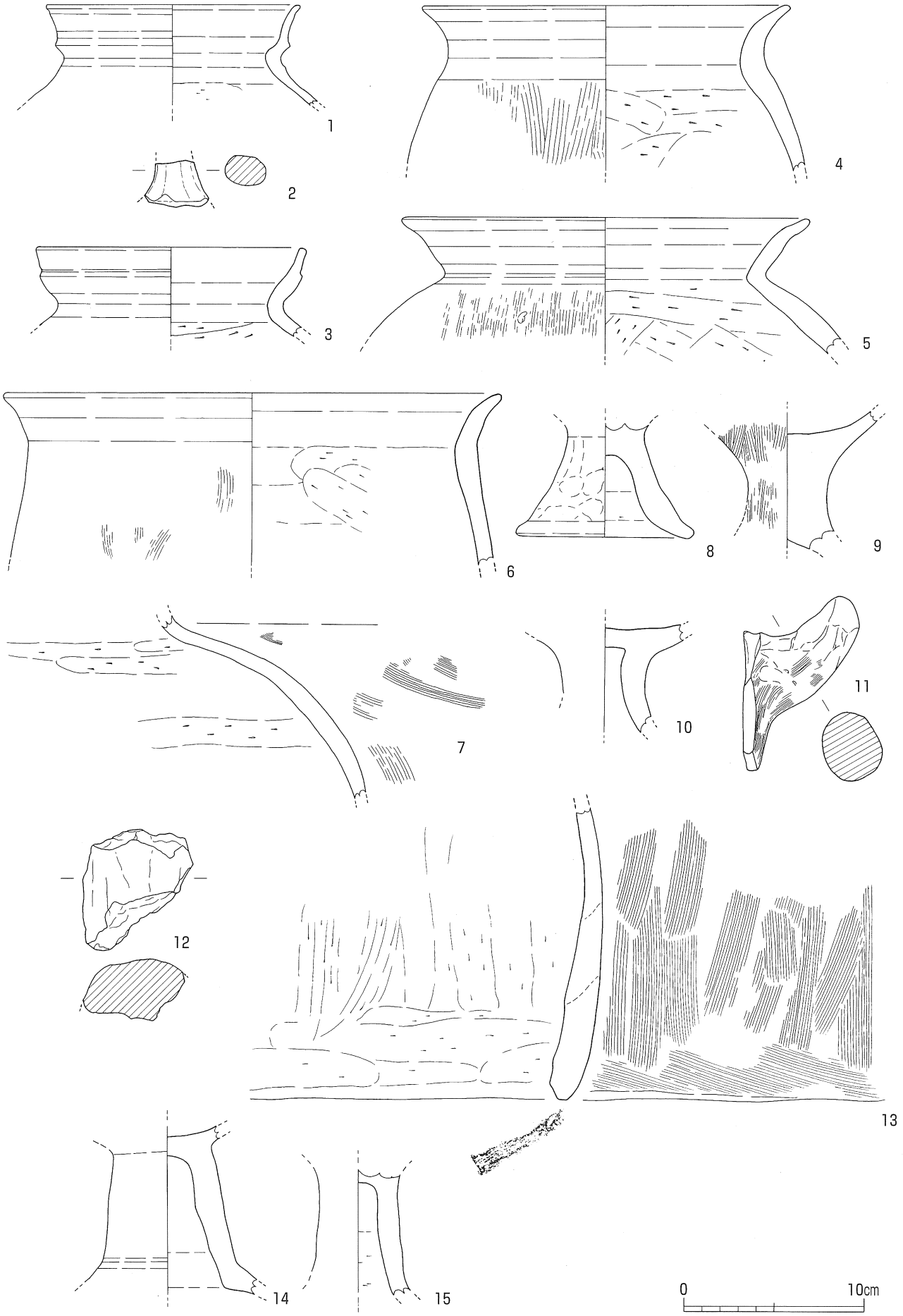
第71図１は土師器で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がった後外傾し、端部に平坦面を作る。２は備前焼壷または甕の底部で、内外面ともにナデ調整を施す。器壁は外反気味に立ち上がる。３は白磁碗で、内外面ともに施釉し、高台周辺は釉ハギしている。内面見込には釉溜が残る。器壁の立ち上がりは内湾しながら立ち上がる。４は近世灯明皿で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕を残す。内面及び口縁部外面に施釉し、その他は露胎としている。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。５は染付碗で、内外面ともに施釉し、高台畳付は釉ハギしている。外面には染付が施されている。器壁は内湾しながら立ち上がった後、外方に直線的に広がる。



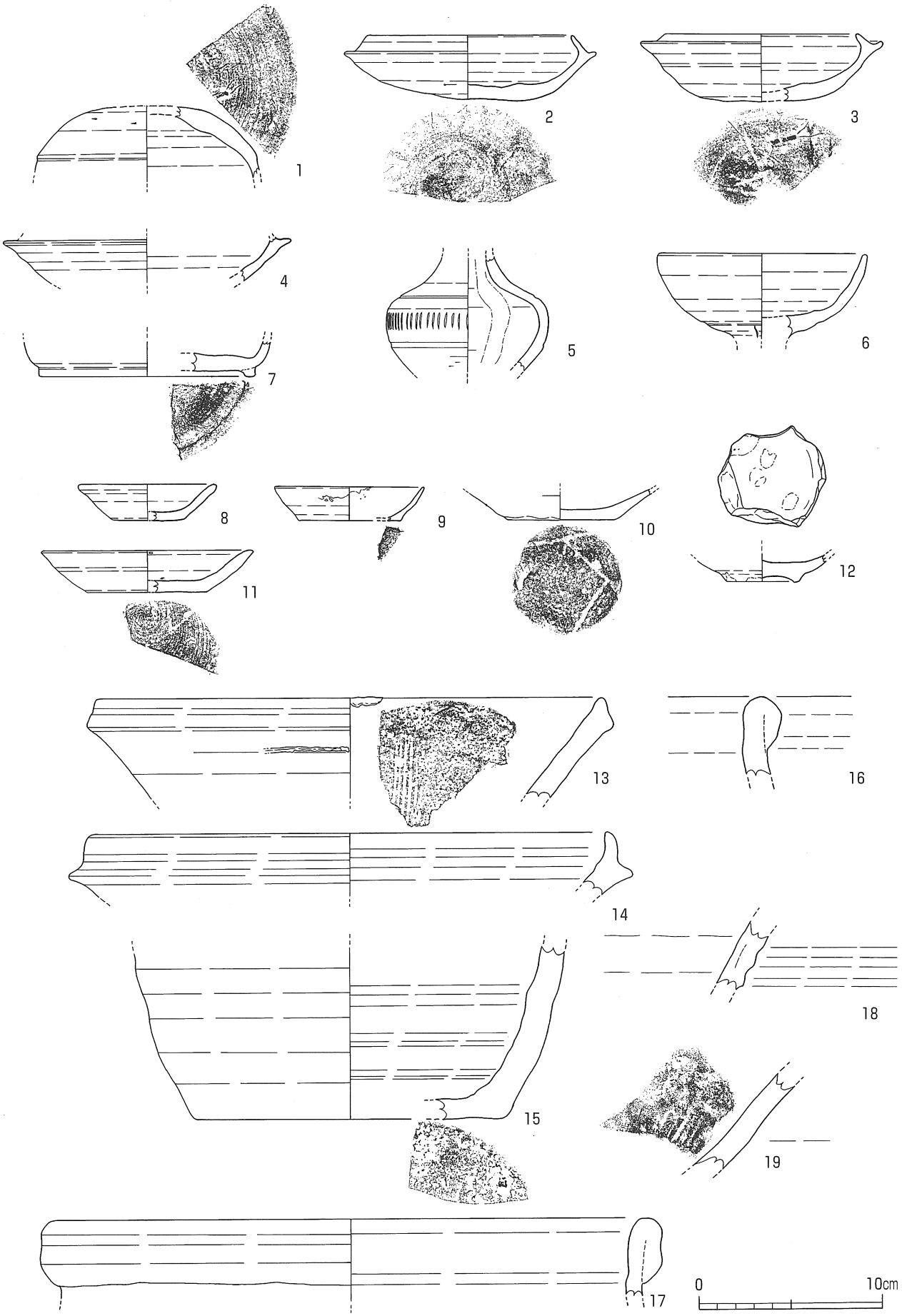
第71図　第②層出土遺物

〈第③層〉（第72～74図）

第72図１，２は弥生土器である。１は甕で、口縁部内外面にナデ調整、体部内面にヘラケズリ調整を施す。また外面にはハケ目調整を施しているものと考えられる。口縁部は複合口縁を呈し、外反しながら立ち上がった後外傾する。端部は尖り気味に仕上げている。２は甑形土器の把手で、外面にヘラミガキ調整を施す。３～13は土師器である。３～７は甕で、３～６は口縁部内外面にナデ調整を施す。７は口縁部を欠損している。３は体部内面にヘラケズリ調整を施す。体部外面は風化が著しい。口縁部は内湾気味に立ち上がり、中程で段を作って薄くしている。端部には平坦面が残る。４～７は内面にヘラケズリ調整、外面にハケ目調整を施す。４はハケ目の間隔が広い。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げている。５は口縁部は外方に直線的に立ち上がった後、口唇部で外傾する。端部は尖り気味にしている。肩部外面１か所に刺突痕を残す。６は外反気味に立ち上がった後外傾する。端部は尖り気味にしている。肩部外面１か所に刺突痕を残す。８～10は高坏である。８は脚部で、柱部は内面にヘラケズリ調整、外面にヘラミガキ調整及び指頭圧痕を施し、裾部内外面にナデ調整を施す。裾部の広がりは外反気味に伸び、端部で外傾する。端部は平坦気味に仕上げている。９は器部内面にナデ調整、器部から柱部にかけての外面で、ハケ目調整を施す。10は器部内面にナデ



第72図　第③層出土遺物　1



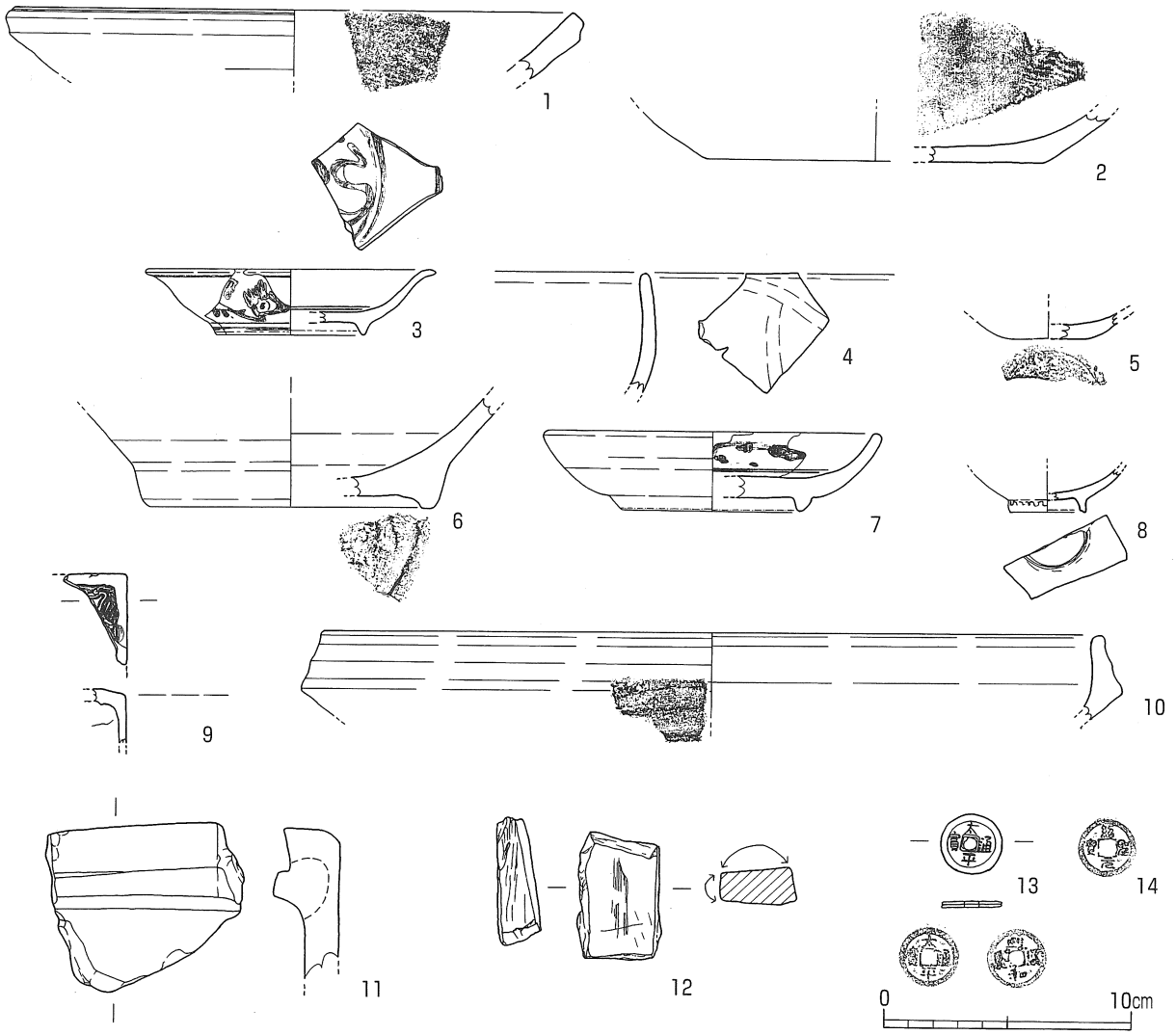
第73図　第③層出土遺物　2

調整を施すが、風化が著しくその他の調整は不明である。脚部は外反気味に広がる。11は甑の把手で、器部内面にはヘラケズリ調整を施し、外面は把手を貼付後、ハケ目調整を施す。12は土製支脚の柱部で、風化が著しいが、外面にヘラミガキ調整を施しているものと考えられる。13は竈で、内面にヘラケズリ調整、外面にハケ目調整を施す。器壁は内湾しながら伸び、端部の平坦面にハケ目調整が施されている。断面には粘土の接合痕が残る。14，15は赤彩土器高坏脚部である。14は裾部内外面及び柱部内面にナデ調整、柱部外面にヘラミガキ調整を施す。外面には赤彩が残る。脚部は外方に直線的に広がった後外側に屈曲し内湾気味に伸びる。15は内面にヘラケズリ調整、外面にナデ調整を施し、柱部外面に赤彩を施す。脚部の広がりは外反気味である。

第73図１～７は須恵器である。１は坏蓋で、内外面に回転ナデ調整、天井部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。肩部には１条の稜が施される。２～４は坏身である。２，３は内外面に回転ナデ調整、底部には回転ヘラ切り調整を施す。２は口縁部は外方に直線的に立ち上がった後外傾し、端部は丸く仕上げている。一方、口縁部内側にはかえりが施され、やや反り上がる。端部を尖り気味にしている。３は口縁部は内湾しながら立ち上がった後外傾し、内湾気味となる。端部を丸く仕上げている。一方、口縁部内側にはかえりが施され、内側に直線的に立ち上がり、端部に平坦気味な面を残している。４は底部及びかえりを欠損しているが、内外面ともに回転ナデ調整が施されている。器壁は内湾気味に立ち上がった後外傾する。端部は尖りぎみにしている。５は瓿の頸部から体部で、内外面ともに回転ナデ調整を施すが、底部周辺には回転ヘラケズリ調整が施されている。体部外面にはカキ目調整を施した後、２条の沈線の間に刺突文を連続させる。内面には自然釉が流れ込み、外面では頸部から肩部に自然釉が被る。６は高坏の器部で内外面ともに回転ナデ調整を施す。器部下方には透かしの切り込みと考えられるヘラ状工具痕が残る。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。７は高台付坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に高台を後付している。８～11は土師質土器である。８，９は土師質土器小皿で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施す。８は底部は風化のため調整不明である。口縁部は外方に直線的に立ち上がった後外傾する。端部は尖り気味に仕上げている。９は底部に糸切痕を残す。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を尖らせている。口縁部内外面にタールが付着しており、灯明皿と考えられる。10は坏で、内外面に回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕を残す。器壁の立ち上がりは外反気味である。11は皿で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕が残る。口縁部は内湾気味に立ち上がった後外反気味となる。端部は尖らせている。内面見込にタールが付着しており、灯明皿と考えられる。12は紛青沙器で、高台見込を削り出し、内外面ともに施釉している。器壁は内湾気味に立ち上がる。高台畳付及び内面見込に胎土目積の痕跡が残る。13～18は備前焼である。13，14は擂鉢で、内外面ともにナデ調整を施した後、内面に擂目を施す。13は口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部に平坦面を作った後、両端部をやや拡張させている。先端部は尖り気味にしている。外面に重ね焼の痕跡、口縁部内面に粘土塊が残る。14は両端部を拡張させ、内側端部は内湾気味に立ち上がる。先端部は尖り気味にしている。15は壷または甕の底部で、内外面ともにナデ調整を施す。器壁は内湾気味に立ち上がる。外面に灰及びヘラ状工具痕が残る。16～18は甕口縁部で、内外面ともにナデ調整を施し、断面に口縁部を外側に折り曲げた痕跡が残る。16は玉縁状、17はやや帯状となっている。18は口縁部外面を凹状に数条ナデ上げるタ

イプのものである。19は在地土器で鍋と考えられる。内面に粗いハケ目調整、外面にハケ目調整が施されている。器壁の立ち上がりは内湾気味に立ち上がった後、外反気味となる。

第74図１，２は瓦質土器擂鉢である。１は内面に放射状の擂目を施し、口縁部外面には回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾気味に立ち上がった後段状にナデ上げ、端部の平坦面に凹線を施す。２は底部で、器壁内面に擂目を施す。内面見込はナデ調整している。外面は風化が著しいが、ナデ調整して



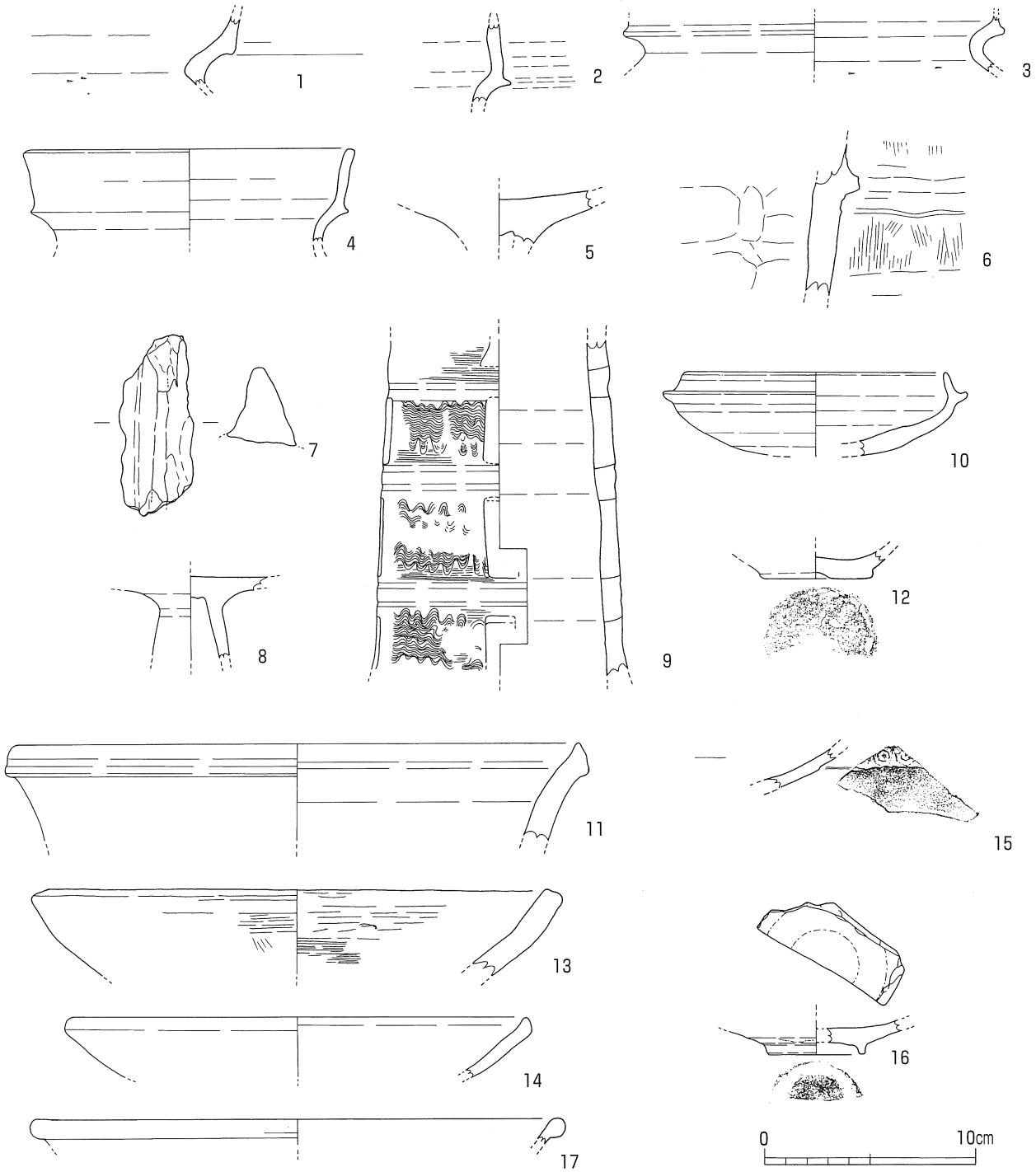
第74図　第③層出土遺物　3

いるものと考えられる。３は青花小皿で、内外面にともに施釉し、染付を施す。一方、高台畳付は釉ハギし、砂粒が付着している。口縁部は口唇部から外反し、端部を平坦気味な面に仕上げている。４は布志名焼のボテボテ茶埦で、内外面ともに施釉するが、２次焼成を受けており釉薬が溶け出ている。口縁部は内側にやや内湾気味に立ち上がる。端部は丸く仕上げている。５は近世灯明皿で、底部の調整は不明であるが、外面に回転ナデ調整を施し、内面に施釉している。外面にはタールが付着する。６は近世捏鉢で、内面に施釉し、外面は回転ヘラケズリ調整後、薄く釉薬が被る。底部は高台見込を削り出している。器壁の立ち上がりは外方に直線的である。７～９は近世以降の染付である。７は皿で、内外面ともに施釉し、内面に染付を施す。内面見込には蛇ノ目釉ハギが施され、高台畳付も釉ハギしている。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げている。８は明治以降のものであろう。内外面ともに施釉し、高台畳付を釉ハギしている。高台外面及び高台見込に染付を施す。器壁

の立ち上がりは内湾気味である。９は箱物であるが、器種は不明である。内面は露胎でナデ調整し、外面は施釉し天井部に染付を施す。10は焙烙で、土師質のものである。口縁部内外面に回転ナデ調整を施し、底部にチヂレ目を残す。口縁部は内傾した後上方に伸びる。端部は丸く仕上げている。11は近世以降の瓦である。12は砥石で、２面を砥面として使用している。13，14は古銭である。13は太平通寶(北宋，初鋳976年)及び宣和通寶(北宋，初鋳1119年)で、２枚が付着していた。14は紹聖元寶(北宋，初鋳1094年)である。

〈第③－Ｚ層〉（第75図）

第75図１～４は弥生土器で、口縁部内外面ともにナデ調整を施す。１，３は体部内面にヘラケズリ調整が残る。口縁部は１～４何れも複合口縁を呈するが、１は外方に直線的に、２はやや内側に直線的

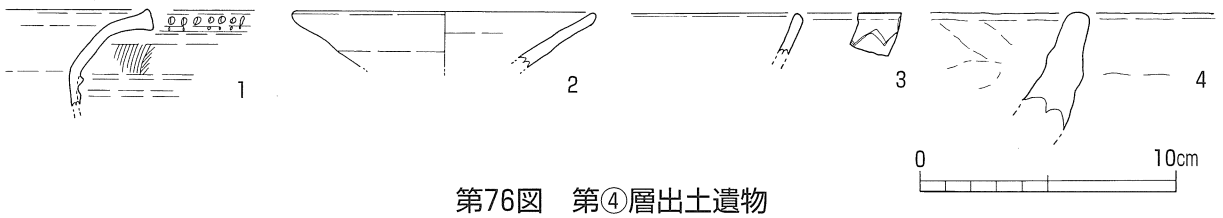


第75図　第③-Z層　出土遺物

に、4は外方に直線的に伸びた後やや外傾する。4は端部に平坦面を作っている。5～7は土師器である。5は高坏で、内外面ともに風化が著しい。器部中央に円盤が充填されている。6は円筒埴輪で、内面にヘラケズリ調整、外面にハケ目調整を施す。外面にはタガが施され、タガ下方には1条の凹線が施されている。立ち上がりは外方に直線的である。7は竈の炊口正面左袖部分である。内面にヘラミガキ調整またはヘラケズリ調整を施し、外面にナデ調整を施している。8は赤彩土器高坏で、外面に赤彩が残る。器部内面は風化のため調整不明であるが、脚部内面にはヘラケズリ調整、器部及び脚部外面にはナデ調整が施されている。脚部の広がりは外方に直線的である。9～11は須恵器である。9は器台の脚部で、内面にナデ調整、外面には粗いナデ調整後波状文、1～2条単位の沈線を施す。2段以上の透かしが施されている。10は坏身で、焼成が悪く軟質である。風化が著しいが口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施しているものと考えられる。口縁部は内湾しながら立ち上がった後外傾し、端部を尖り気味に仕上げている。一方、口縁部内側にはかえりが施され、反り上がり気味に立ち上がった後、端部を尖り気味に仕上げている。11は甕の口縁部で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部内側を拡張させて尖り気味に仕上げている。12は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部は風化が著しいが糸切痕が残る。13は在地土器鉢で、内外面にハケ目調整を施し、口縁部をナデ消している。口縁部は器部中程から外方に直線的に立ち上がり、端部に平坦面を作っている。14，15は瓦質土器である。14は鉢で、風化が著しいが器部内面に擂目が施されていた可能性がある。口縁部には回転ナデ調整が施されている。口縁部の立ち上がりは内湾気味で、端部は丸く仕上げているが、内側をやや拡張させている。15は器種不明で、内面にナデ調整を施し、外面にヘラミガキ調整後スタンプ文を施す。器壁の立ち上がりは内湾気味である。16，17は近世陶器である。16は高台削り出し後内外面に施釉し、高台周辺を露胎としている。内面見込には蛇ノ目釉ハギを施す。17は鉢の口縁部で、内外面ともに施釉する。口縁部は外側に折り返し玉縁状にしている。

〈第④層〉（第76図）

第76図1は弥生土器で、内面にナデ調整、外面にナデ調整及びハケ目調整を施す。頸部には2条の貼付突帯が残る。口縁部は外方に直線的に立ち上がった後外傾し、端部を両側に拡張させて2条の擬



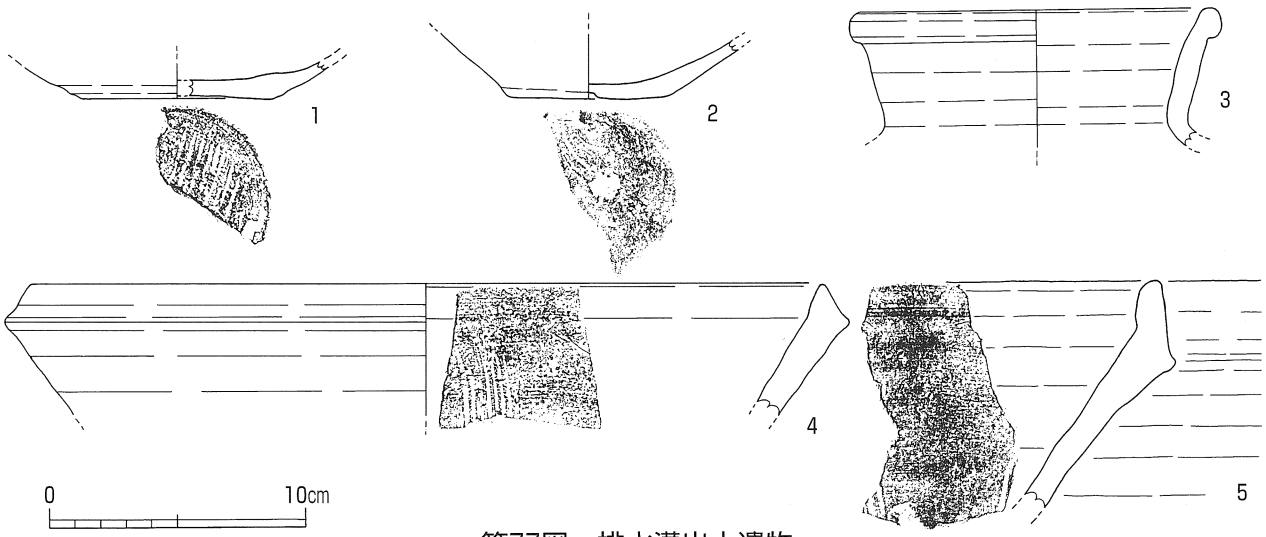
第76図　第④層出土遺物

凹線、刺突文を施している。2は土師質土器皿で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。3は青磁碗で、内外面ともに施釉し、外面には線状に形骸化した鎬蓮弁が残る。口縁部端部は丸く仕上げられている。4は坩堝で、内面に粗いナデ調整を施し、口縁部内外面にナデ調整を施す。口縁部の立ち上がりは内湾気味で、端部には平坦面が作られている。

3．その他の出土遺物

〈排水溝〉（第77図）

第77図1は須恵器で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部には静止ヘラ切り痕が残る。器壁は

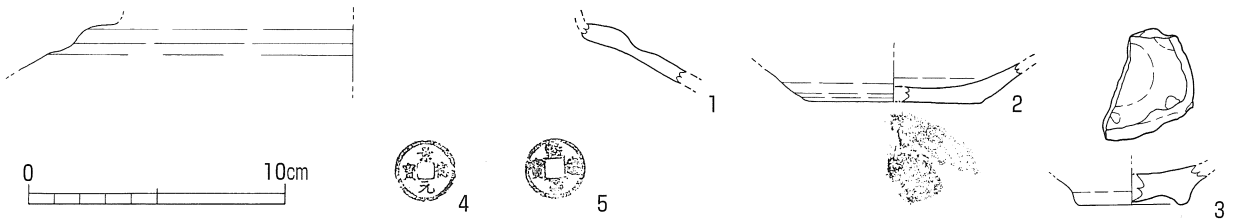


第77図　排水溝出土遺物

外方やや内湾気味に立ち上がる。２は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕を残す。外面には酸化鉄が付着し、器壁は外方に直線的に立ち上がる。３は瓷器系陶器甕で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部で玉縁状にしている。口縁部内面及び肩部外面に自然釉が付着する。４，５は備前焼擂鉢で、内外面ともにナデ調整を施し、内面に擂目を施している。いずれも口唇部下に重ね焼の痕跡が残り、４は口縁部内外面及び内面に、５は口唇部に灰が被る。口縁部は４が外方に直線的に立ち上がった後、端部内側をやや拡張させ、５は外反気味に立ち上がった後、端部内側を上方に大きく拡張させている。

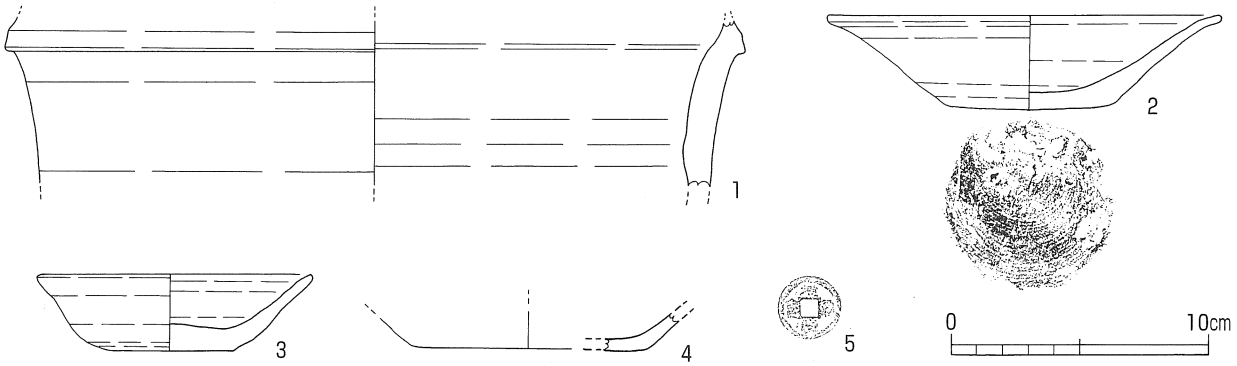
〈その他〉（第78図）

第78図１は土師器甕で、内面は風化のため調整不明であるが、外面にはナデ調整を施す。肩部外面に強いナデ調整が施されている。２は土師質土器坏で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切痕を残す。内面見込にタールが付着することから灯明具と考えられる。器壁は外方に直線的に立ち上がる。３は粉青沙器で、内外面ともに施釉する。内面見込及び高台畳付には胎土目積の痕跡が残る。４，５は古銭で、4は景徳元寶（初鋳1004年）、５は熙寧元寶（初鋳1068年）である。５は篆書体である。



第78図　その他の出土遺物　1

第79図１は須恵器甕で、内外面ともにナデ調整を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を平坦気味にして両端部を拡張させている。内側端部は上方に伸びるが欠損している。２～４は土師質土器坏である。２，３は口縁部内外面及び内面見込に回転ナデ調整を施す。２は底部に回転糸切痕を残す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、口唇部で外傾する。端部は平坦気味にしている。３は底部は風化が著しく調整不明である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。



第79図　その他の出土遺物　2

４は風化が著しく調整不明である。器壁は外方に直線的に立ち上がる。５は古銭で、表面には篆書体で元□□寶とある。元祐通寶、元符通寶などが考えられるが詳細は不明である。

４．まとめ

壱丁田遺跡は平成６年の都市計画道路「出雲市駅前白枝線」街路事業に伴う試掘調査の際に確認された遺跡である。１次調査では江戸後半期の墓が確認されているが、今回の調査ではこれより古い時期の墓が確認された。当遺跡からは３基の墓を確認しており、いずれも人骨が出土している。当地は墓地的な性格を持っている可能性があり、今後文献などの調査も必要であると考える。

溝状遺構は出土遺物、遺構の平行・垂直関係、堆積土から、Ａ群（～８ｃ：ＳＤ０２、ＳＤ１９、ＳＤ２０）、Ｂ群（ＳＤ１５・ＳＤ２１）、Ｃ群（15ｃ～近世：ＳＤ０７・ＳＤ０８・ＳＤ１０・ＳＤ０９・ＳＤ０１・ＳＤ１７・ＳＤ１４・ＳＤ２３）、Ｄ群（土地改良以前：ＳＤ１８、杭列）、Ｅ群（時期不明：ＳＤ０６・ＳＤ０５・ＳＤ０４）の５群に大別され、出土遺物及び切り合い関係からＡ群→Ｂ群→Ｃ群→Ｄ群の変遷が確認できる（Ｅ群は不明）。

各時期の遺構の性格については不明な点もあるが、各群の時期をそれぞれＡ～Ｄ期とすると、Ａ期にはＳＤ０２から甕・竈・甑などが出土しており、遺跡付近での生活が推定される。Ｂ期については遺物が僅少なため不明な点が多いが、Ｃ期には中世後期にやや生活の痕跡が見られるものの、近世に近づくにつれ墓域的様相を帯びてくるものと考えられる。Ｄ期には既に水田となっていたのであろう。

壱丁田遺跡については、平成７年度の１次調査以来調査が実施されていなかったが、近年２次調査、３次調査と調査が続くこととなった。包含層からの出土遺物に須恵器器台・円筒埴輪があり、周辺に未知の古墳・祭祀遺跡が存在する可能性も考えられるなど、今後の検討課題も多分にあるが、発掘調査により貴重なデータが得られたことは、今後、出雲平野の遺跡を研究するうえでの一助となるであろう。

第４章　自然科学分析

１．壱丁田遺跡から出土した人骨について

鳥取大学医学部機能形態統御学講座形態解析学分野
井上　貴央、川久保善智

１．はじめに

出雲市の壱丁田遺跡から、江戸時代のものと考えられる木棺墓が検出された。この中には、若干の人骨の痕跡が認められた。そこで、現地で出土状況を確認するとともに、それらの人骨の今後の取り扱いについて検討した。

人骨が確認された木棺墓は３基である。いずれも骨の保存状況は極めて悪く、たとえ保存処理を行ったとしても、そこから得られる人類学的所見は少ないと判断した。現地で部位を確認できる骨は確認し、歯の部分については周辺の土ごと一括に取り上げて、年齢査定を行うことにした。

本稿では、現地での骨の遺存状況と、歯の検討の結果得られた所見について報告する。

２．出土人骨について

１）　１号墓　ＳＸ０１(旧遺構名ＳＫ１６)

下肢骨の一部が確認できたが、骨の保存状況は極めて悪い。大腿骨（左右不明）と考えられるもの、右脛骨片、脛骨(左右不明)と考えられるものが判明したにすぎず、全体的な埋葬肢位は特定することができなかった。

おそらく１体の埋葬と考えられるが、確証はない。下肢骨の大きさから考えて、成人の骨であることは確かであるが、年齢・性別は不詳である。

２）２号墓　ＳＸ０２

方形の木棺墓から人骨が検出された。木棺はよく保存されていたが、骨の遺存状況は悪く、いくつかの部位が同定できたにすぎない。木棺の北西隅には頭蓋骨が、南東隅には骨盤が認められた。両者の間からは７本の長骨が検出されている。上肢骨では上腕骨(左右不明)と左尺骨、下肢骨では大腿骨(左右不明)、左大腿骨、腓骨(左右不明)、大きさから考えて大腿骨か脛骨と考えられるものである。総合的に見て、本木棺墓には１体の埋葬があったと考えられる。

頭蓋骨はその概形をうかがうことはできるが、詳細な部位は特定できない。若干の歯の遺存が認められたので、その部分を一括して取り上げ、精査を行ったところ、遺存歯は７本あり、その歯式は以下のようであった。なお、咬耗度は上顎右犬歯、上顎右第１小臼歯、下顎右第１小臼歯がMartin分類の１度で、そのほかの歯はMartin分類の２度であった。

M_1	P_1	C	
M_2	P_1	C	C

本埋葬人骨の性別は特定できないが、歯の咬耗の具合から判断して、年齢は成年～壮年前半と考えられる。

３）３号墓　ＳＸ０３

長円形の土壙から人骨が検出されたが、保存状況は極めて悪い。土壙の北側からは歯が検出されて

おり、南側から骨盤が検出されているので、頭を北に置いて伸展位で埋葬されていたかに見えるが、歯の近くからは大腿骨と考えられる骨も出土しているので、正確な埋葬肢位は判定できない。同定できた骨は、大腿骨(左右不明)のほかに、肩甲骨片(左右不明)、上腕骨片(左右不明)、寛骨片(左右不明)である。土壙の骨の分布状況などから考えて、本土壙には1体の埋葬があったと考えられるが、確証はない。

歯の遺存していた部分を一括して取り上げ、精査を行ったところ、遺存歯は2本あり、その歯式は以下のようであった。なお、上顎右側切歯の咬耗度は、現地で確認した際には咬耗が認められなかった(Martin分類の0度)。下顎左犬歯にはMartin分類の1度以上の咬耗が認められるが、全体として咬耗は進行していないと思われる。

I_2	
	C

本埋葬人骨の性別は特定できないが、歯の咬耗の具合から判断して、年齢は12歳～壮年前半と考えられる。

3．おわりに

稿を終わるにあたり、本人骨の検討の機会を与えていただいた出雲市教育委員会の各位、とりわけ現地での骨の出土状況の検討に有益な示唆をいただいた遠藤正樹氏に深謝申し上げる。

2．壱丁田遺跡第３次発掘調査出土の昆虫遺体について

島根県立三瓶自然館
皆木　宏明

1．はじめに

本報告書は、出雲市教育委員会が出雲市白枝町字壱丁田の遺跡発掘調査で発見された井戸から出土した昆虫遺体試料についての報告書である。

壱丁田遺跡は出雲平野のほぼ中央（出雲市白枝町）に位置し、西に浜山砂丘、約２km南方には神戸川を望む。

2．試料について

昆虫遺体の試料は、出雲市教育委員会が平成17年（2005）に壱丁田遺跡第３次発掘調査２区（発掘調査の東部分、610m²）において確認された、井戸（図１）内の粘土層から見つかったものである。試料は粘土層から水洗し抽出したもので、昆虫遺体だけでなく木片や植物種子も含まれていた。

図１　壱丁田遺跡の井戸

3．結果

抽出した試料を分析した結果、計210点の昆虫遺体が確認された。同定結果を表１、主な昆虫遺体の写真を図２に示す。抽出した昆虫遺体はコウチュウ類が大部分を占め、その他ハサミムシ目、ハエ目が同定できた。最も多く確認された昆虫種はコウチュウ目オサムシ科のオオゴミムシ（*Lesticus magnus*）であった。これは大型のゴミムシ類で、頭部・前胸部、上翅が産出した。オサムシ科の仲間ではヒョウタンゴミムシ類のナガヒョウタンゴミムシ（*Scarites terricola*）も見つかっている。他にはコガネムシ科のコアオハナムグリ（*Oxycetonia jucunda*）、エンマコガネ属の１種（*Onthophagus* sp.）、ハムシ科のアカガネサルハムシ（*Acrothinium gaschkevitchii*）、ヨモギハムシ（*Chrysolina aurichalcea*）などが同定された。コウチュウ目以外ではハマベハサミムシ（*Anisolabis maritima*）、ハエ目の囲蛹が見つかった。

4．考察

オオゴミムシやナガヒョウタンゴミムシは地表徘徊性のコウチュウ類で、河川敷、畑地などオープンな草地環境に好んで生息する（石谷，1996）。アカガネサルハムシやヨモギハムシのハムシ類は食植性昆虫であり、食草との関係から草原から林縁部までの草地環境に生息する種類である。上記の種の中で、特にナガヒョウタンゴミムシは河口域を中心として、河川敷やそれに隣接する畑地や緑地公園等に生息する種であり（建設省，1994；北村・宮永，1999；石谷・門脇，2000）、当時の遺跡の周辺環境も河川沿いの開けた草地環境であったことが推察される。

表１．壱丁田遺跡から出土した昆虫遺体

昆虫名 / 試料番号	SE04④	SE04⑤	SE04⑥	SE04⑦	SE04⑧	SE04周辺	計
コウチュウ目							
オサムシ科							
ナガヒョウタンゴミムシ			7	3			10
オオゴミムシ		6	27	30	33	1	97
ゴモクムシ亜科(属種未定)						1	1
オサムシ科(属種未定)	1	2	9	13	24		49
コガネムシ科							
コアオハナムグリ		1	1				1
コガネムシ科(属種未定)			5	4			10
エンマコガネ属			4		15	1	20
コメツキムシ科							
コメツキムシ科(属種未定)			2		1		3
ハムシ科		1					
アカガネサルハムシ			1				2
ヨモギハムシ				1	2		3
ゾウムシ科							
ゾウムシ科(属種未定)	1		2	1	2	1	7
科属種未定甲虫					4		4
ハサミムシ目							
ハサミムシ科							
ハマベハサミムシ					2		2
ハエ目							
ハエ目の１種(囲蛹)				1			1

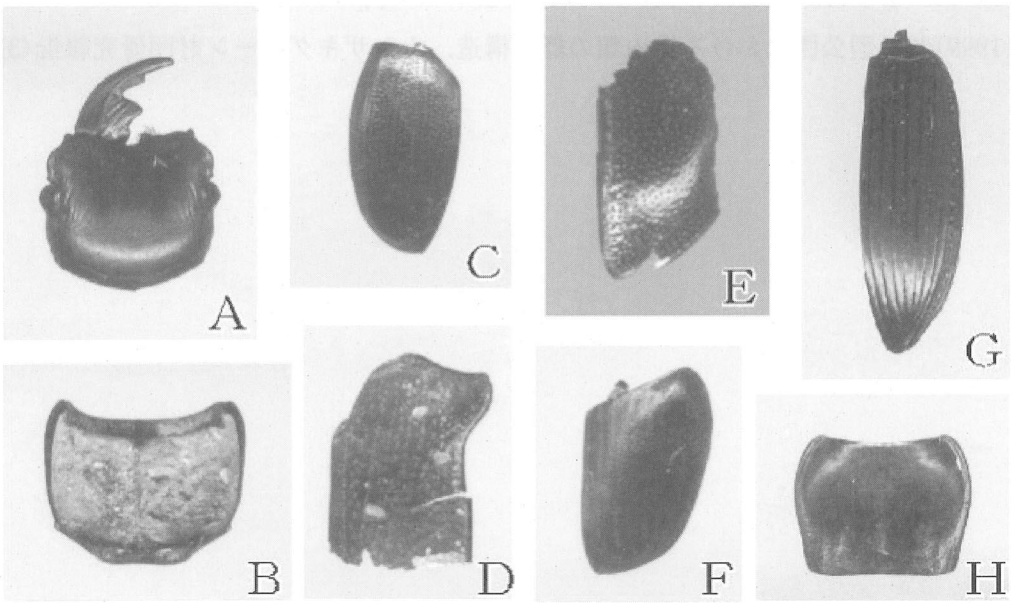


図２　壱丁田遺跡から出土した昆虫遺体

A、B　ナガヒョウタンゴミムシ（A：頭部、B：前胸背板）
C　ヨモギハムシ（左上翅）
D　コアオハナムグリ（右上翅破片）
E　アカガネサルハムシ（上翅破片）
F　エンマコガネ属の１種（右上翅）
G、H　オオゴミムシ（G：右上翅、H：前胸背板）

抽出試料には昆虫遺体だけでなく植物種子も含まれていた。特に多かった植物種子としてはギシギシ(*Rumex japonicus*)が148点、オナモミ(*Xanthium strumarium*)が88点出土している。ギシギシ、オナモミともに荒地や路地に生える植物で河川敷にもよく見られる植物であり、確認された昆虫種から推測される環境とも合致する。

今回、地表徘徊性のコウチュウ類であるオサムシ科の仲間が遺跡の井戸内で多数発見された。オオゴミムシやナガヒョウタンゴミムシは、県内での昆虫相調査でも溝などへの落ち込み個体が多く採集されていることから(石谷・門脇，2000)、井戸が落とし穴トラップのように働き、集められたものだと思われる。また、食糞性のコガネムシ類であるエンマコガネ属の１種が採集されていることから、付近にトイレもしくは家畜等の獣糞が存在する環境であった可能性がある。

なお、植物種子の同定にあたっては島根県立三瓶自然館の葭矢崇司学芸員にご助言いただいた。この場をかりて厚くお礼申し上げる。

引用文献

石谷正宇(1996)環境指標としてのゴミムシ類(甲虫目：オサムシ科、ホソクビゴミムシ科)に関する生態学的研究．比和科学博物館研究報告(34)1-110.

石谷正宇・門脇久志(2000)島根半島のゴミムシ類．ゴミムシ相およびその生物学的研究(4)．ホシザキグリーン財団研究報告(4)27-39.

建設省中国地方建設局出雲工事事務所編(1994)斐伊川水系の昆虫．200pp.

北村憲二・宮永龍一(1999)郊外型公園における昆虫類の群集構造．ホシザキグリーン財団研究報告(3)209-222.

出土遺物観察表（土器類）

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高	手法の特徴	備考
16-1	図版7	ＳＤ０５	弥生土器	壷 or 甕	—	—	—	内：不明 外：凹線、刺突文、	
17-1	〃	ＳＤ０７	土師質土器	小皿	—	4.0	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-2	〃	ＳＤ０７	土師質土器	坏	—	6.0	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-3	〃	ＳＤ０７	土師質土器	坏	—	(6.4)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-4	〃	ＳＤ０７	土師質土器	坏	—	(5.8)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-5	〃	ＳＤ０７	青磁	碗	—	—	—	内：施釉 外：施釉	口縁部端反
-6	〃	ＳＤ０７	備前焼	壷 or 甕	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	外面把手貼付 外面に灰被る
18-1	〃	ＳＤ０８	土師質土器	小皿 or 坏	—	3.9	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-2	〃	ＳＤ０８	備前焼	擂鉢	(27.4)	—	—	内：ナデ 外：ナデ	内面に１単位６条の擂目 口縁部内面に灰付着
-3	〃	ＳＤ０８	在地土器	坏	(8.9)	(6.8)	3.5	内：ナデ 外：ナデ、指頭圧痕	底部、内面見込及び器壁外面に植物依存体の痕跡
-4	〃	ＳＤ０８	陶器	壷	—	(9.4)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ	近世 底部削り出し高台
19-1	〃	ＳＤ０２	弥生土器	甕	—	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ、ハケ目	複合口縁？
-2	〃	ＳＤ０２	土師器	甕	(27.8)	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ、ハケ目	
-3	〃	ＳＤ０２	土師器	甕	(17.0)	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ、ハケ目 外：ナデ、ハケ目	
-4	〃	ＳＤ０２	土師器	甕	(21.6)	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ	
-5	〃	ＳＤ０２	土師器	甕	—	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ	口縁部外面に煤付着
-6	〃	ＳＤ０２	土師器	甕	—	—	—	内：ヘラケズリ、ハケ目 外：ナデ、ハケ目	
-7	〃	ＳＤ０２	土師器	甕	—	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ	
-8	〃	ＳＤ０２	土師器	高坏	—	—	—	内：粗いナデ 外：ナデ	
-9	〃	ＳＤ０２	土師器	竈	—	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ	
-10	〃	ＳＤ０２	赤彩土器	高坏	19.2	13.7	14.8	内：ナデ 外：ナデ、ハケ目、ヘラミガキ	器部内外面及び脚部外面に赤彩
-11	〃	ＳＤ０２	土師器	甑	—	—	—	内：調整不明 外：ヘラミガキ	
20-1	図版8	ＳＤ０２	須恵器	坏身	(11.8)	—	3.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ切り	
-2	図版7	ＳＤ０２	須恵器	高坏	—	—	—	内：回転ナデ、ナデ 外：回転ナデ	１条の沈線を界線として２段３方に三角透かし
-3	〃	ＳＤ０２	須恵器	瓶	—	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、カキ目、回転ヘラ切り	肩部外面に自然釉付着
-4	図版8	ＳＤ０２	須恵器	甕	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ、波状文	外面下から２条、３条、３条の沈線
-5	〃	ＳＤ０２	土師質土器	坏	—	4.8	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-6	〃	ＳＤ０２	備前焼	甕	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	口縁部玉縁状 断面に粘土の接合痕
21-1	〃	ＳＤ１４	須恵器	坏身	—	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-2	〃	ＳＤ１４	青磁	碗	—	—	—	内：施釉 外：施釉	口縁部端反
22-1	〃	ＳＤ１５	土師器	高坏	—	—	—	内：ヘラケズリ？ 外：ハケ目	
23-1	〃	ＳＤ１８	赤彩土器	高坏	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	
-2	〃	ＳＤ１８	土師質土器	坏	—	(6.4)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-3	〃	ＳＤ１８	肥前系磁器	染付碗	—	—	—	内：施釉 外：施釉	外面染付
24-1	〃	ＳＤ２１	土師器	甕	(19.2)	—	—	内：ナデ 外：ナデ	外面に煤付着
-2	〃	ＳＤ２１	赤彩土器	不明	—	(9.2)	—	内：ハケ目 外：ナデ	内外面ともに赤彩
25-1	〃	ＳＤ１９	土師器	高坏	—	—	—	内：不明 外：ナデ or ヘラミガキ	

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高	手法の特徴	備考
-2	図版8	ＳＤ１９	須恵器	坏身	11.2	—	3.7	内：回転ナデ、ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ切り	
-3	〃	ＳＤ１９	須恵器	甕	(31.4)	—	—	内：ナデ 外：ナデ	
26-1	〃	ＳＤ２０	赤彩土器	高坏	—	(9.6)	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ、ヘラミガキ	内外面ともに赤彩
-2	〃	ＳＤ２０	土師質土器	坏	(10.2)	—	—	内：ナデ 外：ナデ	
27-1	〃	ＳＤ２５	土師器	甕	—	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ	
-2	〃	ＳＤ２５	赤彩土器	高坏	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ、ヘラミガキ	柱部外面及び裾部内外面に赤彩
-3	〃	ＳＤ２５	土師器	竈	—	—	—	内：ヘラケズリ 外：ナデ	
-4	〃	ＳＤ２５	須恵器	高坏	(17.4)	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	口縁部外面に灰付着
-5	〃	ＳＤ２５	須恵器	坏 or 高坏	—	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
30-1	〃	ＳＫ０９	土師質土器	小皿	8.0	4.0	2.4	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	内面見込タール付着 灯明皿
-2	〃	ＳＫ０９	土師質土器	坏	(13.4)	5.5	3.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	内面タール付着 灯明具
-3	〃	ＳＫ０９	土師質土器	坏	(12.2)	(5.4)	3.4	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-4	〃	ＳＫ０９	土師質土器	坏	12.2	5.7	3.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-5	〃	ＳＫ０９	土師質土器	坏	—	(6.2)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
31-1	〃	ＳＫ３５	備前焼	擂鉢	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	内面に１単位５条以上の擂目注口あり 断面に粘土の接合痕
32-1	図版9	ＳＫ１７	土師器	甕	(25.2)	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ、ハケ目	
-2	〃	ＳＫ１７	土師器	竈	(28.8)	(31.4)	33.9	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	
-3	〃	ＳＫ１７	土師器	甑	—	—	—	内：ヘラケズリ 外：調整不明	裾部に穿孔
-4	〃	ＳＫ１７	赤彩土器	高坏	(15.0)	—	—	内：ナデ 外：ナデ	内外面ともに赤彩
-5	〃	ＳＫ１７	赤彩土器	高坏	—	(11.8)	—	内：ナデ 外：ナデ	外面に赤彩
-6	〃	ＳＫ１７	須恵器	高坏	(16.5)	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	口唇部に１条の稜線
-7	〃	ＳＫ１７	須恵器	甕	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ、カキ目	肩部外面に自然釉付着
-8	〃	ＳＫ１７	須恵器	提瓶	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	外面に灰付着
33-1	〃	ＳＫ０４	須恵器	高坏	—	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ	脚部２～３方向に台形透かし
-2	〃	ＳＫ０４	土師質土器	坏	—	(6.4)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
34-1	〃	ＳＫ０６	土師器	高坏	—	—	—	内：ナデ 外：調整不明	
35-1	〃	ＳＫ０７	赤彩土器	高坏	—	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ、ヘラミガキ	器部内外面・脚柱部外面・裾部外面に赤彩
-2	〃	ＳＫ０７	瓷器系陶器	甕	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	肩部外面に灰被る
-3	〃	ＳＫ０７	瓦質土器	奈良火鉢	—	—	—	内：調整不明 外：調整不明	脚部
36-1	〃	ＳＫ２０	土師質土器	坏	—	4.3	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	内面タール付着 灯明具
37-1	〃	ＳＫ２１	土師質土器	坏 or 皿	—	(6.8)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	内面タール付着 灯明具
-2	〃	ＳＫ２１	土師質土器	坏	—	(7.0)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-3	〃	ＳＫ２１	瓦質土器	奈良火鉢	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	底部に多量の工具痕
39-1	〃	ＳＫ２５	土師質土器	坏	—	(5.6)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
40-1	〃	ＳＫ２６	土師質土器	坏	—	(5.2)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-2	〃	ＳＫ２６	青磁	碗	(15.7)	—	—	内：施釉 外：施釉	口縁部端反
41-1	〃	ＳＫ３０	土師質土器	坏	—	(6.1)		内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
42-1	〃	ＳＫ６９	土師器	甕	—	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ、ハケ目	

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高	手法の特徴	備考
-2	図版9	ＳＫ６９	土師器	甕or壷	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	
-3	〃	ＳＫ６９	土師器	甕or壷	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	
-4	〃	ＳＫ６９	製塩土器		—	—	—	内：ナデ、指頭圧痕 外：ナデ	
-5	〃	ＳＫ６９	赤彩土器	坏or 高坏	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	内面に赤彩
-6	〃	ＳＫ６９	須恵器	坏	—	(5.1)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ナデ	内面赤焼
43-1	〃	ＳＫ６７	赤彩土器	高坏	—	—	—	内：調整不明 外：調整不明	内外面ともに赤彩
44-1	〃	ＳＫ５７	土師器	不明	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	
45-1	〃	ＳＫ６４	弥生土器	壷	(10.5)	—	—	内：ナデ 外：ナデ	口縁部端部に１条の凹線
-2	〃	ＳＫ６４	弥生土器 or 土師器	甕or壷	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	外面に煤付着
-3	〃	ＳＫ６４	土師器	甕or壷	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	
-4	〃	ＳＫ６４	土師器	甕or壷	—	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ	
-5	〃	ＳＫ６４	赤彩土器	不明	—	—	—	内：調整不明 外：ナデ	内外面ともに赤彩
46-1	〃	ＳＫ６５	赤彩土器	高坏	—	—	—	内：ハケ目 外：ナデ	器部下方に１条の稜 内外面ともに赤彩
-2	〃	ＳＫ６５	赤彩土器	高坏	—	(11.8)	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ、ハケ目	外面及び裾部内面に赤彩
48-1	〃	ＳＫ７３	瓷器系陶器	甕or壷	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	口縁部端部平坦面に１条の凹線
49-1	図版10	ＳＫ３８	土師器	甕	—	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ、ハケ目	
-2	〃	ＳＫ３８	須恵器	坏蓋	(13.0)	—	—	内：回転ナデ、ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ	肩部に１条の稜 口唇部内側に１条の沈線
50-1	〃	ＳＫ３９	土師質土器	坏or 小皿	—	(4.2)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
52-1	〃	ＳＫ５６	土師質土器	坏or皿	—	(5.4)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
53-1	〃	ＳＫ２２	土師質土器	坏	(10.8)	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
55-1	〃	ＳＫ４９	土師質土器	坏or皿	(12.1)	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
56-1	〃	ＳＫ１５	土師質土器	坏or皿	—	(7.2)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-2	〃	ＳＫ１５	在地土器	鉢	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	端部に１条の凹線
60-1	〃	ＳＸ０１	土師質土器	小皿	6.5	4.2	1.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	器壁内面下方に１条の稜
61-1	〃	ＳＸ０２	土師質土器	坏	14.5	6.4	3.4	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
62-1	〃	ＳＸ０３	土師質土器	坏	11.0	6.1	2.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
65-1	〃	ＳＥ０１	土師質土器	鉢	—	—	—	内：ハケ目、ナデ 外：ハケ目、ナデ	
66-1	〃	ＳＥ０４	土師質土器	坏	(14.7)	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-2	〃	ＳＥ０４	土師質土器	皿	—	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
67-1	〃	ＳＥ０２	土師質土器	坏	—	—	—	内：ナデ 外：調整不明	
68-1	〃	ＳＥ０３	須恵器	坏	—	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-2	〃	ＳＥ０３	青磁	碗	(15.6)	—	—	内：施釉 外：施釉	
-3	〃	ＳＥ０３	青磁	碗	(14.0)	—	—	内：施釉 外：施釉	釉調粗い
69-1	図版11	Ｐ２０	土師質土器	小皿	(8.4)	4	2.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-2	〃	Ｐ７０	土師質土器	坏	(11.8)	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-3	〃	Ｐ１００	土師質土器	坏	—	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	内面タール付着 灯明具
-4	〃	Ｐ９１	土師質土器	坏	(11.7)	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-5	〃	Ｐ１６６	青磁		(23.6)	—	—	内：施釉 外：施釉	貫入入る

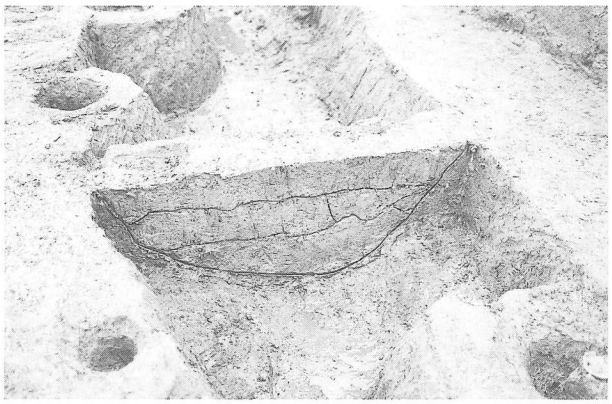
挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高	手法の特徴	備考
-6	図版11	Ｐ１００	青磁？		—	—	—	内：施釉 外：施釉	内面に陰刻または陽刻 外面に陰刻の文様 近世磁器の可能性あり
-7	〃	Ｐ１４７	青磁	碗	—	—	—	内：施釉 外：施釉	貫入入る
-8	〃	Ｐ１６６	青花		—	—	—	内：施釉 外：施釉	高台畳付は釉ハギ 内面見込及び高台外面には染付
70-1	図版10	第①層	土師質土器	坏	—	(6.0)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-2	〃	第①層	青磁	碗	—	(5.4)	—	内：施釉 外：施釉	高台見込を釉ハギ
71-1	図版11	第②層	土師器	甕	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	
-2	〃	第②層	備前焼	壷 or 甕	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	
-3	〃	第②層	白磁	碗	—	(5.2)	—	内：施釉 外：施釉	高台周辺は釉ハギ 内面見込に釉溜残る
-4	〃	第②層	近世陶器	皿	(9.0)	(4.0)	2.3	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	内面及び口縁部外面に施釉 灯明皿
-5	〃	第②層	近世磁器	碗	—	(2.7)	—	内：施釉 外：施釉	高台畳付は釉ハギ 外面には染付
72-1	〃	第③層	弥生土器	甕	(13.9)	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ハケ目	口縁部は複合口縁
-2	〃	第③層	弥生土器	甑形土器	—	—	—	内：調整不明 外：ヘラミガキ	把手
-3	〃	第③層	土師器	甕	(14.3)	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：調整不明	
-4	〃	第③層	土師器	甕	(19.8)	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ハケ目	
-5	〃	第③層	土師器	甕	(22.0)	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ハケ目	肩部外面１か所に刺突痕
-6	〃	第③層	土師器	甕	(27.0)	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ハケ目	肩部外面１か所に刺突痕
-7	〃	第③層	土師器	甕	—	—	—	内：ヘラケズリ 外：ハケ目	
-8	〃	第③層	土師器	高坏	—	(9.0)	—	内：ヘラケズリ、ナデ 外：ヘラミガキ、指頭圧痕、ナデ	
-9	〃	第③層	土師器	高坏	—	—	—	内：ナデ 外：ハケ目	
-10	〃	第③層	土師器	高坏	—	—	—	内：ナデ 外：調整不明	
-11	〃	第③層	土師器	甑	—	—	—	内：ヘラケズリ 外：ハケ目	甑の把手
-13	〃	第③層	土師器	竈	—	—	—	内：ヘラケズリ 外：ハケ目	断面に粘土の接合痕
-14	〃	第③層	赤彩土器	高坏	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ、ヘラミガキ	脚部外面に赤彩
-15	〃	第③層	赤彩土器	高坏	—	—	—	内：ヘラケズリ 外：ナデ "	柱部外面に赤彩
73-1	〃	第③層	須恵器	坏蓋	—	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ	肩部に１条の稜
-2	〃	第③層	須恵器	坏身	11.2	3.5	5.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ	
-3	〃	第③層	須恵器	坏身	10.4	(3.7)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ	
-4	〃	第③層	須恵器	坏身	—	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-5	〃	第③層	須恵器	瓶	—	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ヘラ、カキ目	外面２条の沈線の間に刺突文 内面頸部から肩部に自然釉
-6	〃	第③層	須恵器	高坏	(11.0)	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	透かしの切り込み ヘラ状工具痕
-7	〃	第③層	須恵器	坏	—	—	(11.9)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-8	図版12	第③層	土師質土器	小皿	(7.5)	(3.8)	(2.0)	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-9	〃	第③層	土師質土器	小皿	(7.9)	(5.6)	(1.9)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	内外面タール付着 灯明皿
-10	〃	第③層	土師質土器	坏	—	5.7	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-11	〃	第③層	土師質土器	皿	(11.3)	(6.5)	(2.3)	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	内面タール付着 灯明皿
-12	〃	第③層	青磁 (粉青沙器)	碗	—	3.9	—	内：施釉 外：施釉	高台及び内面に胎土目積
-13	〃	第③層	備前焼	擂鉢	(27.3)	—		内：ナデ、擂目 外：ナデ	外面に重ね焼痕 口縁部内面に粘土痕

挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高	手法の特徴	備考
-14	図版12	第③層	備前焼	擂鉢	(27.8)	—	—	内：ナデ、擂目 外：ナデ	
-15	〃	第③層	備前焼	甕 or 壷	—	(17.0)	—	内：ナデ 外：ナデ	外面に灰付着 外面にヘラ状工具痕
-16	〃	第③層	備前焼	甕	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	口縁部玉縁状
-17	〃	第③層	備前焼	甕	(32.2)	—	—	内：ナデ 外：ナデ	口縁部やや帯状
-18	〃	第③層	備前焼	甕			—	内：ナデ 外：ナデ	口縁部外面を凹状に数条ナデる
-19	〃	第③層	在地土器	鍋	—	—	—	内：粗いハケ目 外：ハケ目	
74-1	〃	第③層	瓦質土器	擂鉢	(22.6)	—	—	内：放射状の擂目、ナデ 外：回転ナデ	端部の平坦面に凹線
-2	〃	第③層	瓦質土器	擂鉢	—	(13.5)	—	内：擂目、ナデ 外：ナデ	
-3	〃	第③層	青花	小皿	(11.6)	(5.9)	2.7	内：施釉 外：施釉	染付あり 高台釉ハギ、砂粒付着
-4	〃	第③層	布志名焼	椀	—	—	—	内：施釉 外：施釉	ボテボテ茶碗 2次被熱
-5	〃	第③層	近世陶器	皿	—	(3.5)	—	内：施釉 外：回転ナデ	外面タール付着 灯明皿
-6	〃	第③層	近世陶器	捏鉢	—	(11.4)	—	内：施釉 外：回転ヘラ	薄く釉薬被る
-7	〃	第③層	近世磁器	皿	(13.2)	(7.1)	3.2	内：施釉 外：施釉	内面染付 内面見込に蛇ノ目釉ハギ 高台釉ハギ
-8	図版11	第③層	近世磁器	皿	—	(5.0)	—	内：施釉 外：施釉	高台釉ハギ 外面染付
-9	〃	第③層	近世磁器	不明	—	—	—	内：ナデ 外：施釉	外面天井部に染付
-10	〃	第③層	土師質土器	焙烙	(31.4)	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、チヂレ目	
75-1	図版12	第③-Z層	弥生土器		—	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ	口縁部複合口縁
-2	〃	第③-Z層	弥生土器	甕 or 壷	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ	口縁部複合口縁
-3	〃	第③-Z層	弥生土器	壷	—	—	—	内：ナデ、ヘラケズリ 外：ナデ	口縁部複合口縁
-4	〃	第③-Z層	弥生土器	壷	(15.0)	—	—	内：ナデ 外：ナデ	口縁部複合口縁
-5	〃	第③-Z層	土師器	高坏	—	—	—	内：調整不明 外：調整不明	器部中央に円盤充填
-6	〃	第③-Z層	土師器	円筒埴輪	—	—	—	内：ヘラケズリ 外：ハケ目	タガ下方に1条の凹線
-7	〃	第③-Z層	土師器	竈	—	—	—	内：ヘラミガキ、ヘラケズリ 外：ナデ	炊口正面左袖部分
-8	〃	第③-Z層	赤彩土器	高坏	—	—	—	内：調整不明 外：ナデ、ヘラケズリ	外面に赤彩
-9	〃	第③-Z層	須恵器	器台	—	—	—	内：ナデ 外：粗いナデ	波状文 1～2条単位の沈線 2段以上の透かし
-10	〃	第③-Z層	須恵器	坏身	(12.1)	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	軟質
-11	〃	第③-Z層	須恵器	甕	(26.3)	—	—	内：ナデ 外：ナデ	
-12	〃	第③-Z層	土師質土器	坏	—	(5.2)	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-13	〃	第③-Z層	在地土器	鉢	(23.4)	—	—	内：ハケ目、ナデ 外：ハケ目	
-14	〃	第③-Z層	瓦質土器	鉢	(21.3)	—	—	内：擂目？回転ナデ 外：調整不明	
-15	〃	第③-Z層	瓦質土器	不明	—	—	—	内：ナデ 外：ヘラミガキ	外面スタンプ文
-16	〃	第③-Z層	近世陶器	皿	—	—	4.5	内：施釉 外：施釉	内面見込に蛇ノ目釉ハギ
-17	〃	第③-Z層	布志名焼	鉢	(24.5)	—	—	内：施釉 外：施釉	口縁部玉縁状 貫入入る
76-1	図版13	第④層	弥生土器	壷？	—	—	—	内：ナデ 外：ナデ、ハケ目	頸部に2条の貼付突帯 2条の擬凹線 刺突文
-2	〃	第④層	土師質土器	皿	(11.6)	—	—	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-3	〃	第④層	青磁	碗	—	—	—	内：施釉 外：施釉	外面に鎬蓮弁
-4	〃	第④層	在地土器	坩堝	—	—	—	内：粗いナデ 外：ナデ	

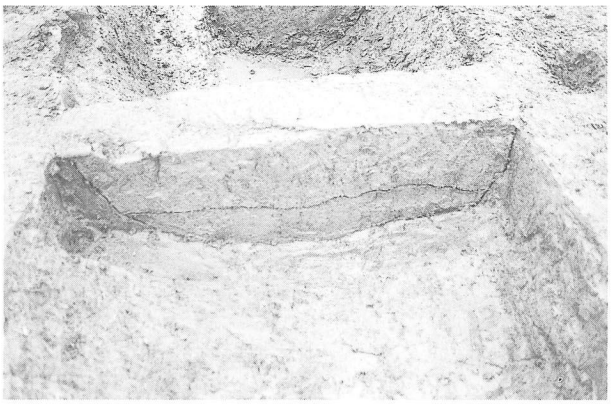
挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高	手法の特徴	備考
77-1	図版13	排水溝	須恵器		―	(7.4)	―	内：回転ナデ 外：回転ナデ、静止ヘラ切り	
-2	〃	排水溝	土師質土器	坏	―	(6.2)	―	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	外面に酸化鉄付着
-3	〃	排水溝	瓷器系陶器	甕	(13.4)	―	―	内：ナデ 外：ナデ	内外面に一部自然釉付着
-4	〃	排水溝	備前焼	擂鉢	(30.8)	―	―	内：ナデ、擂目 外：ナデ	重ね焼痕残る 内外面に灰被る
-5	〃	排水溝	備前焼	擂鉢	―	―	―	内：ナデ、擂目 外：ナデ	口唇部に灰被る
78-1	〃	その他	土師器	甕	―	―	―	内：調整不明 外：ナデ	
-2	〃	その他	土師器	坏	―	(6.8)	―	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	内面にタール付着 灯明具
-3	〃	その他	青磁 (粉青沙器)	碗	―	(4.3)	―	内：施釉 外：施釉	内面見込、高台畳付に胎土目積痕
79-1	〃	その他	須恵器	甕	―	―	―	内：ナデ 外：ナデ	
-2	〃	その他	土師質土器	坏	15.7	6.5	3.6	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転糸切	
-3	〃	その他	土師質土器	坏	10.4	5.0	3.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ	
-4	〃	その他	土師質土器	坏	―	(9.0)	―	内：調整不明 外：調整不明	

出土遺物観察表（土器以外）

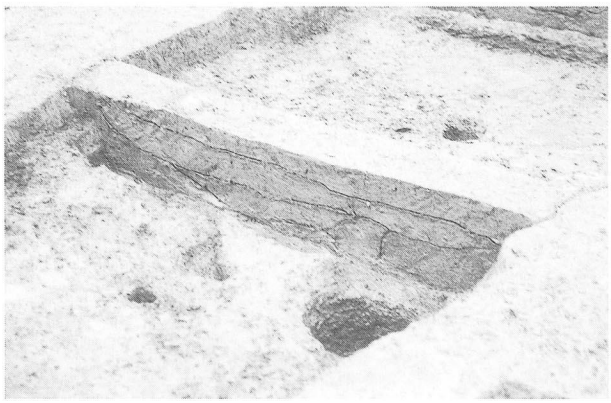
挿図番号	写真	出土地点	種別	器種	縦長	横幅	肥厚	備考
16-2	図版７	ＳＤ０５	石		4.4	4.1	3.0	赤瑪瑙
17-7	〃	ＳＤ０７	石製品	茶臼	(9.7)	(5.5)	(2.8)	
20-7	図版８	ＳＤ０２	石製品	砥石	6.5	4.1	0.8	１面を砥面として使用 穿孔あり
-8	〃	ＳＤ０２	鉄製品	刀子？	20.1	1.4	0.3	
38-1	図版13	ＳＫ１１	金属製品	古銭	2.4	2.4	0.07	開元通寶（初鋳：唐６２１）
-2	〃	ＳＫ１１	金属製品	古銭	2.4	2.4	0.08	至和通寶（初鋳：北宋１０５４・篆書）
47-1	図版10	ＳＫ７２	木製品	曲物底板	(12.1)	(3.1)	0.7	
51-1	図版13	ＳＫ４６	金属製品	古銭	2.3	2.3	0.05	
54-1	〃	ＳＫ４７	金属製品	古銭	2.3	2.4	0.08	嘉祐通寶（初鋳：北宋１０５６・篆書）
-2	〃	ＳＫ４７	金属製品	古銭	2.5	2.5	0.10	永楽通寶（初鋳：明１４０３）
56-3	図版10	ＳＫ１５	石製品	磨製石器	(4.1)	3.0	0.5	
62-2	〃	ＳＸ０３	金属製品	古銭	2.1	2.1	0.05	洪武通寶（初鋳：１３６８）
-3	〃	ＳＸ０３	金属製品	古銭	2.2	2.2	0.10	洪武通寶（初鋳：１３６８）
-4	〃	ＳＸ０３	金属製品	古銭	2.1	2.1	0.10	洪武通寶（初鋳：１３６８）
-5	〃	ＳＸ０３	金属製品	古銭	2.1	2.1	0.10	洪武通寶（初鋳：１３６８）
-6	〃	ＳＸ０３	金属製品	古銭	2.1	2.1	0.09	洪武通寶（初鋳：１３６８）
-7	〃	ＳＸ０３	金属製品	古銭	2.1	2.1	0.08	洪武通寶（初鋳：１３６８）
-8	〃	ＳＸ０３	金属製品	古銭	2.2	2.2	0.08	祥符元寶
-9	〃	ＳＸ０３	金属製品	古銭	2.1	2.1	0.08	洪武通寶（初鋳：１３６８）
-10	〃	ＳＸ０３	金属製品	古銭	2.2	2.2	0.09	□寧元□
-11	〃	ＳＸ０３	金属製品	古銭	2.2	2.2	0.10	洪武通寶（初鋳：１３６８）
-12	〃	ＳＸ０３	金属製品	古銭	2.0	2.0	0.10	不明
-13	〃	ＳＸ０３	木製品	櫛	(4.4)	3.3	0.9	
-14	〃	ＳＸ０３	木製品	数珠	0.6	0.65	0.2	
-15	〃	ＳＸ０３	木製品	数珠	0.5	0.55	0.25	
-16	〃	ＳＸ０３	木製品	数珠	0.65	0.7	0.3	
-17	〃	ＳＸ０３	木製品	数珠	0.6	0.65	0.35	
-18	〃	ＳＸ０３	木製品	数珠	0.6	0.65	0.25	
-19	〃	ＳＸ０３	木製品	数珠	0.6	0.7	0.25	
-20	〃	ＳＸ０３	木製品	数珠	0.6	0.75	0.3	
-21	〃	ＳＸ０３	木製品	数珠	0.5	0.5	0.25	
-22	〃	ＳＸ０３	木製品	数珠	0.55	0.7	0.3	
66-3	〃	ＳＥ０４	木製品	不明	10.1	4.0	0.3	
69-9	図版11	Ｐ２９	石製品	砥石	7.5	6.5	3.9	
72-12	〃	第③層	土製品	土製支脚				
74-11	〃	第③層	土製品	瓦	(6.9)	(8.0)	2.6	
-12	〃	第③層	石製品	砥石	5.2	3.4	1.5	２面を砥石として利用
-13	図版13	第③層	金属製品	古銭	2.4	2.4		太平通寶（初鋳：北宋９７６）
	〃	第③層	金属製品	古銭				宣和通寶（初鋳：北宋１１１９）
-14	〃	第③層	金属製品	古銭	2.4	2.3	0.10	紹聖元寶（初鋳：北宋１０９４）
78-4	〃	その他	金属製品	古銭	2.4	2.4	0.10	景徳元寶（初鋳：北宋１００４）
-5	〃	その他	金属製品	古銭	2.4	2.2	0.12	熙寧元寶（初鋳：北宋１０６８・篆書）
79-5	〃	その他	金属製品	古銭	2.5	2.5	0.09	元□□寶？（篆書）



SD06　土層堆積状況



SD05　土層堆積状況



SD07　土層堆積状況

SD08　土層堆積状況

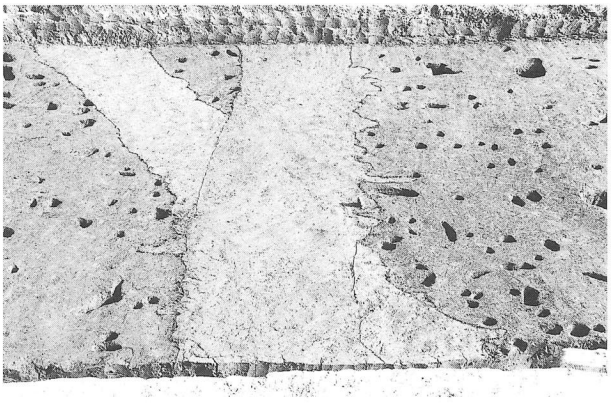
SD09　土層堆積状況

SD02ほか　検出状況

SD02　遺物出土状況

SD17　完掘状況

図版2



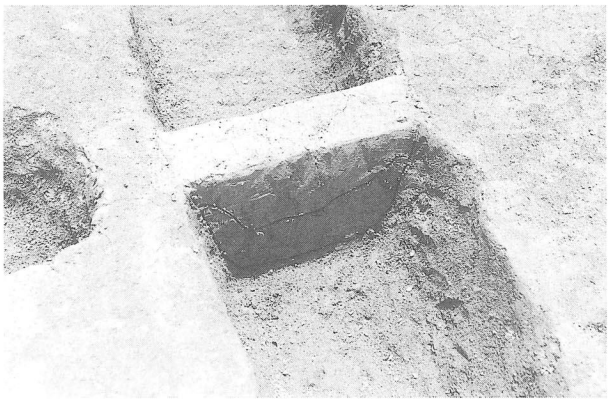
SD14・SD15　検出状況

SD14・SD15　完掘状況

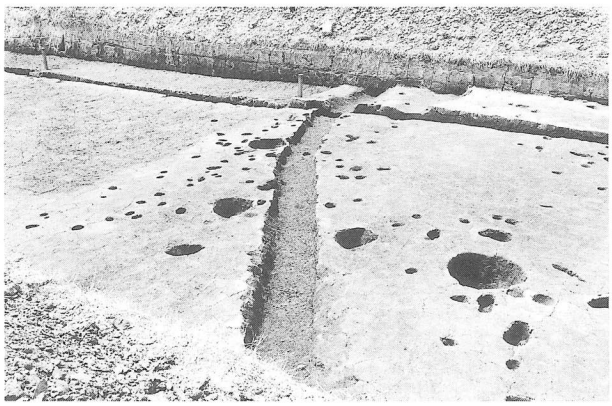
SD19・SD20

SD22　完掘状況

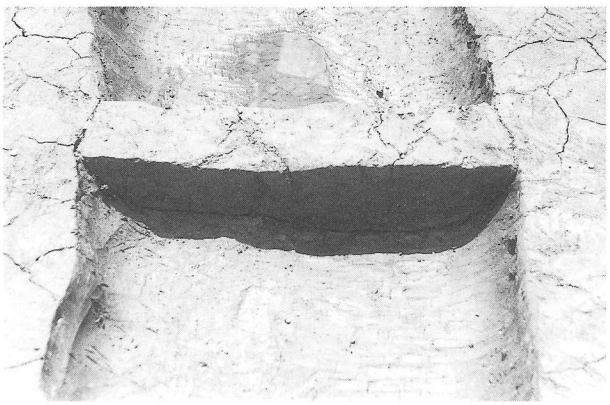
SD23・SD24　完掘状況



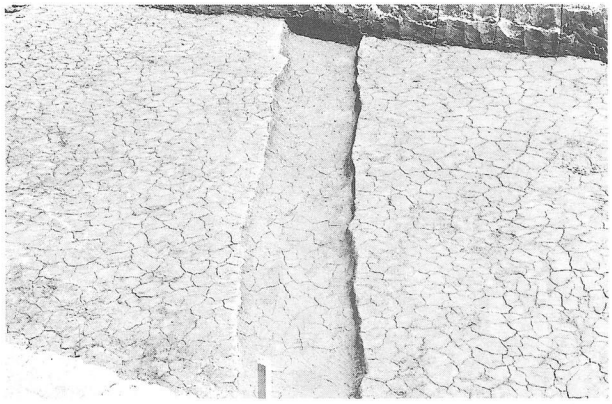
SD28　土層堆積状況



SD28　完掘状況

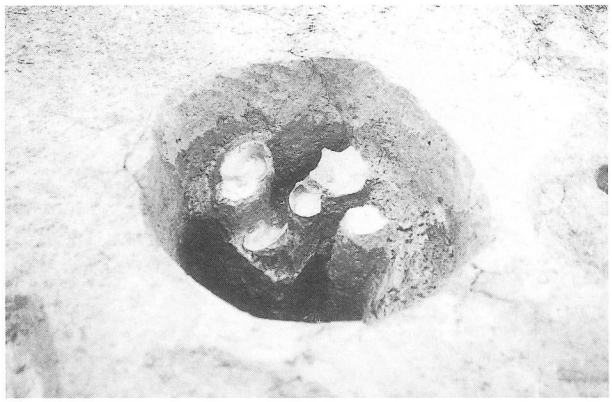


SD29　土層堆積状況

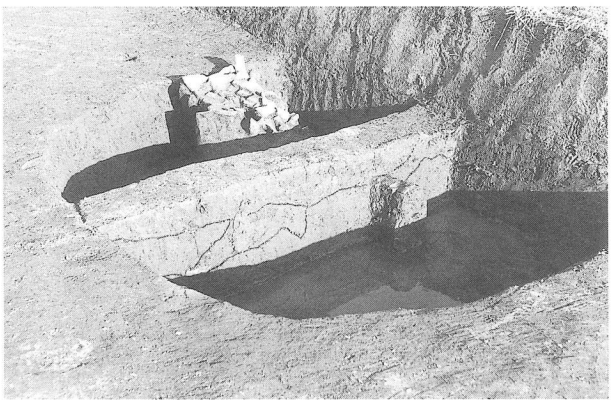


SD29　完掘状況

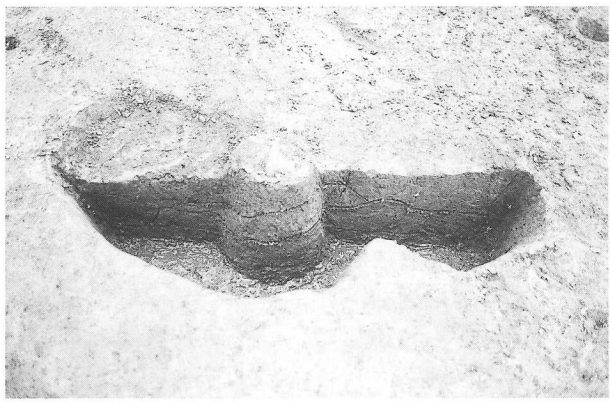
SK09　土層堆積状況



SK09　遺物出土状況

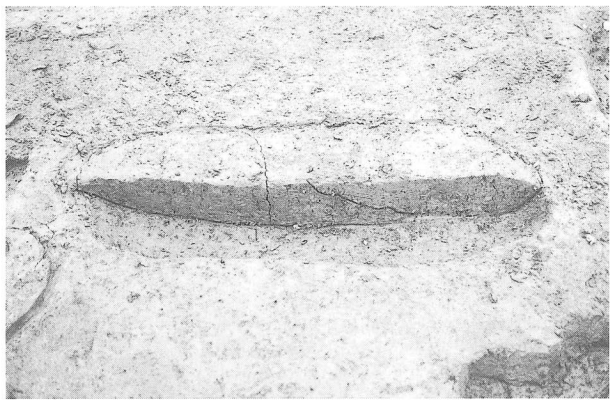


SK17　土層堆積状況

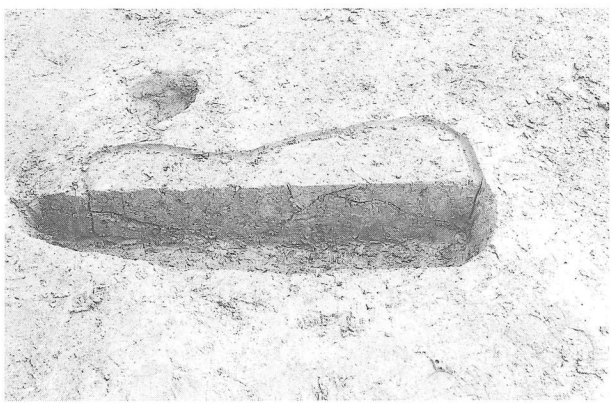


SK06　土層堆積状況

SK07　土層堆積状況

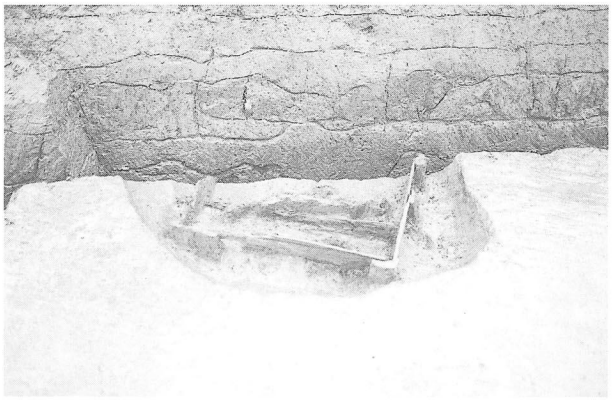


SK08　土層堆積状況



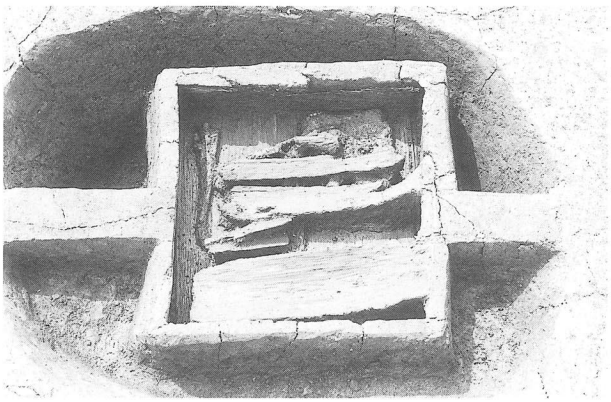
SK11　土層堆積状況

図版4



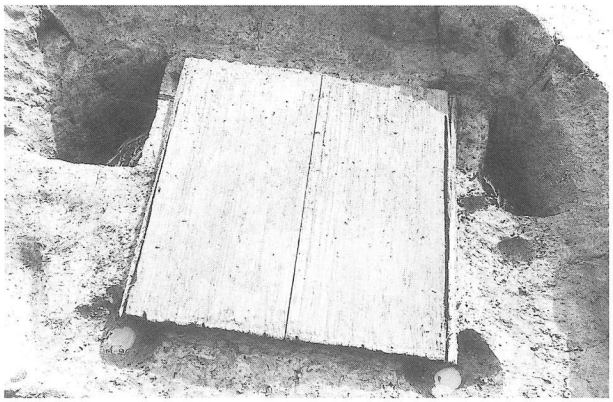
SX01　土層堆積状況

SX01

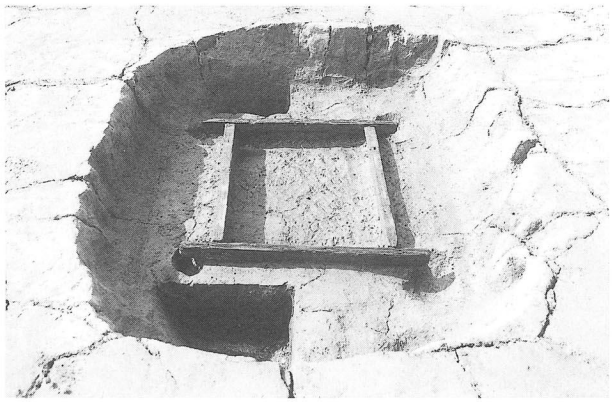


SX02　木棺蓋板出土状況

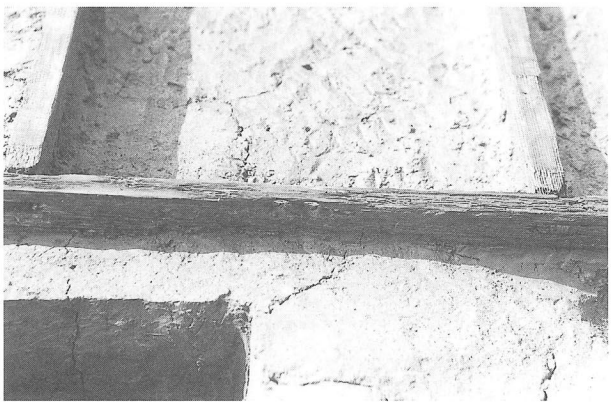
SX02　人骨出土状況



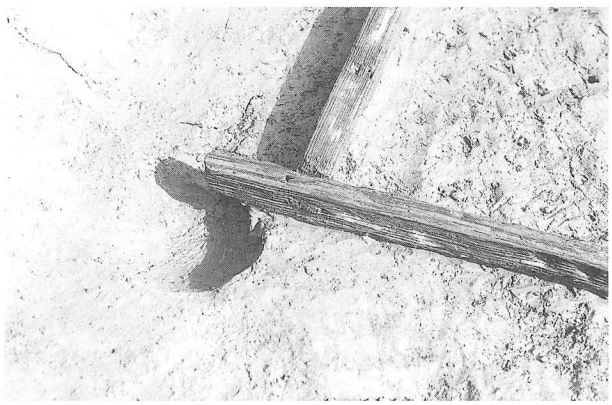
SX02　木棺底板出土状況



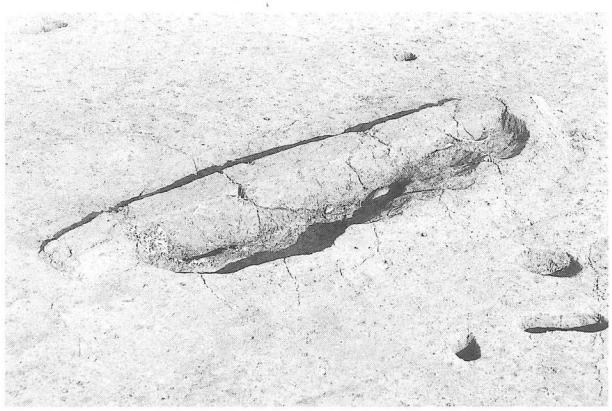
SX02　木棺底板支木出土状況



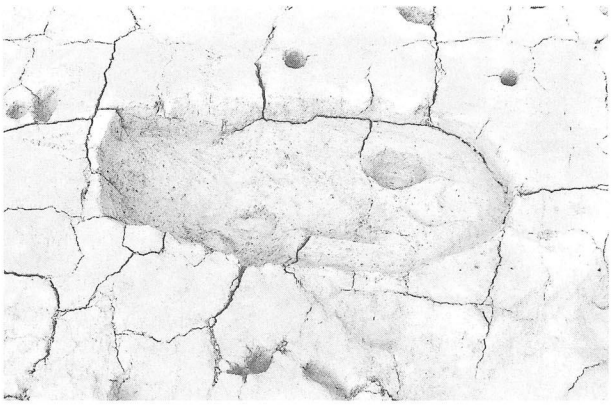
SX02　木棺底板支木出土状況2



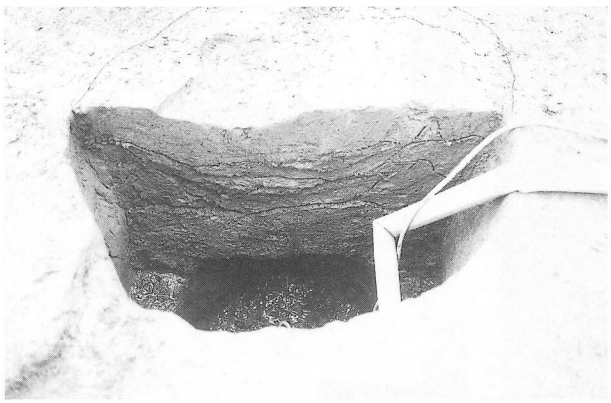
SX02　木棺底板支木出土状況3



SX03　土層堆積状況

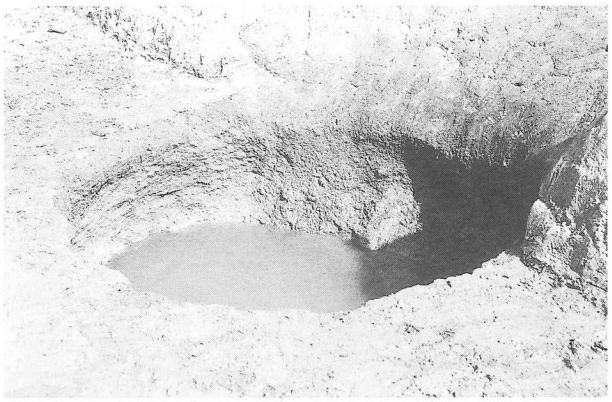


SX03　完掘状況

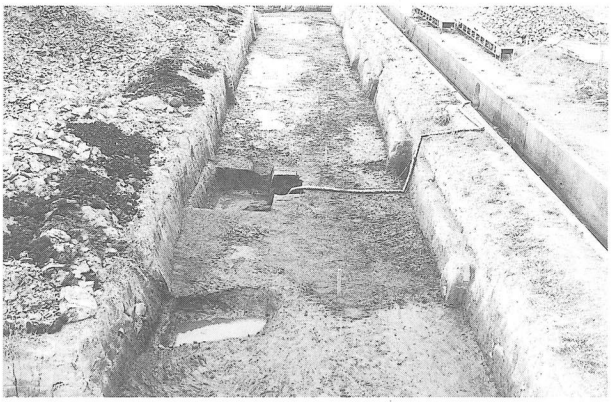


SE01　土層堆積状況

SE02　完掘状況

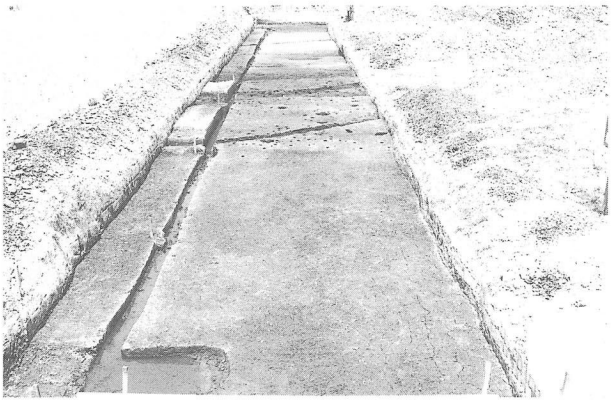


SE03　完掘状況



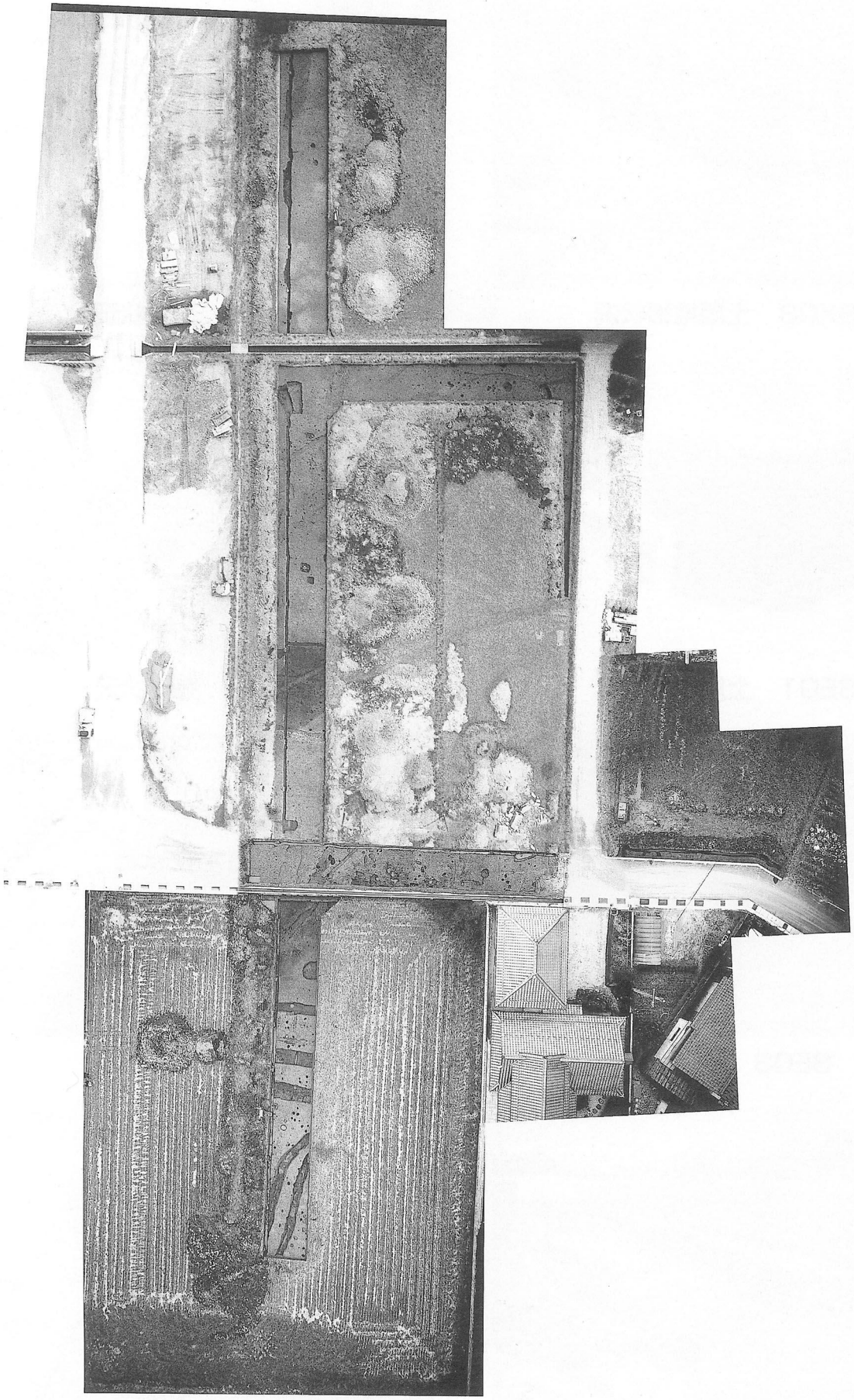
5層上面検出状況1

5層上面検出状況2

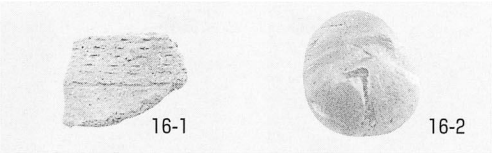


5層上面完掘状況

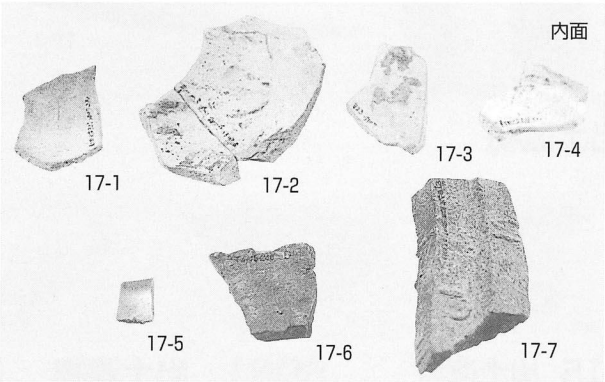
図版6

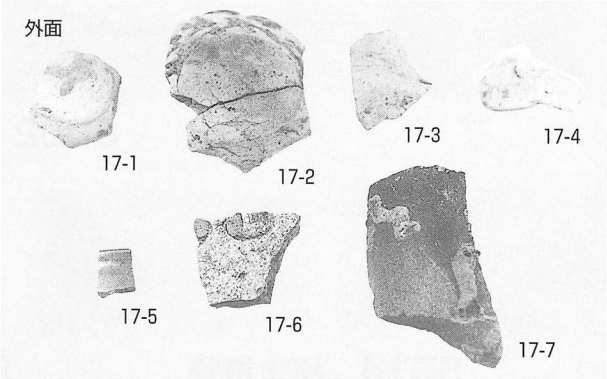


遺跡空撮写真

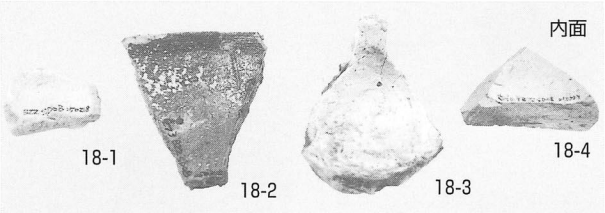


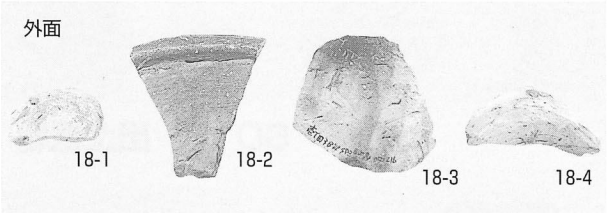
SD05　出土遺物



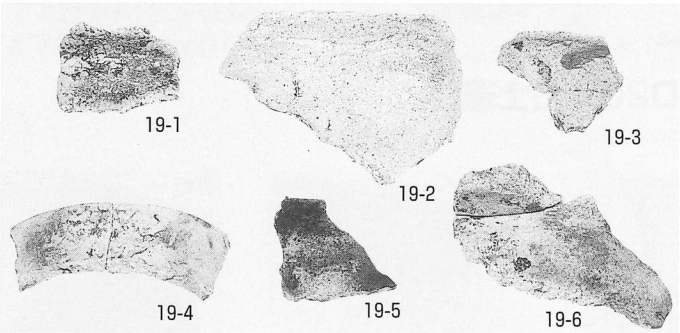


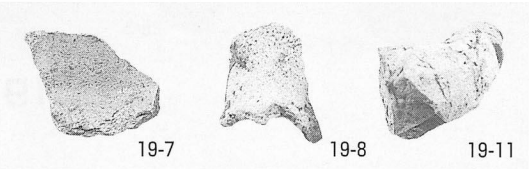
SD07　出土遺物

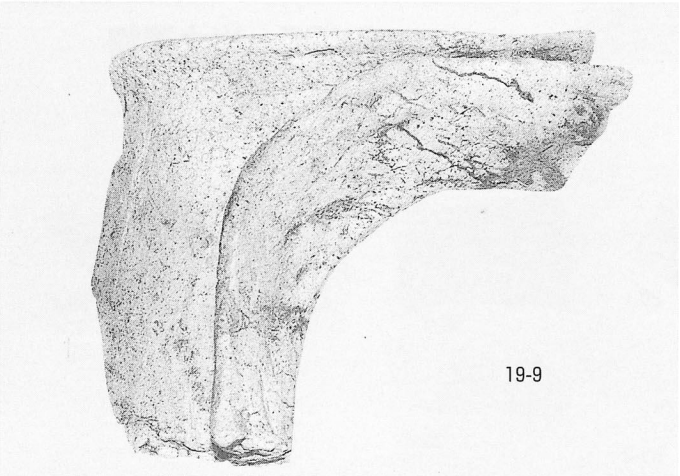


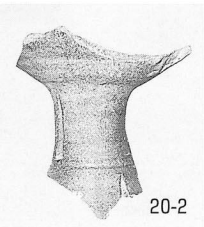


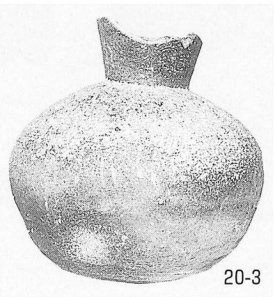
SD08　出土遺物





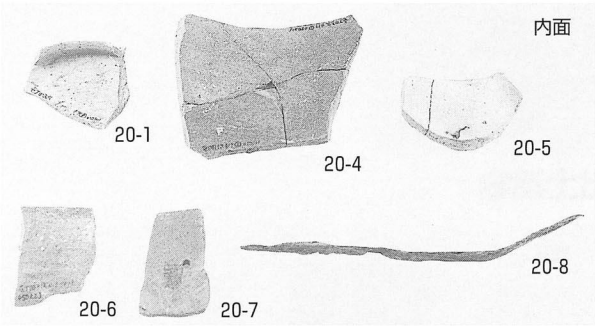


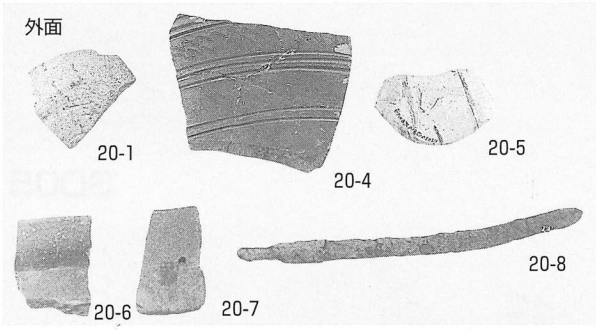




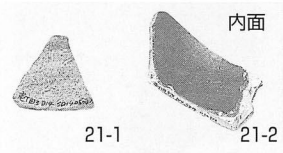
SD02　出土遺物

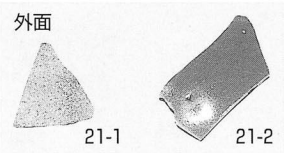
図版8





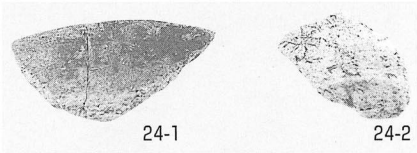
SD02　出土遺物



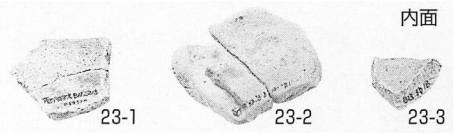


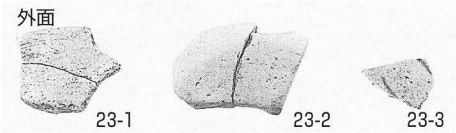
SD14　出土遺物

SD15　出土遺物

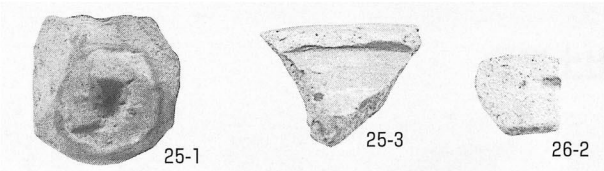


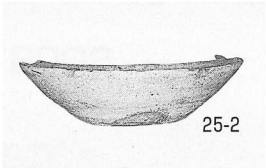
SD21　出土遺物

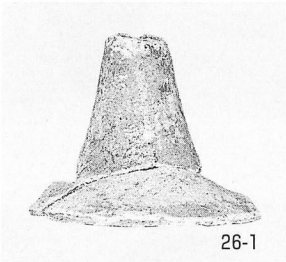




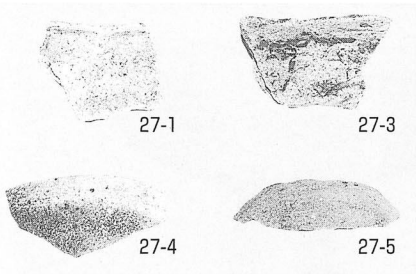
SD18　出土遺物

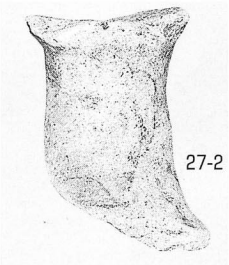




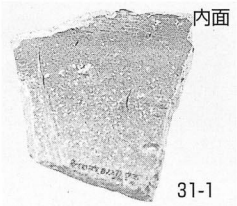


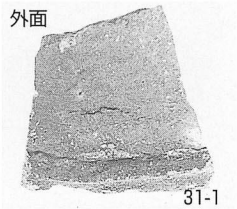
SD19・SD20　出土遺物



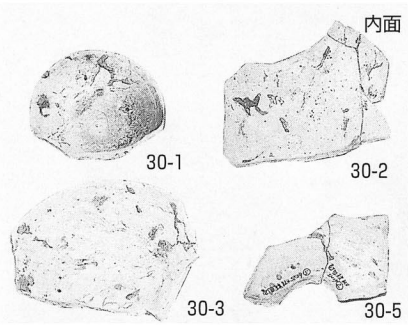


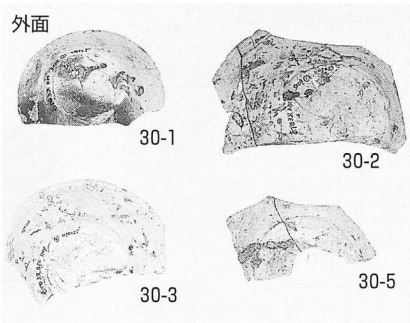
SD25　出土遺物

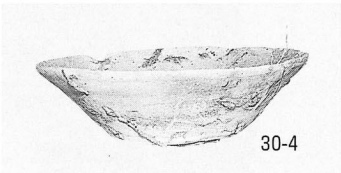




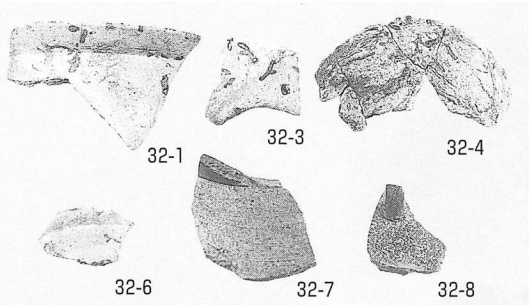
SK35　出土遺物

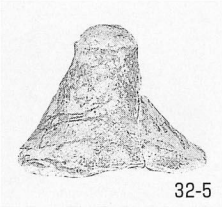


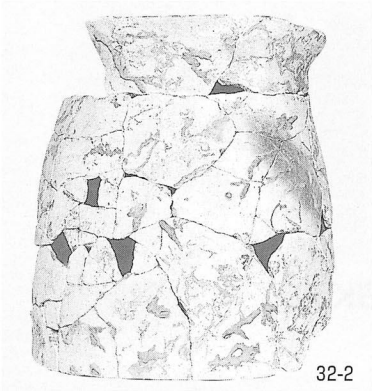




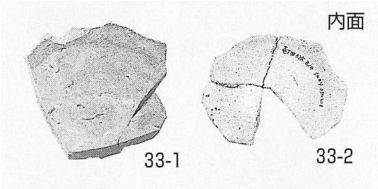
SK09　出土遺物

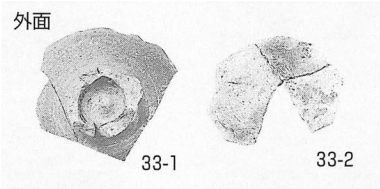




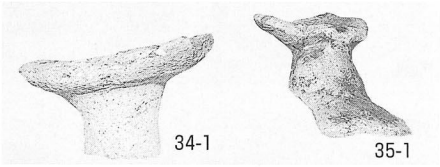


SK17　出土遺物

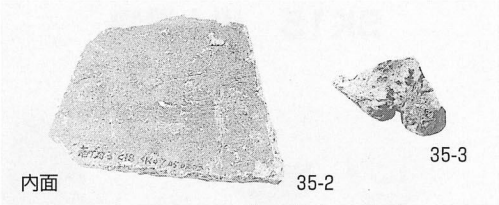


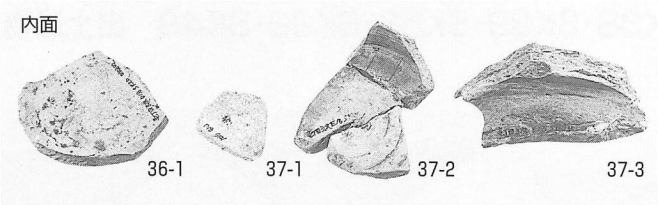


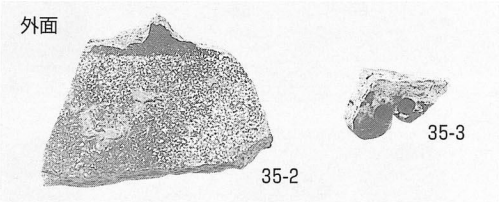
SK04　出土遺物



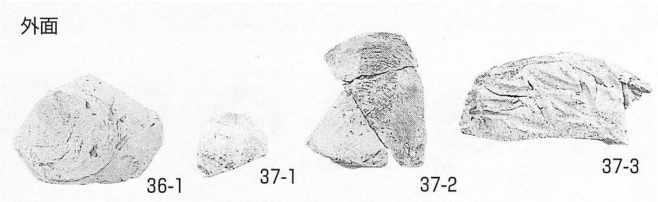
SK06・SK07　出土遺物



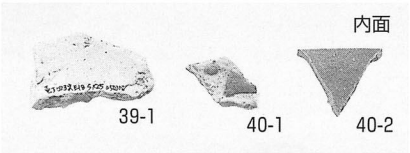


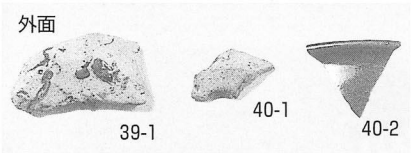


SK07　出土遺物

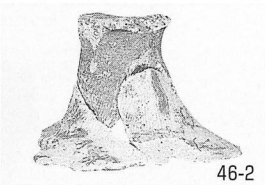


SK20・SK21　出土遺物

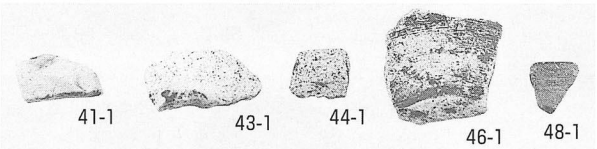




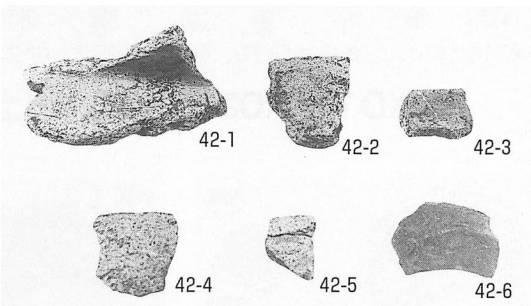
SK25・SK26　出土遺物



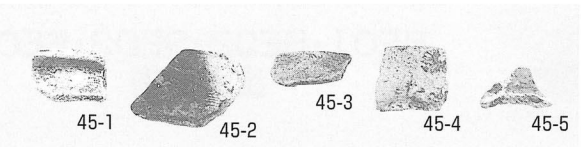
SK65　出土遺物



SK30・SK67・SK57・SK65・SK73　出土遺物



SK69　出土遺物



SK64　出土遺物